公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第242集

豊中市

蛍　池　北　遺　跡

宗教法人　神慈秀明会教会（豊中支部）建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013年11月

公益財団法人　大阪府文化財センター

公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第242集

豊中市

蛍　池　北　遺　跡

宗教法人　神慈秀明会教会（豊中支部）建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

公益財団法人　大阪府文化財センター

序　　文

遺跡がある豊中市は、旧山陽道（西国街道）や能勢街道といった主要幹線道が縦横に延び、猪名川や神崎川を利用した水運と併せて古来より重要な交通の要衝として栄えてきました。と同時に、豊中市域北側に広がる千里丘陵では、古墳時代から奈良時代に営まれた桜井谷窯跡群が操業され、生産面においても重要な役割を担ってきました。我が国の古代窯業を考える上で、看過出来ない地域でもあります。

市域では、大阪国際空港・中国自動車道・阪神高速道路大阪池田線・阪急電鉄宝塚線・国道176号等の主要な交通網が整備され、古来の交通の要衝としての地理的環境を継承し、20世紀初め頃からは、商都大阪のベッドタウンとして急激な変貌を遂げて行きました。

さて、今回報告いたします蛍池北遺跡は、眼前に西摂平野を望む、眺望豊かな段丘上に位置しております。遺跡の北方や東方には、古代以来の主要幹線道である旧山陽道（西国街道）や能勢街道がはしり、まさしく要衝の地であったことが窺える地域にあたります。

蛍池北遺跡は、昭和初期からその存在が知られておりましたが、長きに亘り遺跡周辺で開発が行なわれなかったこともあり、遺跡の具体像が詳らかになっておりませんでした。昭和43・44（1968・69）年、中国自動車道・大阪中央環状線建設に伴う大規模な発掘調査が実施されたことに端を発し、その後は、大阪モノレール建設や住宅地開発等に伴う調査が重ねられて来ました。特に、嚆矢となった中国自動車道・大阪中央環状線建設に伴う調査では、弥生時代中期の墓域と居住域の関係が明らかとなり、弥生時代の集落構造を解明する上で、さらに学史的にも重要な遺跡となっています。

今回の調査地は、遺跡南部の閑静な住宅地の一角に位置し、これまであまり調査が行なわれていない部分にあたります。調査では近世期の耕作地や平安時代後半の建物群を検出しました。この成果は、従来描かれてきた蛍池北遺跡の姿とは異なるもので、地域の文化・歴史を復元する上で貴重な新知見を得ることとなりました。遺跡周辺に広がる閑静な住宅地の足元には、今もなお、連綿と続いた人々の豊かな営みの歴史が眠っており、これからも私たちに新たな発見と驚きを与えてくれることになるものと思われます。

今回の調査成果やこれまで蓄積されてきた成果が、豊中市のみならず多くの地域で活用され、文化財に対する意識をより高めてくれるものと期待してやみません。

最後になりましたが、発掘調査及び遺物整理事業の実施にあたり、多大な協力を賜りました、宗教法人神慈秀明会、大阪府教育委員会、豊中市教育委員会、豊中市郷土資料室、株式会社島田組をはじめ、関係各位に深く謝意を表しますとともに、今後とも当センターの事業により一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成25年11月

公益財団法人　大阪府文化財センター

理事長　田邉　征夫

例　　言

1．本書は大阪府豊中市蛍池北町１丁目48に所在する蛍池北遺跡第26次調査の発掘調査報告書である。

2．調査は、宗教法人神慈秀明会教会（豊中支部）建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成25（2013）年４月１日～平成26（2014）年３月31日まで、宗教法人神慈秀明会の委託を受け、豊中市教育委員会の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地における調査は平成25（2013）年４月22日～６月28日に行なった。遺物整理作業は平成25（2013）年７月１日～８月30日の間に行ない、平成25（2013）年11月29日に本書の刊行を以って完了した。

3．調査及び整理作業は以下の体制で実施した。

〔平成25（2013）年度〕

事務局次長兼総務企画課長　江浦　洋、調整課長　岡本茂史、調査課長　岡戸哲紀、

調査第二課長補佐　市本芳三、技師　新海正博

4．遺物写真撮影は調査課専門調査員　片山彰一が行なった。

5．発掘調査及び整理作業の過程で以下の諸氏ならびに諸機関にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。

岡本敏行（大阪府教育委員会）、服部聡志・津川雅義・清水　篤・橘田正徳・陣内高志（豊中市教育委員会）、浅田尚子（豊中市郷土資料室）、豊中市教育委員会、大阪府教育委員会、宗教法人神慈秀明会豊中支部、木原千利設計工房、株式会社島田組

6．本書の作成は、執筆・編集を新海が担当した。

7．本書に関わる蛍池北遺跡についての写真・実測図などの記録類・出土遺物は豊中市教育委員会に移管し、同教育委員会において保管している。今後、広く活用されることを希望する。

凡　　例

1．遺構実測図の基準高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。
2．座標値は世界測地系（測地成果2000）による平面直角座標系第Ⅵ系に基づき表示し、単位はｍである。
3．全体図及び遺構実測図の方位は座標北を示す。
4．現地調査及び遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5．土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年度版　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。
6．遺構名は、検出順に通し番号（連番）の後ろに遺構の種類（例：２溝・33小穴）をつけて表示している。但し、複数の柱穴で構成される掘立柱建物や柵列に関しては、新たに１からの通し番号を掘立柱建物１・掘立柱建物２のように遺構種別の後に付与している。
7．本書では、遺構全体図は200分の１、遺構平・断面図は40分の１を原則として使用しているが、一部のものに関してはその限りではない。
8．遺物実測図の縮尺は３分の１として掲載している。写真図版の遺物は縮尺を統一していない。
9．掲載遺物は通し番号を与えて表示し、本文・挿図・写真図版ともに一致する。
10．土師器以外の陶磁器・土器類については遺物番号の後ろに種類（回転台土師器：回、須恵器：須、緑釉陶器：緑、灰釉陶器：灰、黒色土器：黒、瓦器・瓦質土器：瓦、白磁：白）の略称を付与した。但し、近世陶磁器に関しては付与していない。
11．本書を作成するにあたり、以下のものを引用および参照した。

九州近世陶磁学会編　2000　『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会10周年記念』

古代の土器研究会編　1992　『古代の土器１　都城の土器集成』

古代の土器研究会編　1993　『古代の土器２　都城の土器集成Ⅱ』

古代の土器研究会編　1994　『古代の土器３　都城の土器集成Ⅲ』

小森俊寛　2005　『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、７世紀～19世紀－』　真陽社

（財）古代学協会・古代学研究所編　1994　「第二章　土器と陶磁器」『平安京提要』　角川書店

鋤柄俊夫　1995　「第１章　大阪府南部の瓦質土器生産（１）」『日置荘遺跡』　大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財センター

積山　洋　1999　「大坂の土師質土器－主要器種を中心に－」『関西近世考古学研究』Ⅶ　関西近世考古学研究会

中世土器研究会編　1998　『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社

橋本久和　1991　「大阪北部の古代後期・中世土器の様相」『高槻市文化財年報　昭和63年・平成元年度』　高槻市教育委員会

橋本久和　2009　『中世考古学と地域・流通』　真陽社

森田克行　1990　「７　摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ　木次社

目　　次

序　　文
例　　言
凡　　例

第１章　調査に至る経過と方法 …… 1
　第１節　調査に至る経緯と経過 …… 1
　第２節　調査・整理の方法 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 5
　第１節　地理的・歴史的環境 …… 5
　第２節　蛍池北遺跡の既往の調査 …… 7
第３章　調査成果 …… 10
　第１節　基本層序と遺構面 …… 10
　第２節　１区の調査 …… 16
　（１）近世期の遺構 …… 16
　（２）近世期以前の遺構と遺物 …… 20
　第３節　２区の調査 …… 35
　（１）近世期の遺構と遺物 …… 39
　（２）近世期以前の遺構と遺物 …… 41
　第４節　包含層出土の遺物 …… 56
第４章　総括 …… 60
遺物観察表

挿　図　目　次

図１　調査位置と豊中市内遺跡分布図 …… 2
図２　地区割図 …… 4
図３　蛍池北遺跡の調査区と既往の調査位置図 …… 8
図４　北壁断面図（１）……11
図５　北壁断面図（２）……12
図６　東壁断面図 ……13
図７　南壁断面図 ……14
図８　１区　近世期平面図 ……17
図９　62溝　平・断面図 ……19
図10　63・64石列　立・断面図 ……20
図11　１区　近世期以前の平面図 ……21
図12　掘立柱建物１　平・断面図及び出土遺物 ……23
図13　掘立柱建物２　平・断面図及び出土遺物 ……25
図14　小穴　断面図（１）……27
図15　小穴　平・断面図（２）……28
図16　83・85・95・96土坑・84溝他
　平・断面図 ……29
図17　83・85・95土坑・84溝出土遺物 ……30
図18　20・100溝・19谷状遺構他　断面図 ……33
図19　20・93溝・19谷状遺構・74落込み
　出土遺物 ……33
図20　落込み　断面図 ……34
図21　2区　近世期平面図 ……36
図22　62溝　平・断面図（1）……37
図23　62溝　平面図（2）及び262石列
　平・立・断面図 ……38
図24　2区　近世期以前の平面図 ……40
図25　掘立柱建物３　平・断面図 ……43
図26　掘立柱建物５　平・断面図及び出土遺物……44
図27　柵列１　断面図 ……46
図28　小穴　断面図（1）……47
図29　小穴　断面図（2）……48
図30　小穴　断面図（3）……49
図31　205・206小穴出土遺物 ……49
図32　124土坑　平・断面図 ……50
図33　111土坑　平・断面図及び出土遺物 ……51
図34　112・164土坑　平・断面図及び出土遺物 ……53
図35　19谷状遺構・264溝　断面図及び出土遺物 ……54
図36　落込み　断面図 ……55
図37　第2層及び鋤溝出土遺物 ……57
図38　第3・5層出土及び地山面精査時出土遺物 ……58
図39　蛍池北遺跡　第8・26次調査平面図 ……61

写　真　図　版　目　次

図版１　1948年米軍撮影航空写真
図版２　１・２区
　１．１区北壁東側　断面（南から）
　２．１区北壁中央　断面（南から）
　３．１区北壁西側　断面（南東から）
　４．２区南壁東側　断面（北から）
　５．２区南壁西側　断面（北から）
図版３　１区
　１．第１面　全景（東から）
　２．第１面　東側遺構　検出状況（南から）
　３．第１面　西側遺構　検出状況（南から）
　４．第１面　東側遺構　完掘状況（南から）
　５．第１面　西側遺構　完掘状況（南から）
図版４　１区
　１．掘立柱建物１　全景（南から）
　２．86柱穴　断面（西から）
　３．75柱穴　断面（北西から）
　４．103柱穴　断面（南東から）
　５．106柱穴　断面（南西から）
図版５　１区
　１．掘立柱建物２　全景（南から）
　２．33（左）・34（右）柱穴　断面（南西から）

３．15 柱穴　断面（北から）
４．48（左）・47（右）柱穴　断面（西から）
５．49 柱穴　断面（南から）
図版６　１区
１．83 土坑・84 溝他　（西から）
２．83 土坑　遺物出土状況（南から）
３．95 土坑　遺物出土状況（南西から）
図版７　１区
１．83 土坑　断面（南西から）
２．83 土坑　断面（北東から）
３．85 土坑（左）・84 溝（右）　断面（東から）
図版８　１区
１．50 小穴　断面（北から）
２．88 小穴　断面（西から）
３．88 小穴　遺物出土状況（西から）
図版９　１区
１．62 溝　検出状況（南から）
２．62 溝　蓋石除去状況（南から）
３．62 溝　断面（南から）
４．94 溝　断面（西から）
５．41 落込み　断面（東から）
６．79 落込み　断面（南東から）
図版 10　２区
１．第１面　全景（東から）
２．第１面　中央部遺構　完掘状況（南から）
３．第１面　西側遺構　完掘状況（南から）
図版 11　２区
１．掘立柱建物３　全景（南から）
２．224 柱穴　断面（北東から）
３．225 柱穴　断面（南西から）
４．229 柱穴　断面（北西から）
５．231 柱穴　断面（南西から）
図版 12　２区
１．掘立柱建物５　全景（南から）
２．107 柱穴　断面（南東から）
３．260 柱穴　断面（北東から）
４．257（左）・251（右）柱穴　断面（北西から）
５．253（左）・254（右）柱穴　断面（南西から）
図版 13　２区
１．124 土坑　検出状況（南から）
２．124 土坑　完掘状況（南から）
３．124 土坑　断面（南から）
４．124 土坑　断面（北から）
５．124 土坑北半　断面（西から）
６．124 土坑南半　断面（東から）
図版 14　２区
１．111 土坑　検出状況（南から）
２．111 土坑　遺物出土状況（南から）
３．111 土坑　断面（北西から）
４．111 土坑　断面（南東から）
５．164 土坑　断面（南東から）
６．164 土坑　完掘状況（南から）
図版 15　２区
１．112 土坑　検出状況（西から）
２．112 土坑　礫出土状況（西から）
３．112 土坑　断面（南西から）
４．112 土坑　断面（北東から）
５．223 土坑　断面（北から）
６．132 小穴　断面（西から）
７．170 小穴　断面（南から）
８．221（左）・222（右）小穴　断面（北から）
図版 16　２区
１．62 溝　検出状況（南から）
２．62 溝　蓋石除去状況（北から）
３．62 溝　分岐部分（南から）
４．19 谷状遺構・264 溝　断面（南東から）
５．113 落込み　断面（南東から）
６．157 落込み　断面（南東から）
図版 17　１区　83 土坑出土遺物
図版 18　１区　遺構出土遺物
図版 19　２区　遺構出土遺物
図版 20　１・２区　包含層出土遺物

第１章　調査に至る経過と方法

第１節　調査に至る経緯と経過

蛍池北遺跡は、池田市石橋４丁目・住吉２丁目から豊中市蛍池北町・蛍池東町３・４丁目にかけて広がる遺跡で、大阪平野を南流する猪名川の左岸、待兼山・刀根山丘陵の西側に展開する低位段丘面上に位置している。当遺跡は豊中市側では蛍池北遺跡と称され、池田市側では宮の前遺跡と呼ばれるが、同一の遺跡である。

蛍池北遺跡は、昭和初期に池田市側の地元住民により土器や石器等の遺物が採集され、遺跡の存在が明らかとなっていた。また、早くから学会誌において遺跡と出土遺物の紹介がなされており、広く周知されるようになった。しかし、長らく発掘調査が実施されてこなかったこともあり、遺跡の実態を把握するに至るまでには時間を要していた。そのような中、昭和43・44（1968・69）年、大阪府教育委員会による中国自動車道・府道大阪中央環状線建設に伴う発掘調査が嚆矢となり、弥生時代中期、古墳時代中～後期、奈良～鎌倉時代の遺構・遺物が確認され、遺跡の実態が明らかとなった。

その後、個人住宅や共同住宅の建設、中国自動車道高架橋改良工事、大阪モノレール建設工事等に伴い、豊中市・池田市両教育委員会、大阪府教育委員会、財団法人　大阪文化財センター・大阪府文化財調査研究センター（現：公益財団法人　大阪府文化財センター、以下「当センター」とする）によって蛍池北・宮の前遺跡において80地点を超える調査が積み重ねられている。こうした発掘調査により、当遺跡は弥生時代中期中葉～後期前半及び古代を盛期とし、後期旧石器時代～近世に至る複合遺跡であることが明らかになってきた。

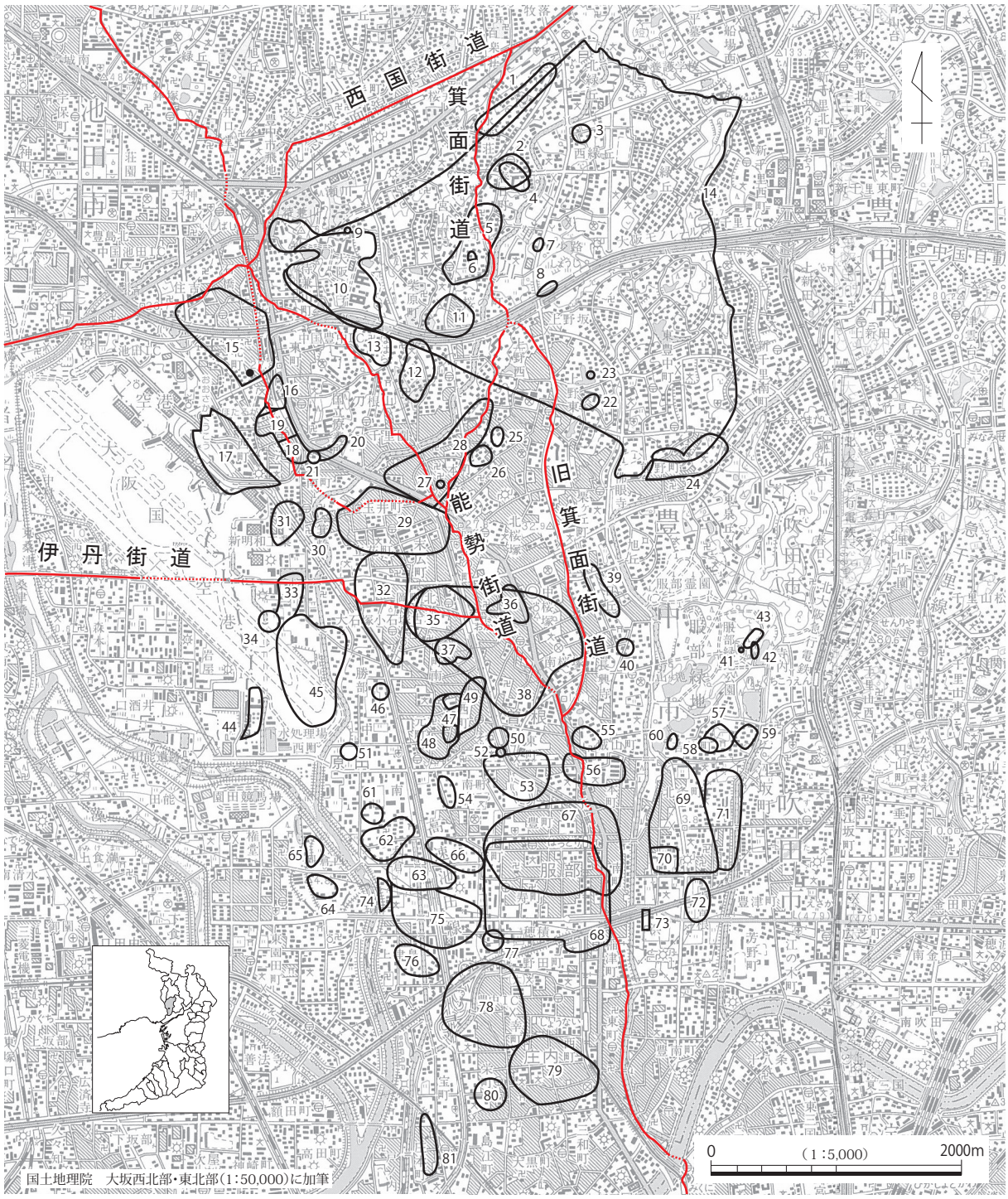
今回の調査は、豊中市蛍池北町１丁目48番地における宗教法人神慈秀明会による教会（豊中支部）建設工事に伴う発掘調査で、蛍池北遺跡の第26次調査にあたる。平成24（2012）年、宗教法人神慈秀明会から教会（豊中支部）の建築申請が豊中市教育委員会に提出された。これを受けて、平成25（2013）年1月に豊中市教育委員会により現地での確認調査が実施され、柱穴や土坑等の遺構や遺物が確認された。この結果、建設に伴う遺跡の損壊が避けられないことが明らかとなり、記録保存のための発掘調査が必要であると判断された。

この後、同年３月、豊中市教育委員会から当センターに発掘調査の依頼がなされ、宗教法人神慈秀明会・豊中市教育委員会・株式会社島田組・当センターの四者で協議を行ない、発掘調査事業に関わる四者協定を結んだ。翌４月に、宗教法人神慈秀明会から発掘調査及び遺物整理事業の委託を受け、当センターで平成25（2013）年４～６月に蛍池北遺跡第26次調査として発掘調査を、同年７～８月に遺物整理事業を実施する運びとなった。なお、発掘調査の実施に際しては、株式会社島田組に掘削業務と測量業務の協力を得た。

第２節　調査・整理の方法

発掘調査及び整理作業は、当センター『遺跡調査基本マニュアル』 2010に則り実施している。

調査区割　遺物の取り上げや遺構の位置確認に関しては、当センターマニュアルに基づき平面直角座



1.太鼓塚古墳群
2.野畑春日町古墳群
3.野畑遺跡
4.野畑春日町遺跡
5.小路遺跡
6.武蔵国岡部藩安部氏桜井谷陣屋跡
7.桜井谷石器散布地
8.羽鷹下池南遺跡
9.待兼山古墳
10.待兼山遺跡
11.内田遺跡
12.柴原遺跡
13.北刀根山遺跡
14.桜井谷窯跡群
15.蛍池北(宮の前)遺跡
16.蛍池東遺跡
17.蛍池西遺跡
18.蛍池遺跡
19.麻田藩陣屋跡
20.南刀根山遺跡
21.御神山古墳
22.上野遺跡
23.青池古墳
24.熊野田遺跡
25.金寺山廃寺
26.新免宮山古墳群
27.金寺山廃寺塔刹柱礎石
28.本町遺跡
29.新免遺跡
30.箕輪東遺跡
31.箕輪遺跡
32.山ノ上遺跡
33.勝部北遺跡
34.走井遺跡
35.岡町北遺跡
36.岡町遺跡
37.岡町南遺跡
38.桜塚古墳群
39.下原窯跡群
40.長興寺遺跡
41.梅塚古墳
42.埴輪散布地
43.大坂城鉄砲奉行支配焔硝蔵跡
44.原田西遺跡
45.勝部遺跡
46.勝部東遺跡
47.原田城跡(北城)
原田城跡(南城)
48.原田遺跡
49.曽根遺跡
50.曽根東遺跡
51.原田中町遺跡
52.曽根埴輪窯跡
53.豊島北遺跡
54.曽根南遺跡
55.城山遺跡
56.服部遺跡
57.若竹町遺跡
58.石蓮寺廃寺
59.寺内遺跡
60.石蓮寺遺跡
61.利倉北遺跡
62.利倉遺跡
63.利倉南遺跡
64.利倉西遺跡
65.椎堂の前遺跡
66.服部西遺跡
67.穂積遺跡
68.穂積村囲堤
69.小曽根遺跡
70.春日大社南郷目代今西氏屋敷
71.北条遺跡
72.小曽根南遺跡
73.上総国飯野藩保科氏浜陣屋跡
74.上津島川床遺跡
75.上津島遺跡
76.上津島南遺跡
77.穂積ポンプ場遺跡
78.島田遺跡
79.庄内遺跡
80.島江遺跡
81.庄本遺跡

● 調査位置

図1　調査位置と豊中市内遺跡分布図

標系第Ⅵ系を基準とした区画を使用した。これに則り、第Ⅰ～第Ⅳまでの大小４段階の区画を設定した。第Ⅰ区画は、大阪府の南西端 X=－192,000ｍ・Y=－88,000ｍを基準とし、南北方向に６㎞・東西方向に８㎞で区画する。表示は、南西端を基点に北へＡ～Ｏ、東へ０～８とする。第Ⅱ区画は、第Ⅰ区画を南北方向に1.5㎞、東西方向に2.0㎞でそれぞれ４分割し、計16区画を設定する。表示は南西端を１とし、東へ４まで、あとは西端を５、９、13、北西端を16と平行式で表す。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100ｍ単位で、南北15、東西20に区画する。表示は北東端を基点に、南へＡ～Ｏ、西へ１～20とする。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画を10ｍ単位で南北方向、東西方向ともに10に区画する。表示は北東端を基点に南へａ～ｊ、西へ１～10とする。なお、方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値を用いた。

調査区の呼称　調査は、掘削に伴う排土を場内に仮置きする形で行なうこととなったため、調査地を南北で２分割して実施した。そのため、調査着手順に北側に位置する調査区を１区、南側に位置する調査区を２区として調査区名を付与した。

整理作業においては、新たに調査区の名称を振り直すことなく調査時のものを踏襲した。本書では１区から順に記述を進めている。

遺構名　調査区に関わらず、遺構の検出順に１からの通し番号を１土坑・２溝のように遺構種別の前に付与した。但し、複数の柱穴で構成される掘立柱建物や柵列に関しては、新たに１からの通し番号を掘立柱建物１・掘立柱建物２のように遺構種別の後に付与している。

掘削方法　現代の砕石層及び建物解体時の整地層、建物建設時の盛土、近世期の耕作土層を重機で掘削し、それ以下を人力によって掘削を行ない、遺構面・遺構の確認及び遺物の取り上げに努めた。

遺構面と層　機械掘削で除去した整地層や盛土を第１層とし、近世耕作土層を第２層として、上から順に第１層・第２層・・・とした。検出した遺構面は基盤層（地山）上面であり、第１面と呼称した。

遺構図　遺構面に関しては、株式会社島田組事業本部測量グループによって、トータルステーションを用いた測量が実施され、1/20・1/100の平面図を作成した。さらに、石組暗渠に関しては簡易オルソーを用いた写真測量を実施し、石組の平面図を作成した。また、個別遺構の平面図・断面図・立面図については必要に応じて1/10・1/20で適宜作成した。土層観察用の断面に関しては1/20の断面図を作成した。

写真撮影　現場での写真撮影は、６×７カメラ、35㎜カメラを使用し、それぞれ黒白フィルム、リバーサルフィルムを用いて行なった。また、写真台帳作成用にデジタルカメラを使用して撮影を行なった。なお、遺構面の全景写真撮影に関しては３段２連の写真用足場を調査地内に組んで行なった。

整理作業　主要遺構については現地で作成した実測図を編集し、遺構挿図を作成した。挿図の浄書はadobe 社製 IllustratorCS2を用いてデジタルトレースを行なった。出土遺物は、洗浄・注記・接合を行なった後、実測作業を実施した。また、一部の遺物に関しては拓本を採った。実測図は個別にデジタルトレースを行なった後、遺構または出土層位毎に編集し、遺物挿図を作成した。

現地で撮影した遺構面及び個別遺構の写真に関しては、報告書に掲載するものを選別し、現像・焼付け作業を行なった。また、出土遺物については、報告書に掲載するものを選別し実測作業と併行して写真撮影を行ない、現像・焼付け作業に入った。以上の作業と併行して文章を作成し、編集作業を実施した。また、編集作業と併行して出土遺物は報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類し、収納作業を行なった。

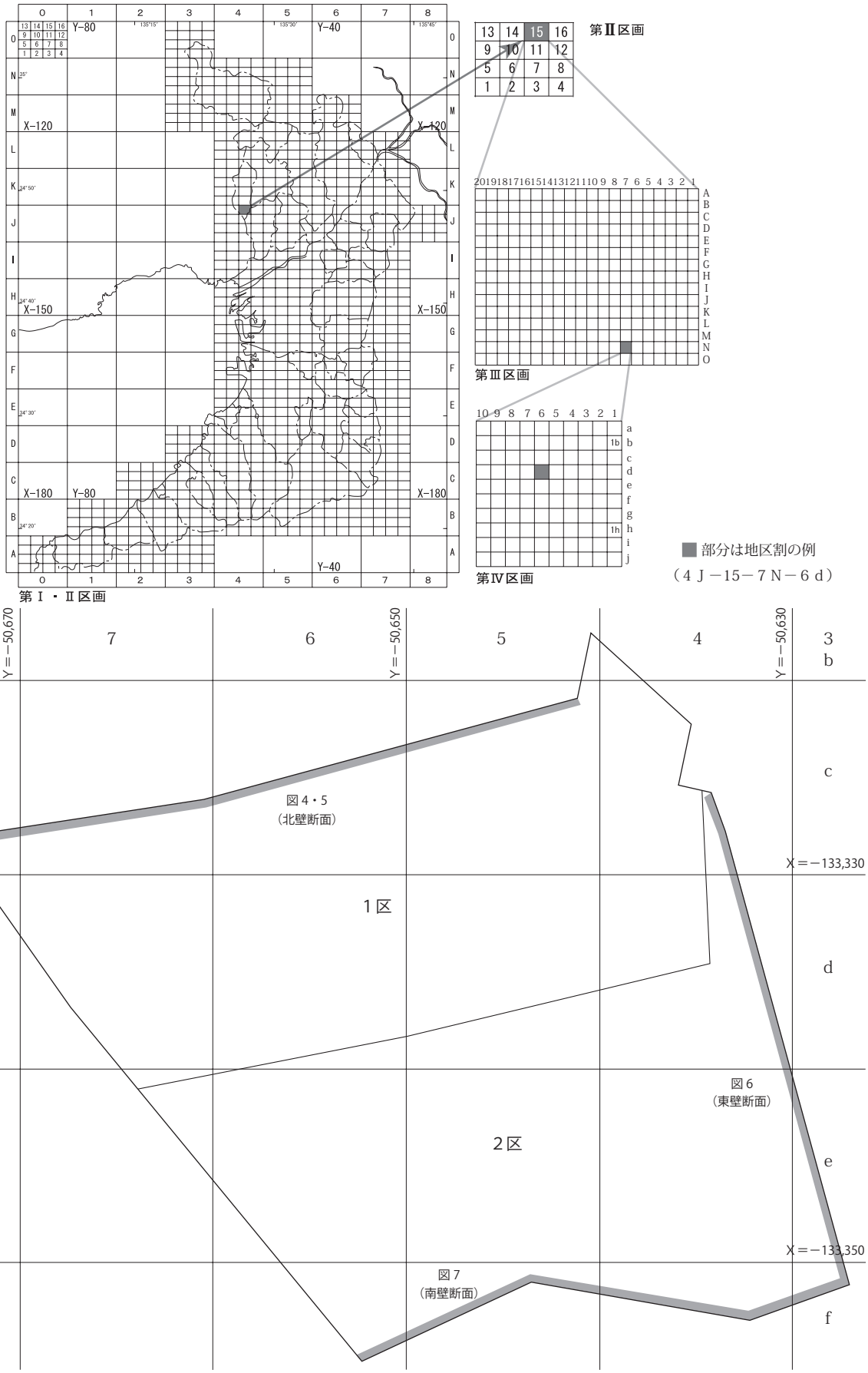

第Ⅰ・Ⅱ区画
第Ⅱ区画
第Ⅲ区画
第Ⅳ区画
■部分は地区割の例
（４Ｊ－15－７Ｎ－６ｄ）
X−120
X−150
X−180
Y−80
Y−40
Y＝−50,670
Y＝−50,650
Y＝−50,630
X＝−133,330
X＝−133,350
1区
2区
図４・５
（北壁断面）
図６
（東壁断面）
図７
（南壁断面）

図2　地区割図

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的・歴史的環境

蛍池北遺跡は大阪府の北部、池田市石橋４丁目・住吉２丁目から豊中市蛍池北町・蛍池東町３・４丁目にかけて所在する遺跡で、東西約0.6km、南北約0.9km、総面積約460,000㎡を擁する集落遺跡である。

遺跡の所在する豊中市は猪名川の左岸に位置し、市内は南北で丘陵部と沖積平野に区分することができる。当遺跡が所在する市域北部は、大阪層群の隆起によって形成された千里丘陵や待兼山丘陵と千里川を境に南側に展開する通称豊中台地とに二分される。

丘陵は待兼山を境として、東側は大阪層群上部と中・高位段丘構成層からなる尾根地形が広がり、西側は低位段丘構成層からなる台地上の平坦な地形が展開する。丘陵周辺には浸食作用により形成された多くの開析谷が認められる。現在、埋没している開析谷もみられるが、一部には溜池としてその姿を留めている。さらに西側には、明瞭な段丘崖が発達しており、千里川や箕面川、猪名川等の沖積作用によって形成された沖積平野と画されている。

遺跡は標高80ｍを超える待兼山丘陵の西側に大きく張り出した低位段丘上に位置し、西摂平野を眼前に望む標高24 ～ 35ｍの良好な場所を占地している。

地勢的に安定している低・中位段丘上には、時代を問わず多くの重要な遺跡が営まれ、古代以降、当遺跡周辺の低位段丘上には、遺跡北方に位置する旧山陽道（西国街道）や東方に位置する能勢街道といった主要幹線道が縦横に延び、市域西側の猪名川や南部の神崎川を利用した水運と併せて重要な交通の要衝であった。現在でも遺跡周辺には、北側に中国自動車道や府道大阪中央環状線が、東側に阪急電鉄宝塚線や国道176号、大阪モノレールが、西側に大阪国際空港、阪神高速道路大阪池田線が建設されており、古来の交通の要衝としての地理的環境を継承している。以下に、周辺の主要遺跡を時代順に概観しておく。

（１）旧石器時代

千里丘陵末端の低位段丘上に位置する当遺跡や蛍池西遺跡、蛍池遺跡、箕輪遺跡、柴原遺跡、大塚古墳でサヌカイト製のナイフ形石器や盤状剥片石核、剥片の出土が知られるが、生活痕跡は確認されていない。市域の中でも蛍池周辺の低位段丘上では、旧石器時代の資料が色濃くみられる場所であり、今後この周辺において石器製作址や礫群といった生活痕跡が発見される可能性が高いものと推察される。

（２）縄文時代

市域北部の千里川流域の段丘上に位置する内田遺跡、野畑春日町遺跡、野畑遺跡、柴原遺跡、蛍池北遺跡、新免遺跡等や、市域南部の原田西遺跡や穂積遺跡等の沖積地に立地するものがある。前者の遺跡群は、新免遺跡や蛍池北遺跡で早期の押型文土器が出土している以外は、中期から晩期の遺跡である。なお、野畑春日町遺跡では草創期の有舌尖頭器が出土している。後者の遺跡は、沖積地に散在するようにあり、土器が単独に出土するような状況下にあって実態は不明と言わざるを得ない。なお、晩期になると小曽根遺跡や山ノ上遺跡等のように低地や台地縁辺部にも展開するようになり、弥生時代前期土器と晩期の遺物が共伴する例が知られる。

総体的に縄文時代の遺構・遺物の発見例は他の時代に比して少なく、今後の調査に期待したい部分である。

（3）弥生時代

弥生時代前期の集落は、小曽根遺跡や勝部遺跡が沖積平野に、山ノ上遺跡が台地縁辺部に、野畑春日町遺跡が千里川上流域の中位段丘上に形成されている。中期になると蛍池北遺跡や新免遺跡、本町遺跡、待兼山遺跡等に代表されるように市域北部の段丘上、或いは丘陵上に新たな集落が形成されるようになる。蛍池北遺跡や新免遺跡は、小地域の中核的な集落として発展するが、後期になると次第に衰退していく。待兼山遺跡は実態がまだ明らかではないものの、断面Ｖ字状を呈する溝が検出されていることから、高地性集落であったと考えられる。

一方、後期になると新たに市域南部の猪名川下流域に利倉遺跡、利倉西遺跡、上津島遺跡、上津島河床遺跡等の多くの集落が形成され、遺跡群としてまとまりを持つようになる。終末（庄内式）期になると、市域南端にまで遺跡が広がり、島田遺跡や庄内遺跡、穂積遺跡が形成される。中でも、穂積遺跡は他地域からの多量の搬入土器がみられ、銅鏃の未製品が出土する等、流通や生産において重要な位置を占める拠点的集落として注目される。

（4）古墳時代

古墳時代前期の集落は、弥生時代後期後半から継続するものが多く、穂積遺跡、利倉西遺跡、島田遺跡等の市域南部の台地縁辺部や沖積平野に占地している。猪名川下流域に位置する上津島遺跡や島田遺跡は、古墳時代を通じて中核的な遺跡群を形成している。前期古墳は西摂平野を望む市域北部の独立丘陵や台地縁辺部に、待兼山古墳、御神山古墳、大石塚古墳、小石塚古墳等が築かれている。

中期の集落は、須恵器出現直前に蛍池東遺跡で大型掘立柱建物群（倉庫群）がみられるが、短期間のうちに消滅し、初期須恵器の段階で竈を有する集落へと転換している。

また、市域北部の千里川上流域に位置する桜井谷窯跡群で、須恵器が焼かれ始める中期後半から後期にかけては、千里川流域に主要な集落が形成されるようになる。千里川右岸に位置する内田遺跡は、須恵器生産者集団の中心的集落と目されており、その対岸に位置する羽鷹下池南遺跡が須恵器生産工房である可能性が指摘されている。また、両遺跡の下流に位置する新免遺跡、本町遺跡が須恵器の選別や発送を司った流通センター的機能を有した集落と想定されている。

中期古墳は大石塚古墳、小石塚古墳に継続する桜塚古墳群に集約されていく。中期後半から後期にかけては小地域毎に古墳群が形成される。代表的なものは蛍池北古墳群や待兼山古墳群、新免古墳群、新免宮山古墳群等である。中でも、新免宮山古墳群では陶棺が確認されていることから、須恵器生産の統率者集団の奥津城として捉えられている。

（5）古代・中世

古墳時代の終焉を受けて成立してくるのが、本町遺跡の北東に位置する金寺山廃寺である。金寺山廃寺は盛期には千坊を超える関連施設を有した寺院と言われ、山田寺系の瓦を出土していることから物部氏の氏寺である可能性が指摘されている。この寺院の造営、管理を司ったのが須恵器生産衰退後の本町遺跡であったと想定されている。

奈良・平安時代の集落は、古墳時代からの立地を踏襲する傾向がみられ、猪名川に面した低位段丘上や縁辺部、沖積平野において多数検出されている。代表的な遺跡には蛍池北遺跡、本町遺跡、新免遺跡、曽根遺跡、上津島南遺跡、島田遺跡等がある。平安時代～中世の集落は蛍池北遺跡、本町遺跡、山ノ上遺跡、豊島北遺跡、原田西遺跡、小曽根遺跡、穂積遺跡、利倉遺跡、上津島遺跡、島田遺跡等で検出されており、沖積地に展開する集落が増加する傾向にある。

猪名川流域の西摂平野には、大阪国際空港等により消滅しつつも、比較的条里制地割を色濃く残している。これらは、旧豊嶋郡の条里である。この条里制地割は低位段丘面以上には存在しておらず、沖積地においても千里川沿いや旧流路上では確認できない。

（6）中世以降

中・近世に入り、人や物資の動きが活発になると、西国街道や能勢街道といった主要幹線道が整備され、また猪名川や神崎川の水運が活用でき、近畿北部や西摂・播磨、京・山城へと通じる交通の要衝としての特性がより注目され、戦国時代には原田城や刀根山城、伊丹城、池田城等が築かれている。

また、江戸時代には要衝の地には然るべき領主を置かず、分断統治を実施した徳川幕府により、北摂地域は幕府直轄領や旗本領、小藩等が錯綜する地域となった。こうした分断統治により、調査地周辺は青木氏一万石の麻田藩の所領となっていた。その中心は、阪急電鉄宝塚線蛍池駅駅前に広がる麻田藩陣屋跡である。

第２節　蛍池北遺跡の既往の調査

蛍池北（宮の前）遺跡は、昭和初期に池田市側の地元住民により土器や石器等の遺物が採集され、遺跡の存在が明らかとなり、学会誌において遺跡と出土遺物の紹介がなされたことにより、広く周知されるようになった。しかしながら、長らく発掘調査が実施されなかったこともあり、実態は明らかにならなかった。

昭和43（1968）年に日本道路公団と大阪府により、当遺跡を横断する形で中国自動車道及び府道大阪中央環状線の建設計画が示された。これを受けて大阪府教育委員会は、昭和43・44（1968・69）年に遺跡の範囲確認のための調査を実施し、約0.3km四方にも及ぶ遺跡であることが明らかとなった。その後、事業者との協議を重ね、約15,000㎡を対象とした発掘調査を実施した。これが当遺跡における調査の嚆矢となった。

この調査において、弥生時代中期（Ⅱ～Ⅳ様式）の方形周溝墓20基、土坑墓91基、壺・甕棺９基、竪穴建物10軒や、古墳時代後期（６世紀代）の竪穴建物５軒や低墳丘の方墳３基、土坑墓３基、円筒埴輪棺１基等、奈良時代の掘立柱建物16軒が検出され、複合遺跡であることが判明した。

弥生時代では、方形周溝墓が大きく東西２群に分かれて墓域を形成し、中央に居住域が展開する集落構造が理解されるようになったが、墓域と居住域との間には境界を示す区画は認められていない。

古墳時代の竪穴建物は、いずれも作り付けの竈を有するもので、６世紀後半に属するものとされる。

奈良時代の建物はその主軸方位から、南北方位にとるもの、主軸が西或いは東に振るものの２群に分けられ、時期差を示す可能性が高いことが指摘されている。また、交通の要衝としての地理的環境と豊嶋郡の中枢と想定される豊嶋郷に位置することから、これらの建物群は官衙とする解釈や指摘もあったが、建物の配置に厳密な企画性が認められないことや傑出した規模の建物が認められないことから、現在では疑義が唱えられ、一般的な集落である可能性が高いとの見解が提出されている。

この後、池田市側の宮の前遺跡、豊中市側の蛍池北遺跡において個人住宅や共同住宅、大阪モノレール蛍池東線等の建設に伴う発掘調査が増加し、宮の前遺跡で57次（2011年度現在）、蛍池北遺跡で26次の調査が実施され、資料が蓄積されている。

このうち、蛍池北遺跡での調査成果を簡単に概観しておく。

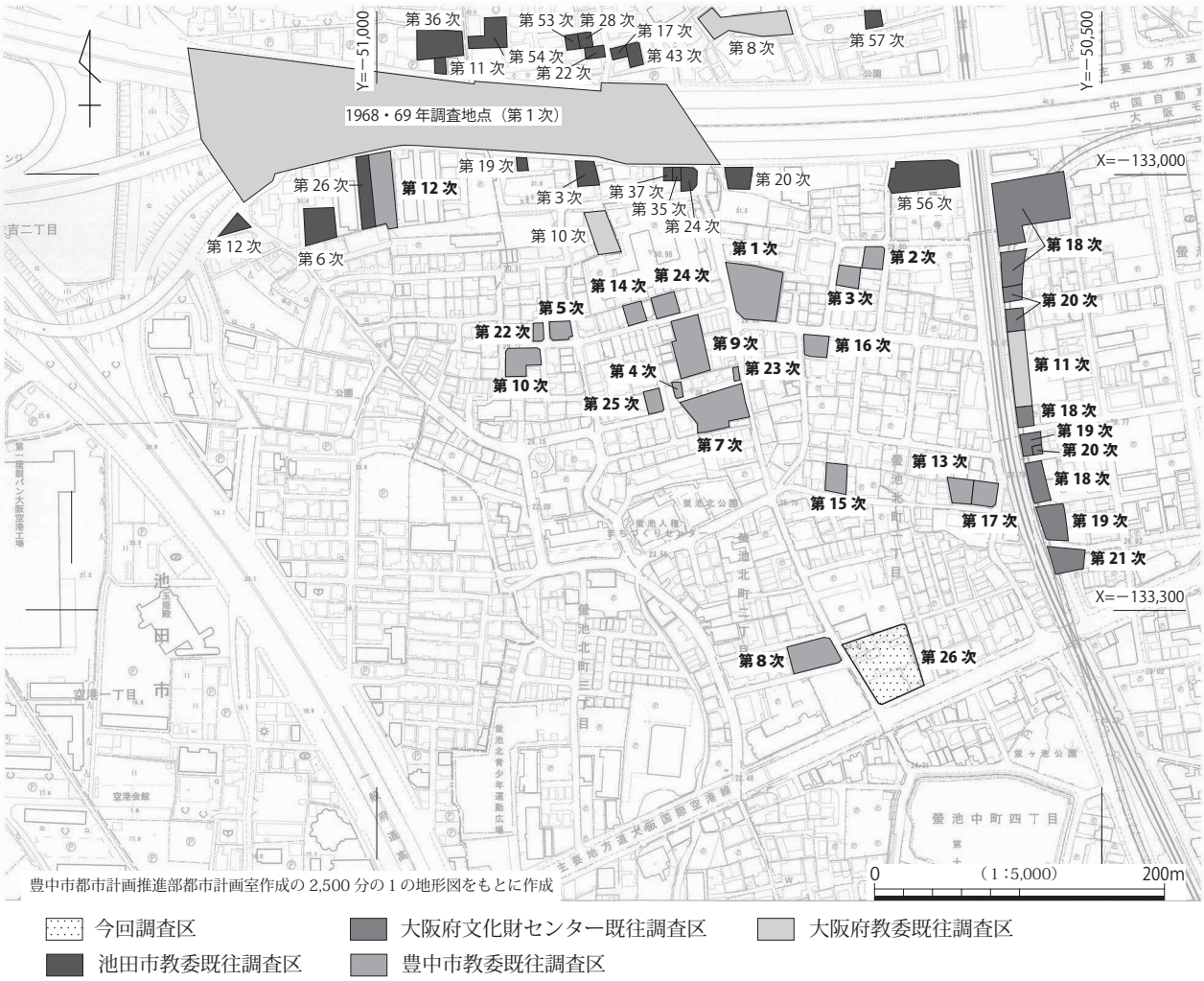


図3　蛍池北遺跡の調査区と既往の調査位置図

蛍池北遺跡の主体をなす弥生時代については、第１・12次調査で方形周溝墓、第13・16次調査で竪穴建物、第18次調査で溝、第14・19次調査で土坑が検出されている。いずれの遺構も弥生時代中期の所産である。第１・２・12・14・16次の調査地は遺跡北部に位置しており、遺跡の中心部に近い部分にあたる。一方、第13・18・19次調査は遺跡南部に位置しており、遺跡中心からは距離を隔てる。遺跡北部に形成された集落とは異なる集落が、遺跡南部に営まれていた可能性を示しており、注目される資料となっている。

古墳時代に関しては、第５・10・13・17次で小円墳や木棺墓が検出されている。円墳はいずれも削平が著しく、主体部は確認されなかった。遺跡北部・南部共に５世紀末葉頃の小円墳を主とした古墳群が造営されていたようであるが、集落の様相は明らかでない。古代については、第19次調査で飛鳥時代の土坑墓が、第１・９次調査で奈良～平安時代の柵列等を伴う掘立柱建物が検出されている。第１次調査では緑釉陶器や硯等の遺物が出土しており、建物群の性格が注目される。

参考・引用文献

池田市史編纂委員会　1997 『新修　池田市史』第１巻

市本芳三編　2002 『（財）大阪府文化財センター調査報告書　第81集　麻田藩陣屋跡－蛍池駅西地区第１種市街

地再開発工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－』 財団法人　大阪府文化財センター
金光正裕ほか　1994 『宮の前遺跡・蛍池東遺跡・蛍池遺跡・蛍池西遺跡　1992・1993年度発掘調査報告書－大阪モノレール蛍池東線・西線建設に伴う発掘調査』 財団法人大阪文化財センター
金光正裕ほか　1997 『(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第22集１　宮の前遺跡・蛍池東遺跡・麻田藩陣屋跡・蛍池遺跡・蛍池南地区・蛍池西遺跡　1993－1996年度発掘調査報告書－大阪モノレール蛍池東線・西線建設に伴う発掘調査』 財団法人大阪府文化財調査研究センター
橘田正徳編　1993 「第Ⅴ章　蛍池北遺跡第16次調査の概要」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要　1992（平成４年度)』 豊中市教育委員会
橘田正徳編　1998 『蛍池西遺跡－阪神高速道路大阪池田線池田延伸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 蛍池西遺跡調査団
清水　篤編　2000 「第Ⅴ章　蛍池北遺跡第24次調査」「第Ⅵ章　蛍池北遺跡第25次調査」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要　平成11年度（1999年度)』 豊中市教育委員会
豊中市史編さん委員会　2005 『新修　豊中市史』第４巻　考古
豊中市史編さん委員会　2009 『新修　豊中市史』第１巻　通史１
服部聡志ほか　1990 「第Ⅴ章　蛍池北遺跡第14次調査の概要」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要　1989年度』 豊中市教育委員会
服部聡志・大庭重信編　1995 『豊中市文化財調査報告　第36集　蛍池北遺跡（宮の前遺跡） 第12次発掘調査報告－弥生時代中期方形周溝墓群の調査－』 豊中市教育委員会・蛍池北遺跡調査団
服部聡志編　1999 「第Ⅳ章　蛍池北遺跡第22次調査」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要　平成10（1998）年度』 豊中市教育委員会
柳本照男編　1985 「Ⅴ．蛍池北遺跡」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要　1984年度』 豊中市教育委員会
柳本照男編　2001 『蛍池北遺跡－第１次発掘調査報告書－』 豊中市教育委員会
山元　建編　2001 『(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第59集　住吉宮の前遺跡－大阪国際空港給水設備工事に伴う発掘調査報告書－』 財団法人大阪府文化財調査研究センター

第３章　調査成果

第１節　基本層序と遺構面

調査地は近年まで宅地として使用されていたため、ほぼ平坦に造成されていたが、調査の結果、以前は東から西、北から南へと緩やかに傾斜する地形であることが明らかとなった。

こうした地形環境にあったため、調査地東側部分と中央部から西側部分とでは堆積状況が大きく異なっていた。調査地東側は基盤層が高かったため、近代以降の土地改変の影響を著しく被っており、近代以前の堆積層がほとんど確認できない状況であった。従って、本調査における基本層序として調査地中央部から西側部分を提示し、東側部分に関しては適宜触れる程度に留める。

基本層序（図４～７・図版２）

第１層は近代以降の建物建設時の整地層や盛土、建物解体時の埋め戻し土、整地後に敷き均された砕石からなる。建物建設時の整地層や盛土は黄灰～黄色系のシルトや粘土（近傍の低位段丘構成層を削ったものか）を基調とした土砂を客土にしており、非常に固く締まっている。埋め戻し土には建物解体に伴って排出されたレンガや瓦等を含んでいる。第１層の層厚は概ね調査地東側で0.4ｍ、中央部から西側で0.6ｍを測る。

第２層は黄灰～灰色系のシルトや極細砂～細砂混シルトである。当層は均質に撹拌されており、植物根による斑鉄が発達することから長らく耕作土として利用されたと推定される。断面観察の結果からも複数の耕作土の単位が読み取れる。出土遺物には17世紀前半～ 18世紀代の所産と考えられる近世陶磁器がみられることから、近世期に連綿と継続して耕作されていたものと考えられる。当層の層厚は、東側は基盤層が高いこともあり薄く約0.3ｍ、西側は約0.5ｍを測る。

第３層は調査区北西隅でのみ確認した黄灰色シルトである。均質に撹拌されており、植物根による斑鉄が発達することから耕作土として利用されたと推定される。層厚は約0.15ｍを測る。出土遺物がみられなかったこともあり時期比定が困難であるが、第２層から近世陶磁器が、下位の第４層から古代から中世の土器の出土がみられたことから、中世後半段階の耕作土である可能性が推察される。

第４層は調査区西端部でみられるものである。Ｘ＝－133,347以北はＮ－29°－Ｗに軸をとる谷状地形の、以南は段落ちの埋土となっている。谷状地形の埋土は灰褐色砂質シルト混細～中砂や礫を含む土壌化した黒～黒褐色シルトである。層厚は最大0.5ｍである。段落ちの埋土は褐灰色シルトや細～粗砂、灰色礫混粘質シルトとなっている。層厚は最大0.4ｍである。出土遺物は北側、南側共に少なく、細片で摩滅したものが主体であるため、詳細な時期を明らかにはできないが、７世紀代の須恵器や黒色土器内黒椀、瓦器椀、青磁碗等の遺物がみられた。出土遺物の年代観から谷状地形は13世紀後半～ 14世紀には埋没したものと想定される。

第５層は調査区中央部から西側において基盤層（地山）直上でみられた土壌化した黒～黒褐色シルトである。上位で確認した近世期の耕作地を造成する際に大幅に削平された蓋然性が高く、層厚は最大で0.1ｍであった。出土遺物は少なく、細片で摩滅したものが主体であるため、詳細な時期を明らかにはでき

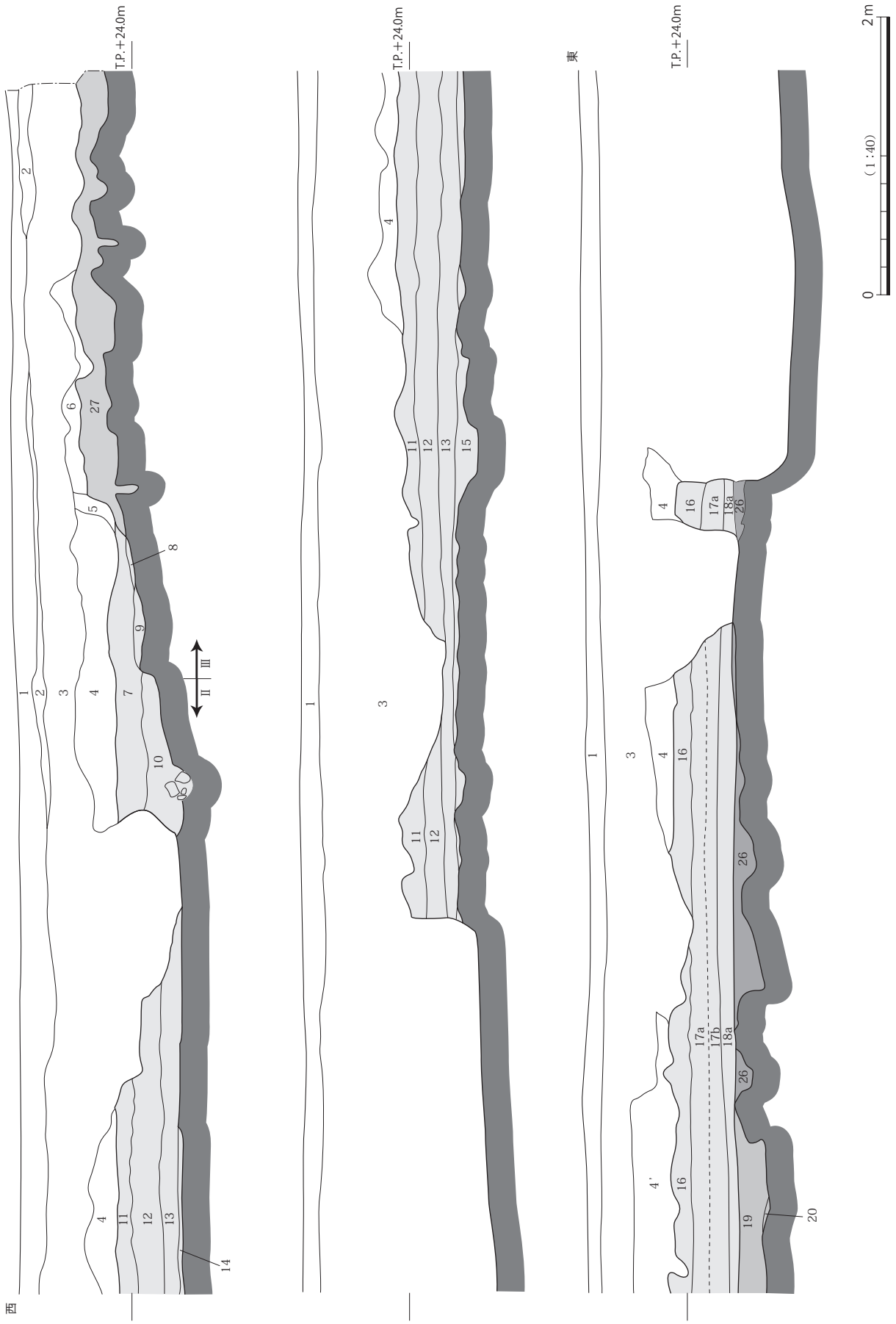
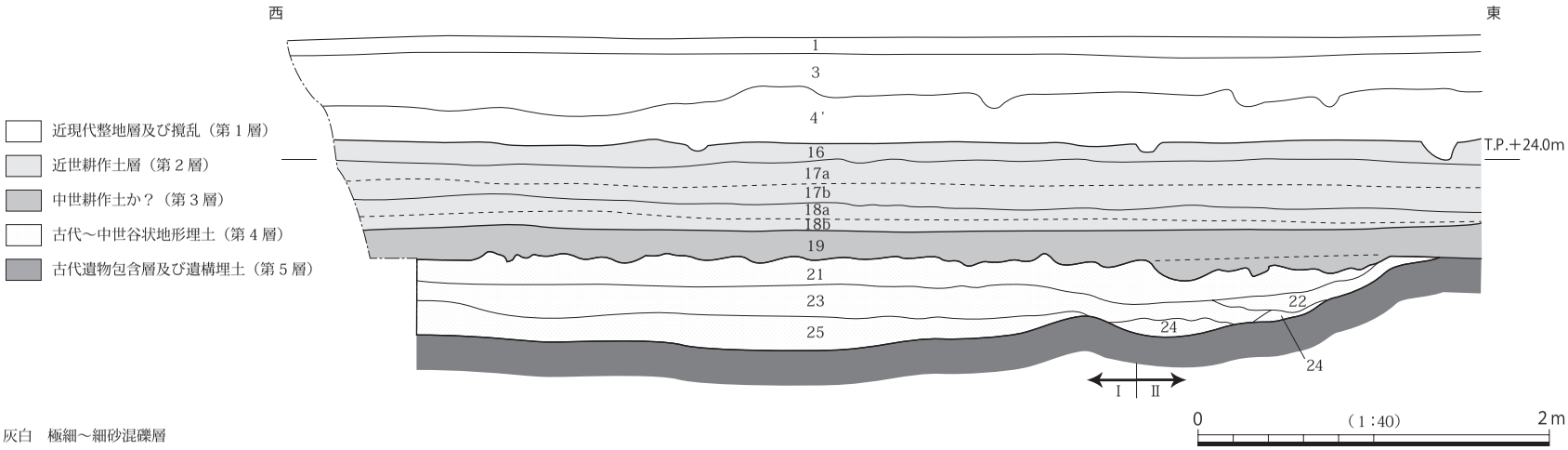


図4　北壁断面図（1）



北壁断面

1．7.5Y8/1　灰白　極細～細砂混礫層
　一辺１～３㎝の礫　（砕石：整地後に敷かれたもの）

2．2.5Y5/1　黄灰　砂質シルト混極細～細砂　非常に固く締まる
　炭化物・5Y7/2　灰白　シルトブロック・
　一辺１～５㎝の礫・レンガ等を含む（現代の整地層）

3．2.5Y3/1　黒褐　シルト・2.5Y8/6　黄　粘土・2.5Y7/1　灰白　中～粗砂が混ざったもの
　炭化物・レンガ・一辺５～10㎝の礫・瓦等を含む　木の根が多く入る
　（建物解体時の埋め戻し土：撹乱）

4．A　2.5Y6/1　黄灰　シルトとB　2.5Y8/6　黄　粘土のブロック土
　A：B＝１：９（建物建設時の盛土・整地層か）

4'．A　2.5Y8/2　灰白～8/3　淡黄　シルト質粘土とB　5Y6/1　灰　シルト質粘土と
　C　2.5Y7/2　灰黄　細～中砂のブロック土
　A：B：C＝4：2：4　一辺３～10㎝の礫を含む（建物建設時の盛土・整地層か）

5．2.5Y5/2　暗灰黄　シルト混極細砂と2.5Y3/1　黒褐　シルトが混ざったもの
　前者は６、後者は27を起源とする

6．2.5Y5/2　暗灰黄　シルト混極細砂　炭化物を含む（現代か）

7．2.5Y5/1　黄灰　極細～細砂混シルト
　炭化物・瓦・一辺１～３㎝の礫を含む　斑鉄顕著　根撹乱多く見られる
　（近世耕作土と考えられる　西側の11・12に対応するものであろう）

8．2.5Y5/1　黄灰　シルト～細砂
　一辺１㎝前後の小礫を含む　ラミナあり　（２溝・段落ちの溝埋土）

9．2.5Y4/1　黄灰　極細砂混シルト
　炭化物・一辺１～２㎝の礫を含む

10．10YR3/1　黒褐　極細砂混シルト
　炭化物・一辺0.5～２㎝の礫・一辺１～２㎝の2.5Y8/4　淡黄を呈する
　地山風化礫を含む（近世？西側の13に対応するものであろう）

11．2.5Y5/1　黄灰　シルト　やや粘性あり
　炭化物・一辺0.5～１㎝の小礫を僅かに含む
　斑鉄顕著（近世以降の耕作土）

12．2.5Y4/1　黄灰　シルト
　炭化物・一辺0.5～１㎝の小礫を含む
　斑鉄顕著（近世以降の耕作土か）

13．2.5Y4/1　黄灰　極細～細砂混シルト　粘性弱い
　炭化物・一辺0.5㎝程度の2.5Y8/4　淡黄～2.5Y8/6　黄を呈する
　地山風化礫を含む（近世の耕作土）

14．10YR4/1　褐灰　シルト
　炭化物・2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロックを含む

15．10YR3/1　黒褐　シルト
　5Y8/3　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロックを含む（鋤溝埋土）

16．5Y5/1　灰　シルト（やや粘性あり）
　炭化物を含む　斑鉄顕著（近世以降の耕作土）
　東側の11に対応

17a．5Y4/1　灰　極細砂混シルト（やや砂質分強い）
　炭化物・僅かに一辺１㎝前後の小礫を含む
　弱い土壌化（近世段階の水田耕作土か）

17b．5Y6/2　灰オリーブ　極細砂混シルト（やや砂質分強い）
　炭化物・僅かに一辺１㎝前後の小礫・極小の地山風化礫を含む
　弱く鉄沈着（近世段階の水田耕作土か）

18a．5Y4/1　灰　極細砂混シルト
　炭化物・僅かに一辺１～３㎝の礫含む
　弱い土壌化（中～近世段階の水田耕作土か）

18b．2.5Y6/2　灰黄　極細砂混シルト
　炭化物を含む　弱く鉄分沈着（中～近世段階の水田耕作土か）

19．2.5Y4/1　黄灰　シルト
　斑鉄みられる（中世の耕作土か）
　（点線以下は20溝に相当）

20．10YR3/1　黒褐　極細砂混シルト

21．7.5YR4/2　灰褐　砂質シルト混細～中砂
　炭化物・2.5Y8/6　黄　2.5Y6/1　黄灰　中～粗砂ブロック・
　一辺0.5㎝程度の地山風化礫を含む
　鉄分沈着　遺物小片がみられる（19谷最上層埋土）

22．10YR2/1　黒　粘質シルト（19谷埋土）

23．7.5YR2/1　黒　極細～細砂混シルト
　炭化物・2.5Y8/6　黄　2.5Y6/1　黄灰　細～中砂ブロック・
　一辺0.5㎝程度の地山風化礫を含む
　須恵器を中心とした遺物小片がみられる（19谷埋土）

24．2.5Y3/1　黒褐　粘質シルト（19谷埋土）

25．2.5Y3/1　黒褐　細砂混シルト
　炭化物・2.5Y8/6　黄　一辺１～15㎝の礫・
　一辺0.5㎝程度の地山風化礫を多量に含む
　須恵器を中心とした遺物がみられる（19谷埋土）

26．7.5YR3/1　黒褐　シルト　2.5Y8/4　淡黄　シルト質粘土
　（地山由来）ブロックを含む（古代の包含層化）

27．2.5Y3/1　黒褐　シルト　非常にしまり悪い　腐葉土状
　木の根多く入る

図５　北壁断面図（２）

北
南
T.P.＋24.0m
T.P.＋24.0m
T.P.＋24.0m
1
2
2'
4
4'
5
6
7
8
9
22
22'
井戸
（コンクリート枠）
Ⅲ
Ⅳ
0
（1：40）
2m
現代整地層及び攪乱（第１層）
近世耕作土層（第２層）
古代遺物包含層及び遺構埋土（第５層）

図6　東壁断面図

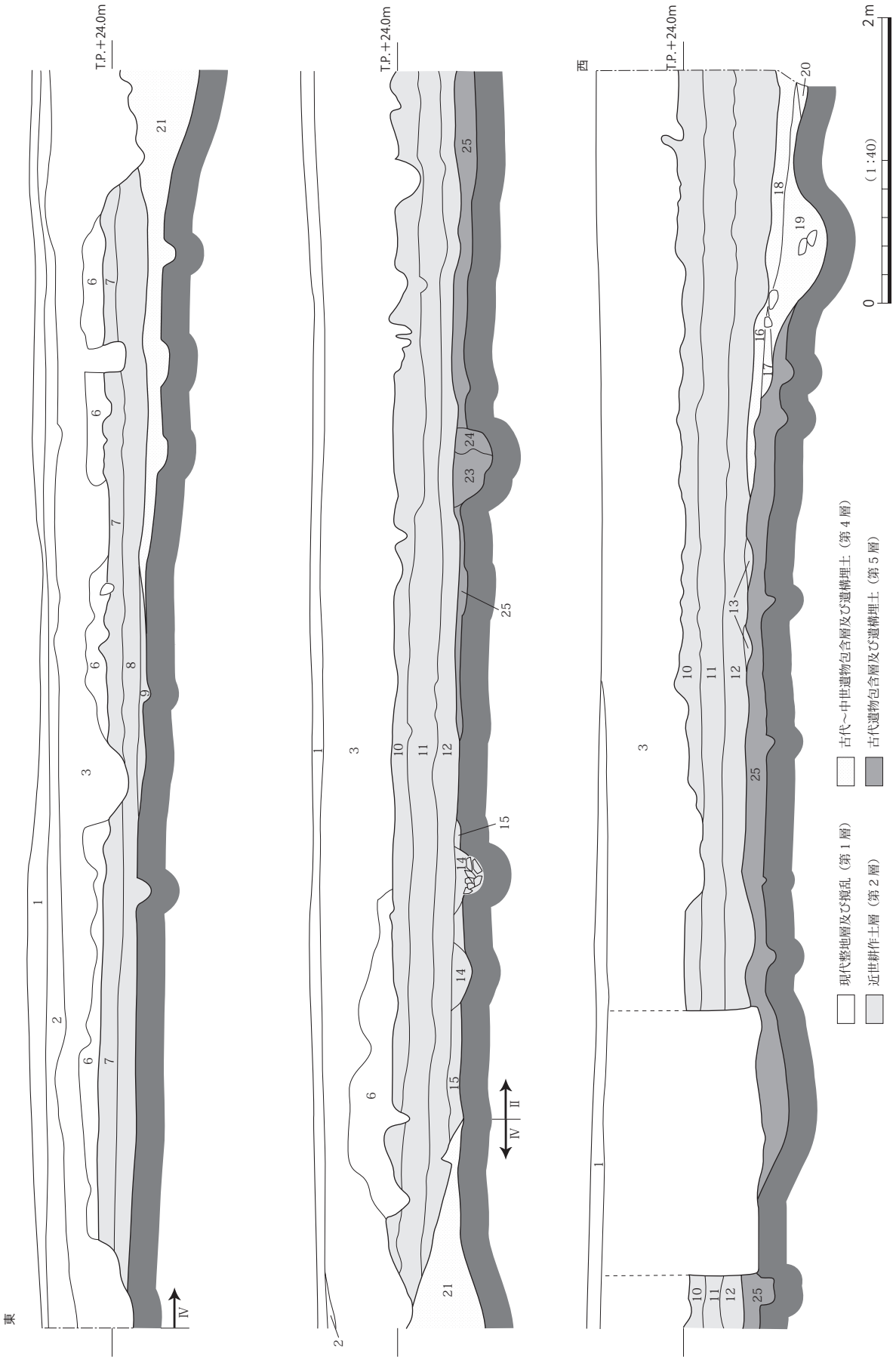

東
西
T.P.+24.0m
T.P.+24.0m
T.P.+24.0m
Ⅳ
Ⅳ
Ⅱ
0
(1:40)
2m
現代整地層及び攪乱（第１層）
近世耕作土層（第２層）
古代～中世遺物包含層及び遺構埋土（第４層）
古代遺物包含層及び遺構埋土（第５層）

図7　南壁断面図

東壁・南壁断面　土色

1．7.5Y8/1　灰白　極細～細砂混礫層
一辺１～３㎝の礫（砕石：整地後に敷かれたもの）

2．2.5Y5/1　黄灰　シルト混細～中砂
2.5Y8/4　淡黄　シルト質粘土（地山由来）ブロック・
一辺１～３㎝の礫を多く含む（現代の整地層）

2'．5Y5/1　灰　極細～細砂混シルト
2.5Y8/4　淡黄　シルト質粘土（地山由来）ブロック・
一辺１～２㎝の礫を含む

3．10YR5/2　灰黄褐　中砂混シルト～ 10YR4/2　灰黄褐シルト
2.5Y8/6　黄　シルト質粘土（地山由来）ブロック・
一辺１～２㎝の礫を非常に多く含む（現代の整地層）

4．10YR4/1　褐灰～ 10YR5/2　灰黄褐　細砂混シルト
2.5Y8/3 ～ 2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト～シルト質粘土（地山由来）ブロック・
炭化物を多く含む

4'．7.5YR7/8　黄橙　シルト質粘土地山由来）ブロック
（４・４' とも現代の撹乱）

5．10YR4/1　褐灰　シルト混細～中砂
炭化物・10YR8/6　黄橙　シルト質粘土（地山由来）・
2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト（地山由来）を多く含む
（建物解体時の埋め戻しか）

6．2.5Y8/6　黄　シルト質粘土（地山由来）
2.5Y7/1　灰白　シルト質粘土（地山由来）ブロック・
一辺５㎝前後の礫を多く含む（建物解体時の整地層）

7．2.5Y4/1　黄灰　極細～細砂混砂質シルト（耕作土か）

8．2.5Y4/1　黄灰　中～粗砂混砂質シルト
炭化物・一辺１～５㎝の礫・一辺１～３㎝の 2.5Y8/6　黄を呈する
地山風化礫を含む（耕作土）

9．10YR4/1　褐灰　極細砂混シルト　やや粘性あり
炭化物・10YR7/2　にぶい黄橙　シルト質粘土（地山由来）ブロック・
一辺 0.5 ～１㎝の小礫を含む（耕作土）

10．5Y5/1　灰　シルト
炭化物・一辺 0.3 ㎝程度の小礫を含む
斑鉄顕著（近世～近代耕作土か）

11．2.5Y6/1　黄灰　極細砂混シルト
炭化物を含む　斑鉄顕著（近世耕作土）

12．2.5Y5/1　黄灰　細～中砂混シルト
一辺１～３㎝の小礫・
2.5Y8/6　黄を呈する一辺 0.3 ～ 0.5 ㎝の地山風化礫を含む
斑鉄顕著（近世耕作土）

13．7.5YR3/1　黒褐　細砂混砂質シルト（鋤溝埋土）

14．10YR5/1　褐灰　細～中砂混砂質シルト（溝埋土）

15．7.5YR4/1　褐灰　極細～細砂混砂質シルト
炭化物・10YR7/3　にぶい黄橙　シルト質粘土（地山由来）ブロック・
一辺１～２㎝の小礫を含む

16．10YR5/1　褐灰　礫混シルト
10YR3/1　黒褐シルト（25 由来）ブロックを多く含む
礫は一辺 0.5 ～３㎝

17．10YR4/1　褐灰　礫混細～中砂
礫は一辺１～ 10 ㎝

18．10YR4/1　褐灰　極細砂混シルト

19．10YR5/1　褐灰　礫混細～粗砂
礫は一辺１～ 10 ㎝程度（落込み埋土か）

20．5Y5/1　灰　粗砂～小礫混粘質シルト
一辺 0.3 ～ 0.5 ㎝の小礫を多く含む（20 溝埋土か）

21．10YR1.7/1　黒　シルト　しまり悪い
一辺１㎝程度の小礫を含む　木の根多くみられる（平安の遺物包含層か）

22．7.5YR2/1　黒　極細～細砂混砂質シルト
10YR7/2　にぶい黄橙　シルト（地山由来）ブロック・
一辺１㎝前後の小礫を含む　木の根多い（平安の包含層か）

22'．7.5YR2/1　黒　シルト（上半部）～ 7.5YR4/1　褐灰　シルト（下半部）
7.5YR7/6　橙　砂質シルト（地山由来）ブロック・
2.5Y8/4　浅黄　砂質シルト（地山由来）ブロックを僅かに含む
漸移的に上から下へ淡くなる（落込み埋土）

23．A　10YR3/1　黒褐　シルト（25 由来）と
B　10YR8/3　浅黄橙　砂質シルト（地山由来）のブロック土
A:B＝７：３（223 土坑埋土）

24．10YR2/1　黒　シルト
僅かに 10YR8/3　浅黄橙　砂質シルト（地山由来）ブロックを含む
（223 土坑埋土）

25．10YR3/1　黒褐～ 10YR2/1　黒　極細砂混シルト　下方は漸移的に淡くなる
10YR7/3　にぶい黄橙　砂質シルト（地山由来）ブロックを僅かに含む
（古代～中世の遺物包含層か）遺物の含有は極めて少ない

地山

Ⅰ．2.5YR7/1　灰白～ 2.5Y6/1　黄灰　砂礫層
礫は一辺１～ 10 ㎝

Ⅱ．5Y7/3　浅黄　礫混砂質シルト

Ⅲ．7.5YR6/6　橙　シルト質粘土
一辺１～３㎝の礫を少量に含む　しまり悪い

Ⅳ．10YR7/2　にぶい黄橙　シルト質粘土
一辺１～３㎝の礫を含む

ないが、７～11世紀代の須恵器や黒色土器内黒椀、白磁碗等の遺物がみられた。

なお、調査区東側高台にも部分的に締まりの悪い腐葉土状の黒～黒褐色シルトが残存していた。土地改変が著しく面的な広がりは掴めず、出土遺物もみられなかったため、詳細は不明であるが、この黒～黒褐色シルトも古代の遺物包含層である可能性を指摘しておきたい。

調査区東側部分では第1・５層を、中央部から西側部分では第１～３・５層を掘削して検出した基盤層（地山）上面を遺構面として調査を行なった。東側部分では掘立柱建物や小穴、土坑等を、中央部から西側では耕作痕（鋤溝群）や耕作に伴う暗渠、掘立柱建物や小穴、土坑、落込み等を検出した。掘立柱建物を構成する柱穴や小穴、土坑等の遺構からは遺物の出土が少なく時期比定は困難であるが、僅かながら出土した遺物から、多くの遺構は平安時代後半頃の所産と考えられる。なお、耕作痕や暗渠は近世期のものである。

基盤層（地山）は調査区内でも異なっており、東側部分は基本的に締まりの悪い橙色の小礫混シルト質粘土である。ただ、南東隅はにぶい黄橙色を呈するようになり、比較的締まっている。中央部から西側にかけては浅黄色礫混砂質シルトである。

第２節　１区の調査

１区は調査区の北側半分、Ｘ＝－133,318～341・Ｙ＝－50,634～673に当たり、東西に細長い範囲となった。検出した遺構面は１面である。遺構面は北東隅が一番高くT.P.＋24.4ｍを測り、緩やかに西、南へと傾斜し、調査区南東隅でT.P.＋24.1ｍ、南西隅でT.P.＋23.4ｍとなる。この地形は、後に述べる２区と併せて、調査区西端で検出した谷状地形に、また南側は溜池（元は北東から南西にはしる開析谷）を埋め立てて建設した豊中市立第十八中学校へと向かって下る緩斜面に位置している。

検出した遺構には耕作痕（鋤溝群）や耕作に伴う暗渠、掘立柱建物、小穴、土坑、落込み、谷状遺構等がある。これらの遺構の時期は大きくみて近世期のものとそれ以前のものとに大別される。

（１）近世期の遺構（図８～10・図版３・９）

東側高台部分の大半は近代以降の建物建設に伴う造成のためか、大きく土地改変を受けたと推定され、近世期の遺構は明らかではない。しかし、調査区中央から西側にかけては耕作地が広がっていたことを明らかにした。

２溝

高台部西端に位置し、調査区北辺のＸ＝－133,323・Ｙ＝－50,644付近からＮ－17°－Ｗを軸に北西から南東にはしる。幅約0.5～0.8ｍ、深さ約0.1ｍを測り、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黄灰色極細～細砂混シルトで、炭化物や一辺２～３㎝程度の小礫を含んでいる。埋土の状況からは流水の痕跡は認められなかった。検出長は約14ｍで南側は２区に、北側は調査区外へと延びる。

出土遺物は極めて少なく、肥前系陶器瓶の口縁部片、土師器片がみられるのみで明確な時期は不詳である。瓶の口縁端部には藁灰釉が、頸部には銅緑釉が掛けられる。17世紀後半以降の所産であろう。

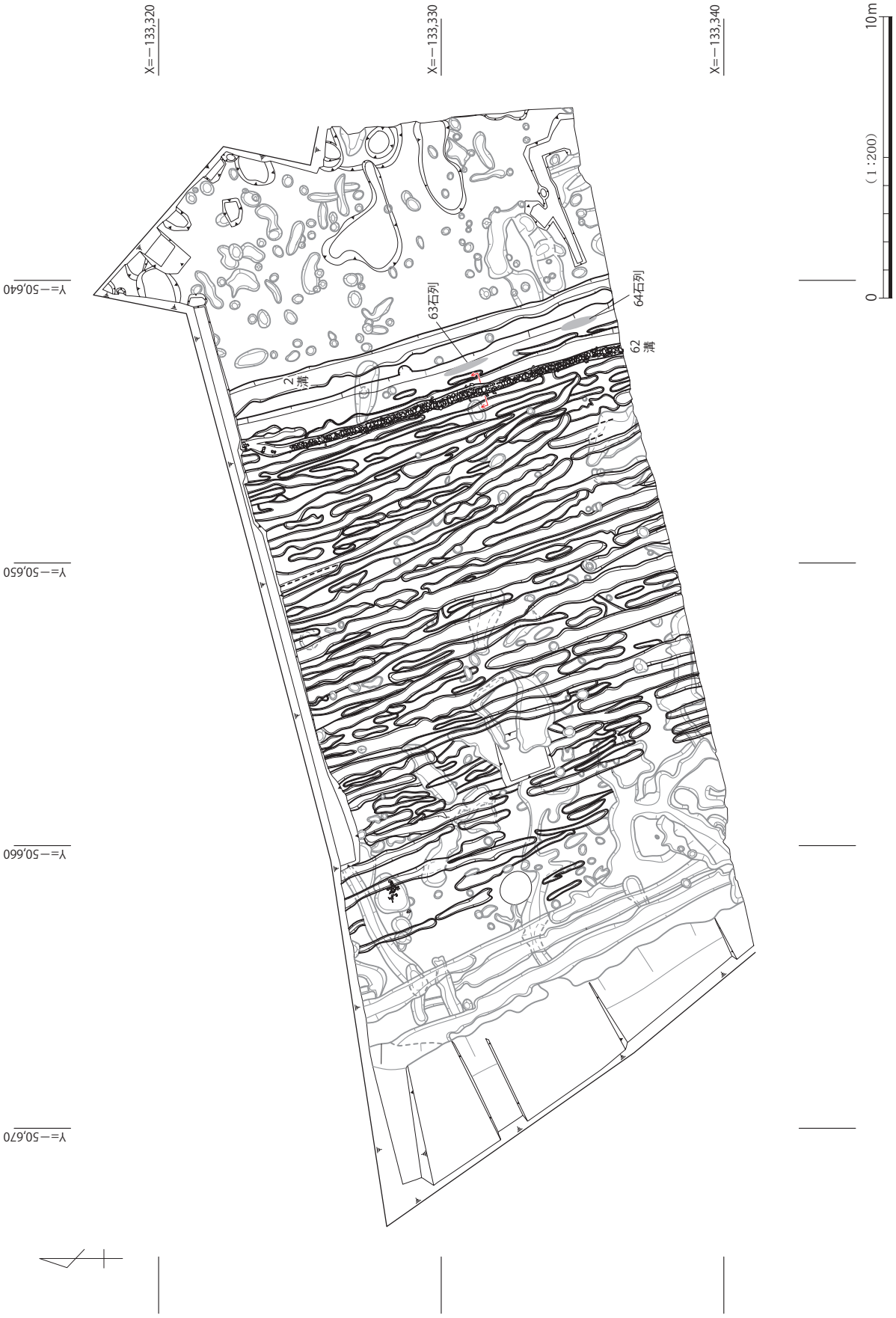

X=−133,320
X=−133,330
X=−133,340
Y=−50,640
Y=−50,650
Y=−50,660
Y=−50,670
2溝
63石列
62溝
64石列
0
(1:200)
10m

図8　1区　近世期平面図

63・64石列（図10）

２溝から約0.5 ～ 0.6ｍ西側には、基盤層（地山）を削り込み、溝と平行するように作出した比高差約0.3ｍの段がみられる。段の法面上では２箇所で段に平行する簡易な石列（63・64石列）が構築されていた。63石列は段中央やや南寄りに、64石列は南側に位置する。石列に使用された石材は長辺15 ～ 30㎝・短辺15 ～ 20㎝・厚み10 ～ 15㎝を測る亜角礫である。石列は現状で礫を１段並べたものとなっており、63石列で８個、64石列で７個の礫を確認した。構築されている位置からすると、土留めを目的としたものと想定され、現状では途切れているが元々は段に沿って直線的に構築されていたものと思われる。

62溝（図９・図版９）

段下端から約0.8 ～ １ｍ西側に位置する石組暗渠である。２溝や段と平行するＮ－17°－Ｗを軸にして北西から南東にはしる。62溝は幅0.2 ～ 0.3ｍ、深さ0.1 ～ 0.15ｍを測り、断面形が逆台形を呈する溝を掘削し、その壁面に沿って握り拳大（一辺10cm 前後）の礫を１～２段積み上げて側壁とし、長辺13 ～ 17㎝・短辺10 ～ 13㎝程度の扁平な礫で蓋をして構築している。礫間の隙間は少なく、密に重ねた丁寧な造りである。これらの石組を細～中砂混砂質シルトで埋めている。石組内は幅0.05ｍ、高さ約0.05ｍの非常に狭い空間となっており、水成堆積の灰色～黒褐色粘質シルトが堆積していた。62溝は検出長約14ｍで、南側は２区に、北側は調査区外へと延びる。なお、北端ではやや東側に屈曲し、東側に掘削された溝に接続する。後に述べる２区で検出した62溝のように二股に分かれていた可能性がある。

出土遺物には肥前系染付碗や須恵器、土師器があるが、細片であり出土量も極めて少ないため、詳細な時期は不詳である。

耕作痕（鋤溝群）（図版３）

62溝西側に展開する耕作地において検出したものである。耕作地は基本的に２・62溝と同様Ｎ－17 ～ 18°－Ｗを軸に耕されており、多数の鋤溝が確認できた。図８の平面図上では、調査区西端付近で鋤溝が表現されていないが、この部分に関しても下位に位置する19谷状地形が埋没した後に耕作が行なわれており、鋤溝を確認している。

鋤溝は先に述べたようにＮ－17 ～ 18°－Ｗを指向するものを主体とするが、一部、62溝からＹ＝－50,650の間でＮ－32 ～ 33°－Ｗを軸にするものがみられた。これらの鋤溝は切り合い関係から前者の鋤溝よりも新しい一群と捉えることができる。埋土は前者が淡黄色砂質シルト（地山由来）ブロックを含む褐灰色極細～細砂混シルト、後者が淡黄色砂質シルト（地山由来）ブロックを含む黄灰色細砂混シルトとなっている。

検出した鋤溝は幅0.1ｍ、深さ約0.05 ～ 0.1ｍを測り、断面形が浅い皿状を呈するものが主体である。一部、幅が0.3 ～ 0.6ｍを測るものがみられたが、これは複数の鋤溝が重複して掘削されていた結果によるものである。また、鋤溝は南側が２区へと、北側は調査区外へと延びており、広範な耕作地が展開していたものと推察される。

出土遺物には肥前系磁器・陶器、備前焼壺、瓦器、土師器、須恵器がある。大半のものが細片となっており、時期を決し難いが17 ～ 18世紀の所産と思われる。

1．7.5YR3/1　黒褐　極細砂混シルト
　2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロック・
　一辺１～２㎝の小礫を含む（暗渠裏込め）
　古代遺物僅かに出土（暗渠を構築する際に混入）
2．2.5Y4/1　黄灰　粘質シルト
　暗渠内に堆積したもの

0　（1：40）　2m

図9　62溝　平・断面図

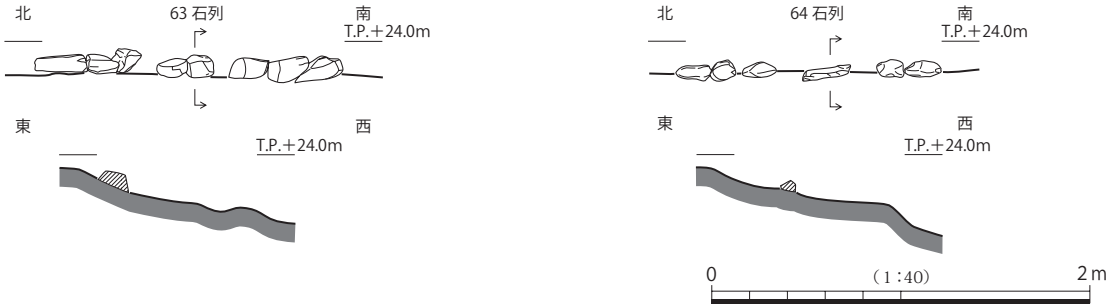


図10　63・64石列　立・断面図

（２）近世期以前の遺構と遺物（図11～20・図版４～９・17・18）

近世期の耕作地造成や近代以降の土地改変による影響のためか、検出した遺構は多くないものの、調査区ほぼ全域で柱穴や小穴、土坑、落込みを確認することができた。緩斜面地を平坦に造成した近世期の土地改変の影響は標高の高い東側に強く現れており、特に２溝からＹ＝－50,650の間で遺構が希薄になっている。

掘立柱建物１（図12・図版４）

調査区中央部南側のＸ＝－133,340・Ｙ＝－50,650付近で検出した掘立柱建物である。建物の南側部分は２区で検出することとなったが、ここで記載を行なうこととする。

建物１は桁行３間・梁行２間で、Ｎ－27°－Ｗを軸にとる南北に長い建物である。建物の規模は芯々で北辺3.9ｍ、南辺4.2ｍ、東・西辺が6.8ｍを測り、柱間の寸法は短辺で約２ｍ、長辺で約2.2ｍである。面積は約27.5㎡である。

建物を構成する柱穴は平面円形を基調とするが、楕円形や不整隅丸方形を呈するものもみられる。規模は概ね直径0.3～0.5ｍである。土地改変により上部が大幅に削平されたと推察され、残存する深さは0.05～0.2ｍとなっている。柱穴は一部に浅いものが認められたが、概ね底面がT.P.＋23.4ｍに統一されるように掘削されている。

柱穴は基本的に地山由来の灰白～黄灰色砂質シルトブロックを含む黒～黒褐色シルトで埋められている。柱痕跡は４基の柱穴（75・78・103・106柱穴）で確認することができた。柱の直径は0.15～0.2ｍであったと考えられる。

77・86・103・105・106柱穴から細片となった土師器が出土しているが、出土量は極めて少なく詳細な時期を決し難い。僅かに図化できたものは86柱穴から出土した土師器甕の口縁部（図12－１）である。

掘立柱建物２（図13・図版５・18）

調査区東側高台部の中央、Ｘ＝－133,330・Ｙ＝－50,640付近で検出した掘立柱建物である。

建物２は桁行３間・梁行２間で、Ｎ－18°－Ｗを軸にとる南北に長い総柱建物である。建物西辺の南から２基目の柱穴は確認できなかった。建物２を構成する柱穴の中でも西辺のものは、比較的深度を有するものが多いため、確認できなかった柱穴は元々存在していなかった可能性を想定しておきたい。
建物の規模は芯々で北・南辺3.8ｍ、東辺6.3ｍ、西辺が6.5ｍを測り、柱間の寸法は1.8～2.1ｍである。

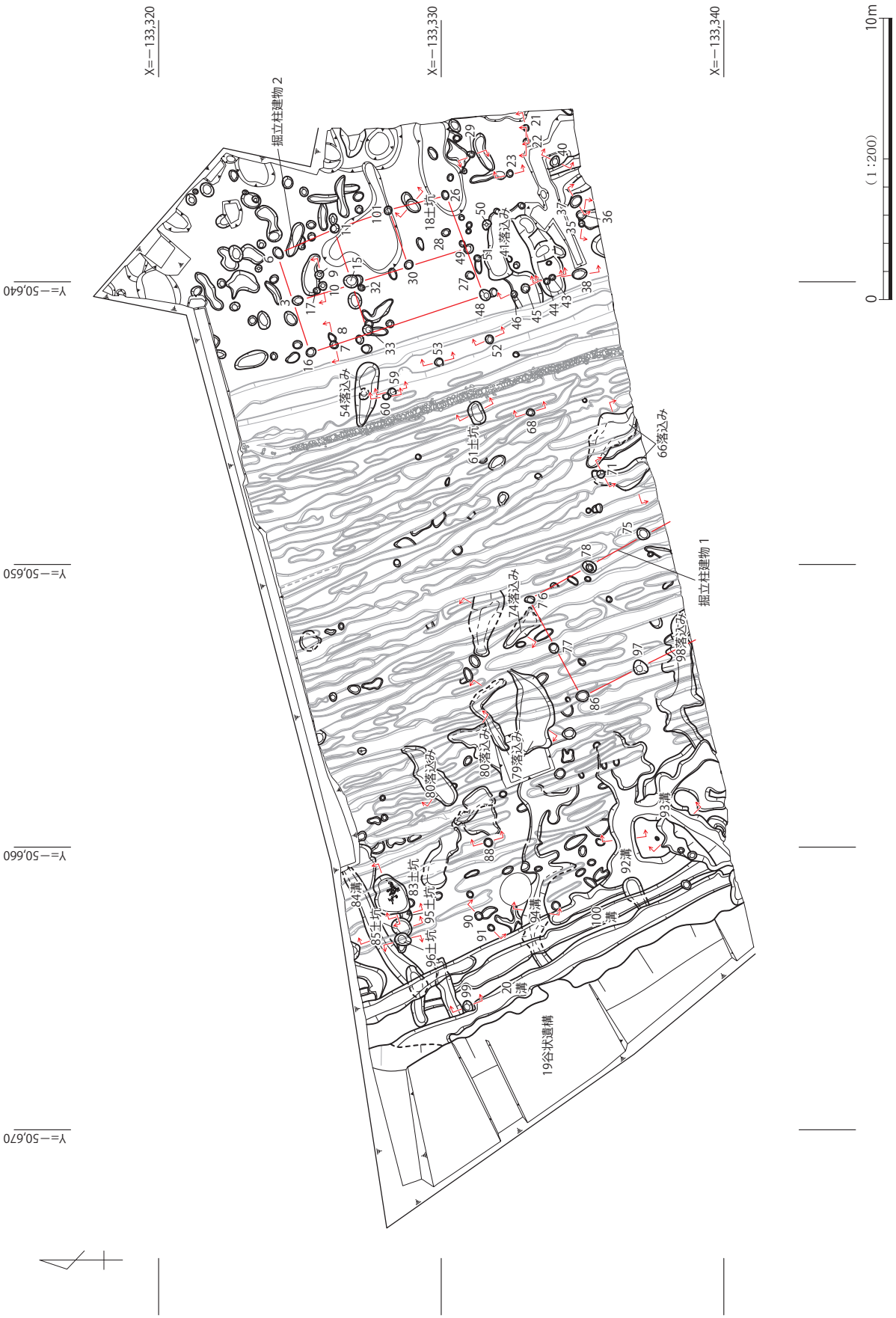


図11　1区　近世期以前の平面図

面積は約24.3㎡である。

建物を構成する柱穴は平面円形を基調とするが、楕円形を呈するものもみられる。規模は概ね直径0.3～0.5mである。土地改変により上部が大幅に削平されたと推察され、残存する深さは0.15～0.35mとなっている。建物は東から西、北から南へと下る緩斜面上に建てられたためか、柱穴は斜面上方にあたる北・東辺が浅く、斜面下方にあたる南・西辺が深く掘削される傾向にあり、柱穴底面の高さは統一されていない。なお、中央列北から２基目の15柱穴は平面検出時では直径0.5ｍを測る大きな柱穴であると思われたが、断面観察の結果、埋土に大きな差異が認められないが、２基の小穴が切り合ったものと考えられる。便宜的に15柱穴の断面図に点線で切り合いを表現しているが、新旧関係は明らかではない。

柱穴は基本的に地山由来の橙～明黄褐色シルト～シルト質粘土や黄灰色シルトのブロックを含む黒～黒褐色シルトで埋められている。柱痕跡を確認できたのは48柱穴１基のみであり、柱の直径は0.15mであったと考えられる。また、南辺中央の49柱穴では柱を抜いた後、一辺10～15㎝程度の亜角礫を３個入れて埋め戻している。

11・15・33柱穴から細片となった土師器皿（所謂「て」の字状口縁皿・回転台土師器皿）や黒色土器両黒椀が出土しているが、出土量は極めて少なく詳細な時期を決し難い。図化が可能であったのは２点である。図13－２は33柱穴出土の「て」の字状口縁皿である。口径は9.0㎝の小振りな皿。胎土は混和材をほとんど含まず、非常に精良なものである。色調は浅黄橙色を呈する。口縁端部の上方への立ち上がりは弱い。11世紀後半（京Ⅴ〔京都Ⅳ〕期新段階）の所産であろう。図13－３は15柱穴出土の回転台土師器皿である。口径は9.1㎝の小振りな皿。短い口縁部が底部から斜め上方に直線的に立ち上がり、底部外面には糸切り痕が残る。胎土は長石や石英を多く含むが、比較的精良なものである。色調は橙色を呈する。11世紀中葉～後半の所産と思われる。この２例をもって建物２の時期とするには心許ないが、一つの定点として11世紀後半を比定しておきたい。

小穴（図14・15・図版８）

掘立柱建物を構成する柱穴以外に、調査区東側高台部を中心にして、調査区全域で直径0.1～0.4ｍの平面円形や楕円形を呈する小穴を80基余り検出した。これらは上部を削平されていることもあるが、掘削深度は様々であった。また、断面形も逆台形を呈するもの（９・46小穴等）、浅い皿状を呈するもの（37・59・60小穴等）、細長いＵ字形を呈するもの（21～23小穴等）と多様である。

小穴の埋土は黒～黒褐色シルト或いは褐灰色シルトを基調とし、地山由来の橙～明黄褐色シルトや黄灰色シルトブロックの有無で分別できる。ブロックを含有しない黒色シルトを埋土にもち、断面形が細長いＵ字形を呈する小穴は、総じて埋土の締まりが悪いことが特徴的である。

小穴の性格に関しては明らかにできなかったが、46小穴のように柱痕跡が認められるものや、50小穴のように一辺10cm、厚さ２ cmの平石を根石として底に敷くものがあり、建物として復元はできないものの、柱穴として機能した小穴も少なからず存在したと想定される。また、先述した断面形が細長いＵ字形を呈する小穴（21～23小穴等）は、締まりの悪い埋土を有していることやその形状から、木の根痕である可能性も否定できない。

88小穴から土師器甕体部片がまとまって出土した以外、小穴からの出土遺物は極めて少なく、僅かに数基から土師器細片がみられたのみで、器種や時期を窺える図化可能な資料はなかった。しかし、50小穴から図13－３に類する胎土をもち、糸切り痕を有する回転台土師器皿の底部片が出土している

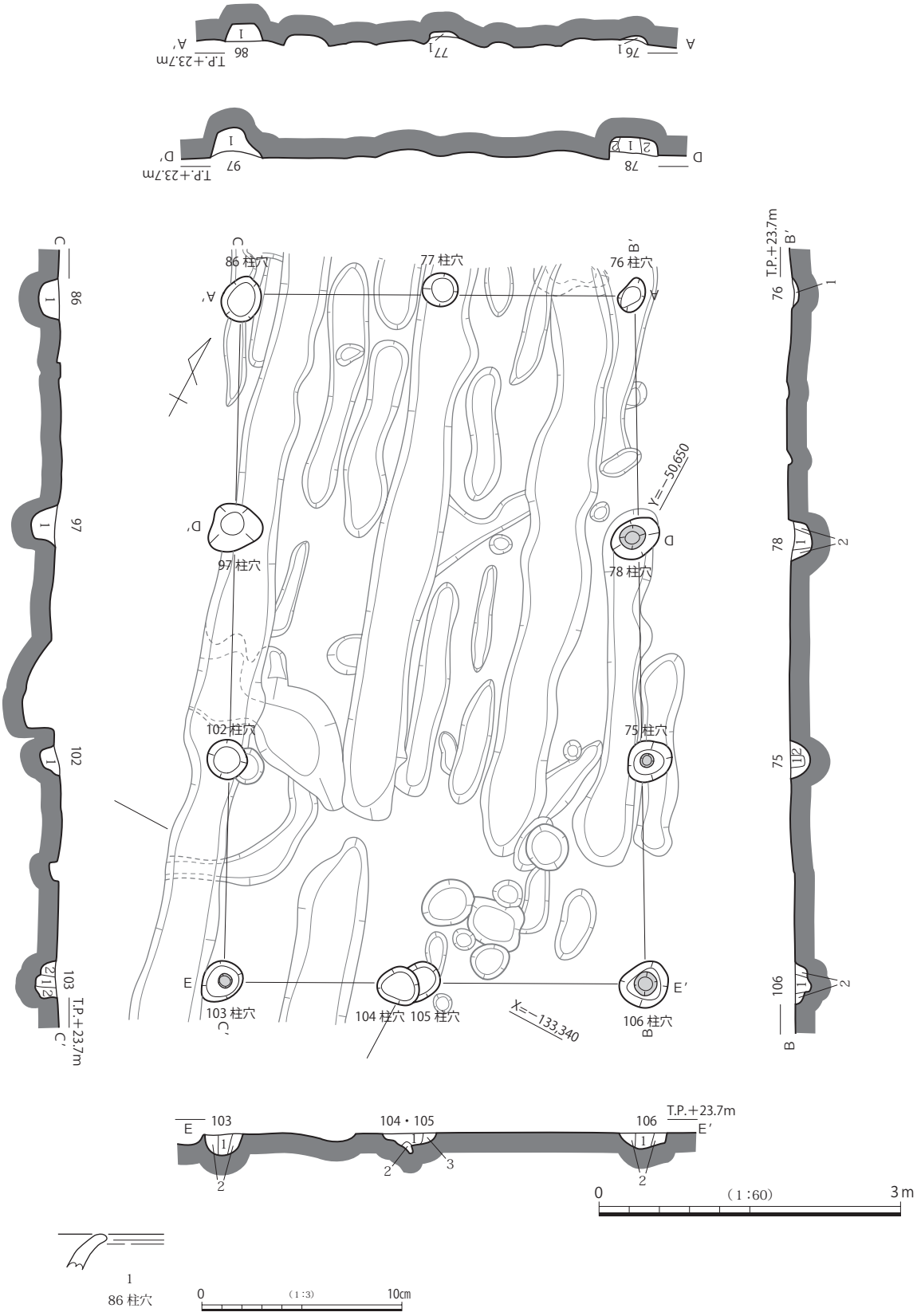


図12　掘立柱建物１　平・断面図及び出土遺物

掘立柱建物１　柱穴　土色
86 柱穴
１．10YR3/1　黒褐　シルト　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロックを含む
77 柱穴
１．10YR3/1　黒褐　シルト　5Y7/2　灰白　砂質シルト（地山由来）ブロックを含む
　地山　5Y7/2　灰白　小礫混砂質シルト
76 柱穴
１．7.5YR2/1　黒　シルト　5Y7/2　灰白　砂質シルト（地山由来）ブロック・一辺１㎝前後の 10YR7/6　明黄褐　地山風化礫を含む
97 柱穴
１．10YR3/1　黒褐　シルト　2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロック・一辺１～２㎝の小礫を含む
78 柱穴
１．10YR2/1　黒　粘質シルト　極小の 10YR8/6　黄橙　地山風化礫含む
２．A　10YR2/1　黒　シルトとB　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト（地山由来）のブロック土　A：B＝４：６　一辺１～２㎝の小礫を含む
102 柱穴
１．10YR2/1　黒　粘質シルト　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロック・一辺１～２㎝の小礫を含む
75 柱穴
１．2.5Y7/4　浅黄　シルト質粘土（地山由来）ブロック
２．10YR3/1　黒褐　シルト　2.5Y8/4　淡黄　一辺 0.5 ～１㎝の地山風化礫・2.5Y7/1　灰白　極細砂ブロックを含む
103 柱穴
１．10YR2/1　黒　シルト
２．7.5YR3/1　黒褐　シルト　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロック・5Y8/3　淡黄を呈する一辺 0.5 ㎝の地山風化礫を含む
104・105 柱穴
１．A　10YR3/1　黒褐　シルトとB　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロック土　A：B＝８：２
２．10YR1.7/1　黒　　粘質シルト（根か）
３．10YR2/1　黒　シルト　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロック・10YR6/2　灰黄褐　砂質シルト（地山由来）ブロックを含む
106 柱穴
１．10YR2/1　黒　シルト
２．A　10YR2/1　黒　シルトとB　2.5Y8/3　浅黄　シルト質粘土（地山由来）・2.5Y7/3　浅黄　シルト質粘土（地山由来）のブロック土　A：B＝８：２

ことから、建物２と同時期と考えられる11世紀後半段階の小穴が一定程度存在しているものと推察される。

18土坑（図16）

調査区東側高台部、X＝－133,329・Y＝－50,637付近に位置する平面楕円形を呈する土坑である。長軸約0.55ｍ、短軸約0.4ｍ、深さ約0.2ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は２層に分かれ、土坑中央部に黒褐色シルトが、壁際には褐灰色シルトがみられる。遺物は出土していない。

38土坑（図16）

調査区東側高台部、X＝－133,335・Y＝－50,640付近に位置する平面楕円形を呈する土坑である。長軸約0.5ｍ、短軸約0.35ｍ、深さ約0.25ｍを測る。断面形は不整逆台形を呈する。埋土は黒色シルトを基調とし、地山由来の浅黄橙～にぶい黄橙色シルト質粘土ブロックを含有する。遺物は出土していない。

61土坑（図16）

調査区中央部東側、X＝－133,331・Y＝－50,645付近に位置する平面楕円形を呈する土坑で、上部は近世期の鋤溝に切られている。長軸約0.8ｍ、短軸約0.4ｍ、深さ約0.15ｍを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は地山由来のにぶい黄橙色シルトや黒色シルトブロックを含む褐灰色シルトである。遺物が出土しておらず時期は明らかではないが、埋土中に建物等の遺構埋土に類する黒色シルトをブロックで含有することから、平安期の遺構よりも新しい遺構である蓋然性が高い。

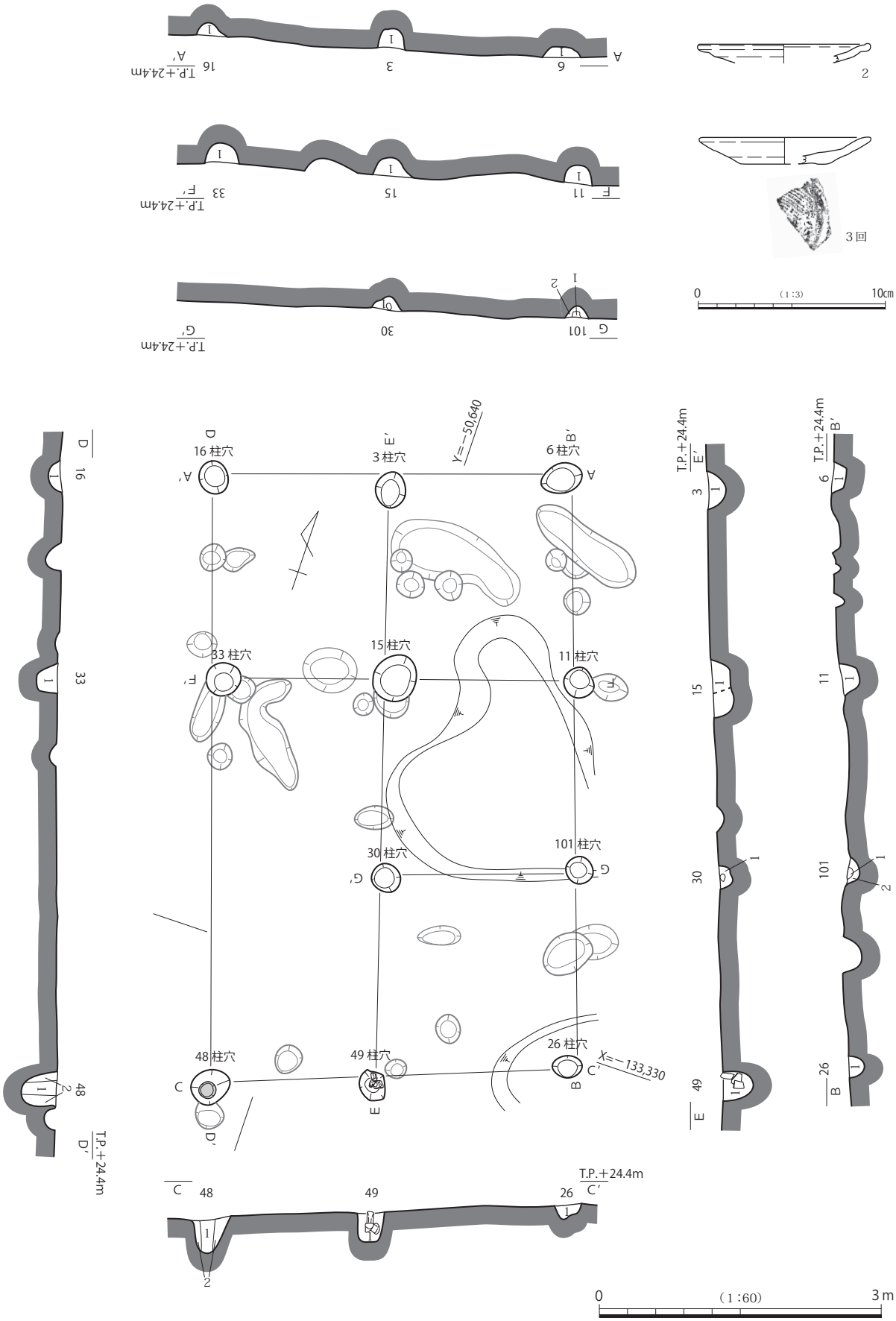


図13　掘立柱建物２　平・断面図及び出土遺物

掘立柱建物２　柱穴　土色
16 柱穴
１．10YR3/1　黒褐　シルト　7.5YR6/6　橙　粘質シルト（地山由来）の極小ブロック（一辺 0.5 ～ 1 ㎝）を含む　しまり悪い
３柱穴
１．10YR3/1　黒褐　シルト　2.5Y6/1　黄灰　シルトブロックを含む　やや粘質あるがしまり悪い
６柱穴
１．10YR3/1　黒褐　シルト　2.5Y6/1　黄灰　シルトブロックを含む　しまり悪い
33 柱穴
１．10YR2/1　黒～ 10YR3/1　黒褐　シルト　10YR7/6　明黄褐　シルト質粘土（地山由来）ブロック・10YR8/3　浅黄橙を呈する一辺１㎝程度の地山風化礫を含む
15 柱穴
１．10YR3/1　黒褐　シルト　10YR7/4　にぶい黄橙　粘土（地山由来）の極小ブロック（一辺１㎝）を僅かに炭化物を含む
11 柱穴
１．10YR3/1　黒褐　シルト　炭化物・7.5YR6/6　橙　粘質シルト（地山由来）の極小ブロック（一辺 0.5 ㎝）・一辺 0.5 ～ 1 ㎝程度の小礫を僅かに含む
30 柱穴
１．10YR2/1　黒　シルト　7.5YR6/6　橙　粘質シルト（地山由来) ブロック・一辺１～２㎝の小礫・10YR6/1　褐灰　極細砂ブロックを含む　しまり悪い
101 柱穴
１．7.5YR6/6　橙　細～中砂混シルト（地山由来）
２．A　10YR2/1　黒　シルトとB　7.5YR6/6　橙　細砂混シルト（地山由来）とC　10YR6/1　褐灰　シルトのブロック土　A：B：C＝８：１：１
48 柱穴
１．10YR2/1　黒　シルト　10YR7/6　明黄褐　シルト質粘土（地山由来) 極小ブロック（一辺 0.5 ㎝）を僅かに含む
２．10YR3/1　黒褐　シルト　10YR7/6　明黄褐　シルト質粘土（地山由来）ブロック・一辺１㎝前後の 10YR　8/4　浅黄橙を呈する地山風化礫を含む
49 柱穴
１．10YR3/1　黒褐　シルト　しまり悪い
26 柱穴
１．10YR2/1　黒　シルト　7.5YR6/6　橙　粘質シルト（地山由来）ブロック・一辺１～２㎝の小礫・10YR6/1　褐灰　極細砂ブロックを含む　しまり悪い

83土坑・85土坑・95土坑・96土坑・84溝（図16・17・図版６・７・17・18）

調査区北西部、Ｘ＝－133,328・Ｙ＝－50,662付近に位置する遺構群である。遺構群の一部は近世期の鋤溝に切られるが、比較的遺存状態は良好であった。これらの遺構からは多くの遺物が出土している訳ではないが、まとまった時期の資料がみられることから、11世紀後半段階の遺構群と捉えられる。

83土坑

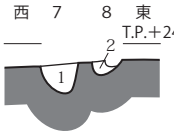
平面形が不整な六角形を呈する土坑である。土坑東側は近世期の鋤溝に切られている。土坑は長軸約1.5ｍ、短軸約1.2ｍ、深さ約0.2ｍを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は地山由来の灰白色砂質シルトを含む黒褐色極細砂混シルトである。土坑の性格は明らかではないが、土坑中央～東側の底面で土師器皿１点（図17－５）、瓦器椀３点（図17－６～８）、石鍋（図17－９）がまとまって出土した。

図17－４は須恵器杯身である。受け部は短く水平に伸び、口縁部は内傾しながら立ち上がる。６世紀後半の所産であろう。

図17－５は所謂「て」の字状口縁皿である。口径は9.4㎝の小振りな皿。口縁部は強く外反し、口縁端部は上方にしっかりと立ち上がる。底部外面にはユビオサエの痕跡が残り、切り込み円盤技法の痕跡もみられる。胎土は長石や石英を多く含むが、比較的精良なものである。色調はにぶい橙色を呈する。11世紀後半～ 12世紀初頭（京Ⅴ〔京都Ⅳ〕期新段階～京Ⅵ〔京都Ⅴ〕期古段階）の所産であろう。

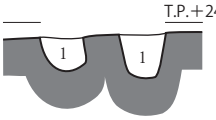
図17－６～８は瓦器椀である。口径は15㎝、器高は5.5㎝前後で、いずれも口縁端部内面には沈線を廻らせない。６・７は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部がやや外反するもの。６は内外面とも風化が顕著で器面が荒れており、調整の詳細は不明であるが、外面はユビオサエの後ヘラミガキを施しているものと思われる。７の体部外面はユビオサエの後粗めの分割ヘラミガキを、内面には太くやや粗いヘラミガキを施す。内面見込みには平行のヘラミガキがみられる。８は口縁部から体部が緩やかに内湾しながら立ち上がるもの。内外面とも風化が進み、器面が荒れているため調整の詳細は不明であるが、

西　7　　8　東
T.P.＋24.2m



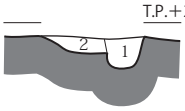
1．10YR3/1　黒褐　シルト
7.5YR6/6　橙　粘質シルト（地山）の
極小ブロック（一辺 0.5 ～ 1 ㎝）を含む
しまり悪い
2．10YR5/2　灰黄褐　砂質シルト
10YR3/1　黒褐シルトブロックを含む

西　10　　9　東
T.P.＋24.3m



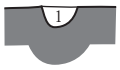
1．10YR3/1　黒褐　シルト
7.5YR6/6　橙　粘質シルト（地山）の
極小ブロック（一辺 0.5 ～ 1 ㎝）を含む
しまり悪い

北　17　　南
T.P.＋24.3m



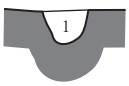
1．10YR3/1　黒褐　シルト　やや粘性あり
2.5Y6/1　黄灰シルトブロックを含む
2．10YR4/1　褐灰　砂質シルト
炭化物・一辺 0.5 ～ 1 ㎝の小礫を含む

北西　32　南東
T.P.＋24.2m



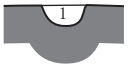
1．10YR3/1　黒褐　シルト
7.5YR6/6　橙　粘質シルト (地山由来)
極小ブロック（一辺 0.5 ㎝）・
一辺 0.5 ㎝程度の地山風化礫を含む

北　28　南
T.P.＋24.1m



1．10YR2/1　黒　シルト
7.5YR6/6　橙　粘質シルト (地山由来)
極小ブロック（一辺 0.5 ㎝）・
一辺 0.5 ㎝程度の地山風化礫・
10YR6/1　褐灰　極細砂ブロックを含む
しまり悪い

北　27　南
T.P.＋24.1m



1．10YR2/1　黒　シルト
7.5YR6/6　橙　粘質シルト (地山由来)
極小ブロック（一辺 0.5 ㎝）・
一辺 0.5 ㎝程度の地山風化礫・
10YR6/1　褐灰　極細砂ブロックを含む
しまり悪い

南　51　北
T.P.＋24.1m

1．10YR3/1　黒褐　シルト
10YR7/4　にぶい黄橙　砂質シルト
(地山由来) ブロックを含む

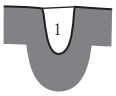
南　29　北
T.P.＋24.4m

1．10YR2/1　黒　シルト
7.5YR6/6　橙　粘質シルト
(地山由来) 極小ブロック（一辺 0.5 ㎝）・
一辺 0.5 ㎝程度の地山風化礫・
10YR6/1　褐灰　極細砂ブロックを含む
しまり悪い

西　21　東
T.P.＋24.3m

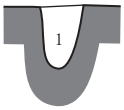
1．10YR2/1　黒　シルト
しまり悪い

西　22　東
T.P.＋24.3m



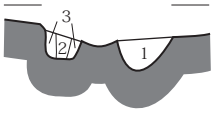
1．10YR2/1　黒　シルト
しまり悪い

北　23　南
T.P.＋24.3m



1．10YR2/1　黒　シルト
しまり悪い

北　46　　45　南
T.P.＋24.1m



1．10YR3/1　黒褐　シルト
10YR7/6　明黄褐　シルト質粘土 (地山由来) ブロック・
一辺 0.5 ～ 1 ㎝の 10YR8/4　浅黄橙を呈する地山風化礫・
一辺 0.5 ㎝の小礫を含む
2．10YR2/1　黒　シルト
3．A　10YR2/1　黒　シルトと
B　10YR7/6　明黄褐　シルト質粘土
(地山由来) のブロック土
A：B＝4：6

北　43　南
T.P.＋24.1m

1．10YR2/1　黒　シルト　しまり悪い
10YR7/6　明黄褐　シルト質粘土
(地山由来) ブロック（一辺 0.3 ㎝）を
僅かに含む

北　44　南
T.P.＋24.1m

1．10YR2/1　黒　シルト　しまり悪い
10YR7/6　明黄褐　シルト質粘土
(地山由来) ブロック（一辺 0.3 ㎝）を僅かに含む

0　（1：40）　2 m

図14　小穴　断面図（1）

外面はユビオサエの後粗いヘラミガキを、内面は比較的細かなヘラミガキを施しているものと思われる。内面見込みには平行の密なヘラミガキがみられる。高台はいずれも高く、外側に踏ん張る形態である。６～８は和泉型瓦器椀Ⅰ－２期の資料であろう。11世紀後半の所産。

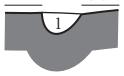
東　36　35　西
T.P.＋24.2m

1．10YR2/1　黒　シルト
炭化物を含む
2．7.5YR4/1　褐灰　極細砂混シルト
一辺 0.5 ㎝程度の 10YR8/3　浅黄橙を
呈する地山風化礫を含む

東　37　西
T.P.＋24.2m

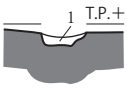
1．7.5YR4/1　褐灰　極細砂混シルト
一辺 0.5 ㎝程度の 10YR8/3　浅黄橙を
呈する地山風化礫を含む

北東　40　南西
T.P.＋24.2m



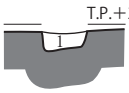
1．7.5YR4/1　褐灰　極細砂混シルト
一辺 0.5 ㎝程度の 10YR8/3　浅黄橙を
呈する地山風化礫を含む

北　60　南
T.P.＋23.8m



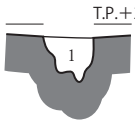
1．10YR2/2　黒褐　シルト
一辺 1 ㎝程度の 10YR8/3　浅黄橙　地山風化礫・
10YR7/4　にぶい黄橙　シルト質粘土
(地山由来) ブロック・
10YR6/1　褐灰　シルトブロックを含む

北　59　南
T.P.＋23.8m



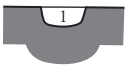
1．10YR2/2　黒褐　シルト
一辺 1 ㎝程度の 10YR8/3　浅黄橙　地山風化礫・
10YR7/4　にぶい黄橙　シルト質粘土
(地山由来) ブロック・
10YR6/1　褐灰　シルトブロックを含む

北　53　南
T.P.＋24.0m



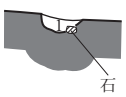
1．10YR2/1　黒　シルト
10YR6/2　灰黄褐　シルト質粘土
(地山由来) 及び
10YR7/4　にぶい黄橙　シルト質粘土
(地山由来) ブロック・
一辺 0.5 ㎝の 10YR8/4　浅黄橙を呈する
地山風化礫を含む

北　52　南
T.P.＋24.0m



1．10YR2/1　黒　シルト
10YR6/2　灰黄褐　シルト質粘土
(地山由来) 及び
10YR7/4　にぶい黄橙　シルト質粘土
(地山由来) ブロック・
一辺 0.5 ㎝の 10YR8/4　浅黄橙を
呈する地山風化礫を含む

北　68　南
T.P.＋23.7m



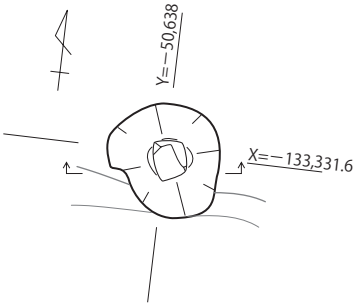
1．10YR2/2　黒褐　シルト
2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト
(地山由来) ブロックを含む

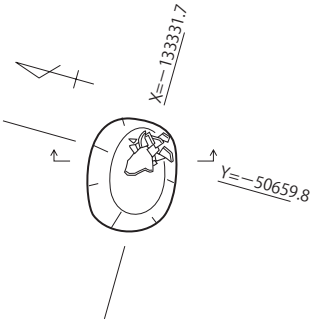
東　71　西
T.P.＋23.7m

1．10YR2/1　黒　シルト
10YR7/3　にぶい黄橙　シルト質粘土
(地山由来)・
2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト
(地山由来) ブロック・
一辺 1 ㎝前後の礫を含む

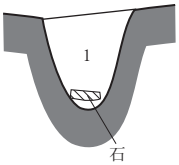
北東　90　91　南西
T.P.＋23.7m

1．10YR3/1　黒褐　シルト
2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト
(地山由来) ブロックを含む
2．10YR4/1　褐灰　シルト
2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト
(地山由来) ブロックを含む



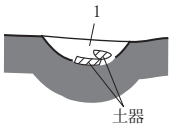


西　50　東
T.P.＋24.2m



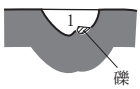
1．10YR3/1　黒褐　シルト

北　88　南
T.P.＋23.7m



1．10YR2/2　黒褐シルト
10YR7/4　にぶい黄橙　シルト
(地山由来) ブロック・
一辺 1 ～ 5 ㎝の礫・
10YR7/1　灰白　極細砂
(根由来) ブロックを含む

北　99　南
T.P.＋23.5m

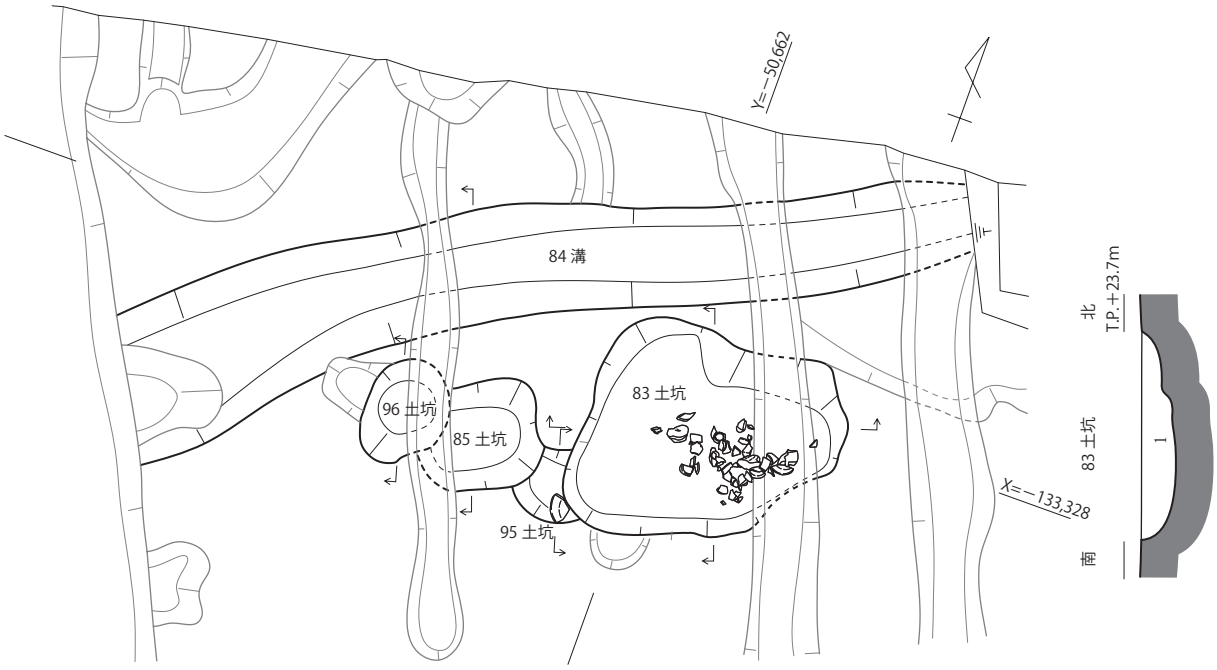


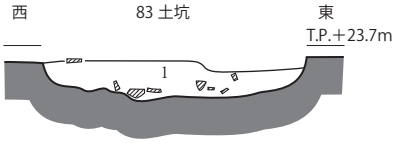
1．7.5YR4/1　褐灰　粘質シルト
一辺 2 ～ 4 ㎝の礫・
5Y8/3　淡黄を呈する一辺 2 ㎝前後の
地山風化礫を含む

0　(1：40)　2m

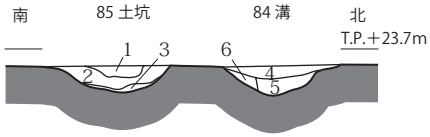
(50・88)
0　(1：20)　1m

図15　小穴　平・断面図（2）

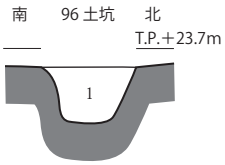




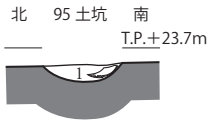
1．10YR3/1　黒褐　極細砂混シルト
　10YR8/2　灰白　砂質シルト（地山由来）ブロック・
　10YR7/6　明黄褐～ 10YR8/3　浅黄橙を呈する
　一辺 0.5 ～ 1 ㎝の地山風化礫を含む
地山　2.5Y8/3 ～ 2.5Y8/4　淡黄　礫混砂質シルト



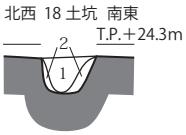
1．10YR3/1　黒褐　シルト
　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロックを多く含む
2．10YR2/1　黒　シルト
　10YR8/4　浅黄橙　シルト質粘土（地山由来）ブロックを僅かに含む
3．10YR4/1　褐灰　シルト
　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロックを含む
4．10YR3/2　黒褐　極細砂混シルト
　2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロックを含む
5．10YR3/1　黒褐　シルト　一辺 1 ～ 2 ㎝の小礫を含む
6．10YR4/1　褐灰　極細砂混シルト
　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロックを含む
地山　2.5Y8/3　淡黄　礫混砂質シルト



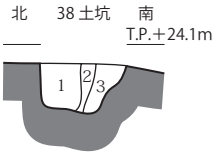
1．10YR3/1　黒褐　シルト
　2.5Y8/4　淡黄　シルト質粘土
　（地山由来）ブロック・
　10YR7/6　明黄褐の一辺 1 ㎝程度の
　地山風化礫を含む



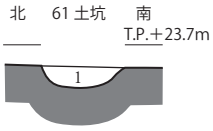
1．7.5YR3/1　黒褐　極細砂混シルト
　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト
　(地山由来）ブロックを含む



1．10YR3/1　黒褐　シルト
2．7.5YR4/1　褐灰　細砂混シルト



1．10YR2/1　黒　シルト
　10YR8/3　浅黄橙　シルト質粘土
　(地山由来) 極小（一辺 0.5 ㎝）ブロック・
　一辺 0.5 ㎝程度の地山風化礫を含む
2．A　10YR7/4　にぶい黄橙　シルト質粘土 (地山由来) と
　B　10YR2/1　黒　シルトのブロック土
　A：B＝8：2
3．10YR2/1　黒　シルト
　一辺 0.5 ㎝程度の 10YR8/3　浅黄橙を呈する
　地山風化礫を含む



1．5YR5/1　褐灰　シルト
　10YR7/4　にぶい黄橙　シルト質粘土
　(地山由来) ブロック・
　10YR2/1　黒　シルトブロックを僅かに含む
　斑鉄みられる

0　（1：40）　2m

図16　83・85・95・96土坑・84溝他　平・断面図

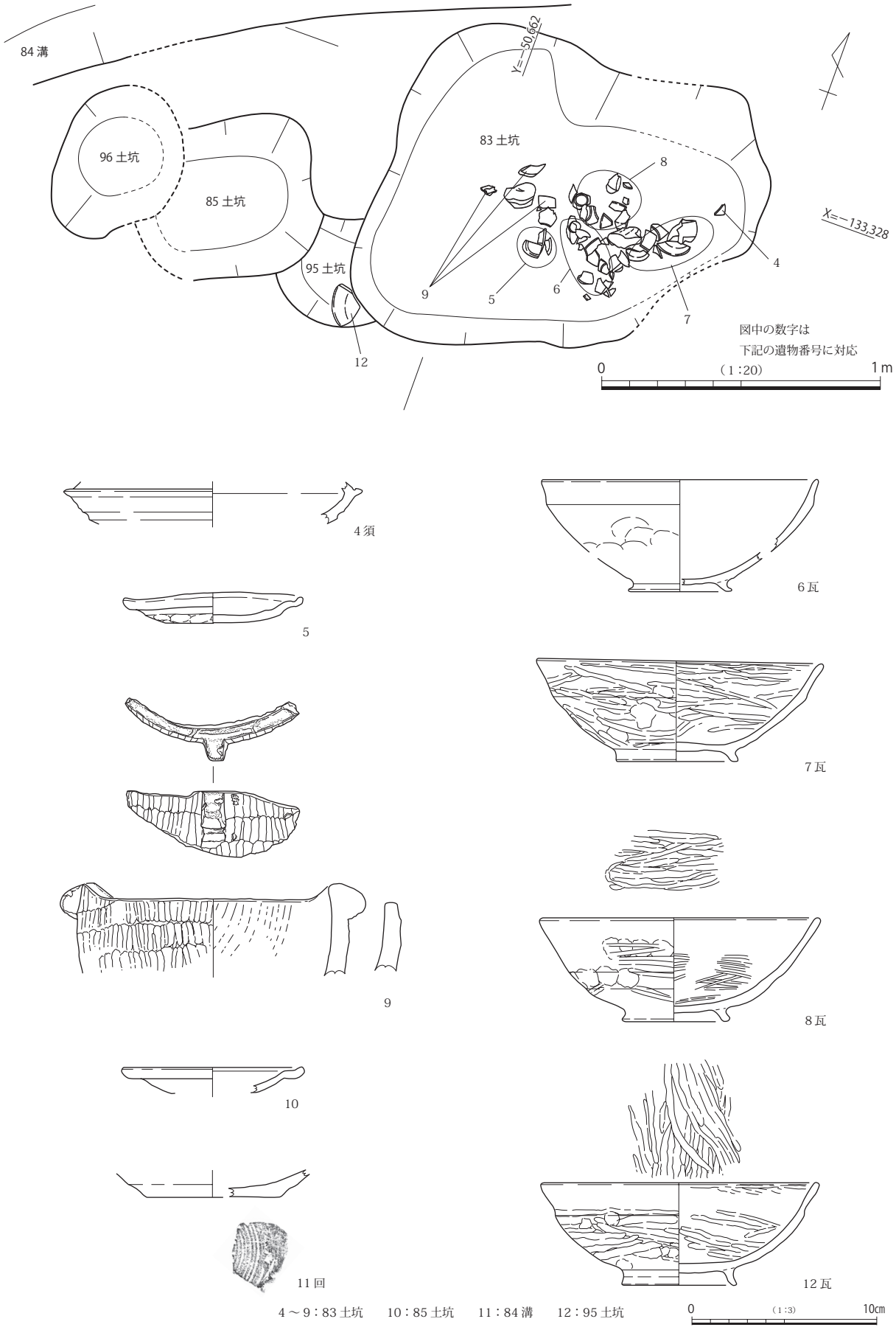


図17　83・85・95土坑・84溝出土遺物

図17－９は石鍋である。体部下半以下は残存していなかった。復元口径は12.6㎝、残存高は4.3㎝を測る。口径と底径がほぼ同じで器高が低い形態と思われる。口縁端部外面に瘤状把手がみられる。把手部分は２点出土している。把手の断面形は丸味を帯びた三角形を呈する。把手が接する口縁端部は山形（台形状）に削り出し、波状口縁状を呈している。口縁部から体部外面には幅約２～４㎜の縦方向のノミ痕が密に残る。切り合い関係から、口縁部側から底部側に向けて削ったものと思われる。なお、把手下の体部外面には横位のケズリがみられる。内面は縦位に削った後、横位に丁寧な研磨を施し、平滑に仕上げている。木戸分類Ⅱ－ｂ類に属し、11世紀後半の所産と考えられる。

95土坑

83土坑の西側に位置する。土坑東側を83土坑に、西側を85土坑に切られ、平面形は明らかではない。断面形は浅い皿状を呈し、地山由来の淡黄色砂質シルトを含む黒褐色極細砂混シルトが堆積している。土坑の性格は明らかでないが、半身の瓦器椀（図17－12）１点が土坑南側底面から出土している。

12は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部がやや外反するもの。口縁部内面には沈線を廻らせない。口径14.6㎝、器高5.5㎝を測る。体部外面はユビオサエの後やや太めの分割ヘラミガキを、内面には比較的密なヘラミガキを施す。内面見込みには密な平行及び斜位のヘラミガキがみられる。高台は高く、外側に踏ん張る形態である。なお、体部外面下半や内面には直径３～６㎜のクレーター状剥離が僅かにみられる。和泉型瓦器椀Ⅰ－２期～Ⅱ－１期の資料か。11世紀後半～ 12世紀前半の所産。

85土坑

95土坑の西側に位置し、平面隅丸方形状を呈する土坑。土坑西側を近世期の鋤溝や96土坑に切られている。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は３層に分かれ、上層が黒褐色シルト、中層が黒色シルト、下層が褐灰色シルトである。出土遺物には細片となった土師器がみられたが、図化が可能であったのは図17－10のみである。10は所謂「て」の字状口縁皿。復元口径9.6㎝の小振りな皿である。表裏面とも風化が進み、器面が荒れている。口縁部は外反し、口縁端部は斜め上方に緩やかに立ち上がる。胎土は長石や石英を多く含むが、比較的精良なものである。色調は浅黄橙色を呈する。11世紀後半～ 12世紀初頭（京Ⅴ〔京都Ⅳ〕期新段階～京Ⅵ〔京都Ⅴ〕期古段階）の所産であろう。

96土坑

85土坑の西側に位置し、平面楕円形を呈する土坑。土坑東側は近世期の鋤溝に切られている。断面形は逆台形を呈し、埋土は地山由来の淡黄色シルト質粘土ブロックを含む黒褐色シルトである。須恵器の杯蓋片が１点出土しているが、83土坑の図17－４の須恵器と同様、後世に混入したものと考えられる。

84溝

土坑群の北側に位置し、Ｎ－60°－Ｅを軸に北東から南西にはしる溝である。溝の東側は調査区外へと延び、西側は段によって切られている。検出長は約4.6ｍである。溝は東側がやや狭く幅約0.4ｍ、西側が約0.8ｍを測る。断面形は浅い皿状を呈している。埋土は３層に分かれ、黒褐色シルト・極細砂混シルト～褐灰色極細砂混シルトが堆積している。

84溝が指向する軸は、建物１や２区で検出した建物５の主軸に直交する方位であることから、これ

ら建物と有機的に関連する施設であった可能性も想定できる。

遺物は僅かに土師器皿が２点みられたのみである。うち１点が図化できた。図17－11は回転台土師器皿である。短い口縁部が底部から斜め上方に直線的に立ち上がり、底部外面には糸切り痕が残る。胎土は微細な長石や石英を僅かに含む精良なものである。色調はにぶい褐～灰黄褐色を呈する。11世紀中葉～後半の所産と思われる。

92～94溝（図18・19・図版９）

調査区西側中央から南側に位置する溝群である。溝は直線的にはしるものではなく、不定方向に分岐しながら存在する。いずれの溝も底面は緩やかに東から西、或いは北から南へと傾斜している。断面形は浅い皿状を呈するもの（92溝）、逆台形を呈するもの（94溝）、底面の凹凸が激しく不定形なもの（93溝）と多岐に亘り、人為的に掘削されたものとは捉えにくい。埋土は黒褐色シルトを基調として灰黄褐色シルトや地山由来の淡黄色砂質シルトのブロックが含まれている。いずれの溝からも出土遺物が少なく、僅かに須恵器甕片や土師器片がみられたのみで、詳細な時期を決し難い。図19－13・14は93溝出土資料である。13は土師器甕の把手。把手上面には長さ1.5㎝、幅0.5㎝の長楕円形の切込みがみられる。14は須恵器甕である。外面は斜位の平行タタキの後、縦位の平行タタキを施し、全面ではなく間隔をあけてカキメを施している。内面はナデているが、同心円文の当て具痕が残る。

20溝・100溝（図18・19・図版18）

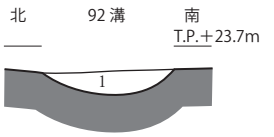
調査区西端部に位置する。 両者ともに19谷状遺構の東側にあり、Ｎ－31°－Ｗを軸に北西から南東に直線的にはしる。

100溝は幅0.5～0.8ｍ、深さ約0.05～0.1ｍを測る。検出長は約10ｍである。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黒褐色シルトで地山由来の淡黄色砂質シルトブロックを含んでいる。出土遺物は極めて少なく、須恵器片が２点みられるのみで時期を決し難い。埋土の様子から古代の所産と思われる。

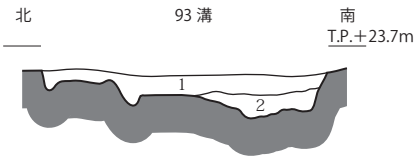
20溝は100溝の西側約0.3ｍに位置する。図11では20溝北端は19谷状遺構に切られるように表現してあるが、20溝の方が19谷状遺構よりも新しく、19谷状遺構埋没後に掘削されたものである。20溝は幅0.4～0.9ｍ、深さ0.05～0.15ｍを測る。溝北側は調査区外へ、南側は２区へと延び、検出長は約14ｍである。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は黄灰色シルトである。出土遺物は極めて少なく、須恵器・土師器片、砥石がみられたのみで時期を決し難い。埋土の雰囲気からすれば古代以降で近世以前の所産と考えられる。図19－15は砥石。残存長約7.7㎝、最大幅約4.4㎝、最大厚2.6㎝を測り、重量は119.8ｇである。主要な使用面は表裏２面である。側面にも平滑な部分が僅かに認められるが、使用痕は明瞭でない。肌理はやや粗く、中砥と思われる。石材は凝灰岩系であろうか。

19谷状遺構（図18・19・図版18）

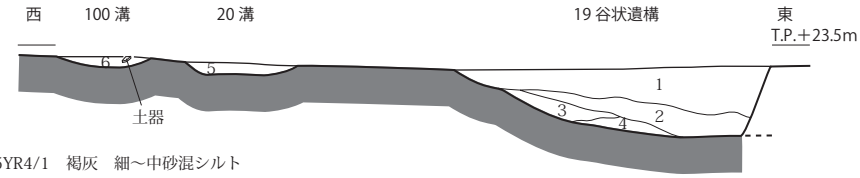
調査区西端部、20溝の西側約0.3～0.7ｍに位置する。Ｎ－29°－Ｗを軸に北西から南東に直線的にはしり、西側に向けて落ちる地形である。調査区内では東肩を検出したのみである。肩北側は調査区外へと延びる。南側は２区へと延びるが、Ｘ＝－133,347・Ｙ＝－50,658付近で調査区外に広がって行く。谷状遺構の肩から西側約20ｍに位置する第８次調査では、調査区東端部が東に緩やかに下がる地形であることが明らかになっているが、谷状地形の存在は確認されていない。従って、19谷状遺構は大き



1．10YR5/2　灰黄褐　極細～細砂混シルトと
　10YR3/1　黒褐　極細砂混シルトが混ざったもの
　一辺１㎝前後の 2.5Y8/6　黄を呈する地山風化礫を含む



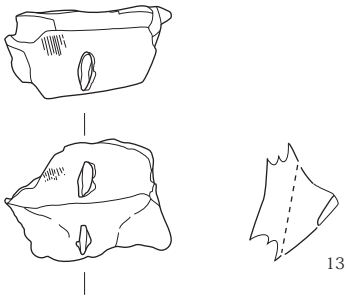
1．10YR3/1　黒褐　極細～細砂混シルト
　10YR8/4　浅黄橙　砂質シルト（地山由来）ブロックを含む
2．10YR4/1　褐灰　極細砂混シルト
　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロック・
　2.5Y8/6　黄　一辺２㎝前後の地山風化礫を含む



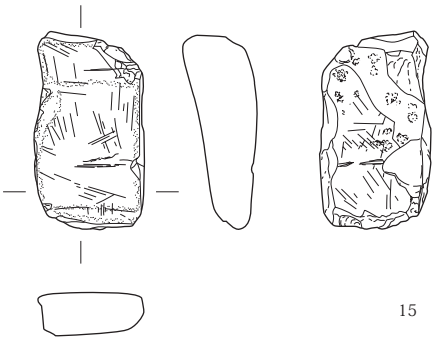
1．7.5YR4/1　褐灰　細～中砂混シルト
　炭化物・2.5Y8/6　黄の一辺 0.5 ㎝程度の地山風化礫・
　一辺１～ 10 ㎝の礫を含む
2．2.5Y3/1　黒褐　極細砂混粘質シルト
　2.5Y6/1　黄灰　細～中砂ブロック・炭化物・
　一辺２～３㎝の礫・2.5Y8/6　黄を呈する一辺１～３㎝の地山風化礫を含む
3．10YR4/1　褐灰　粘質シルト
4．10YR6/1　褐灰　礫混細～粗砂（砂礫）
　礫は一辺２～ 10 ㎝程度　この層上面付近で遺物多く出土
5．2.5Y4/1　黄灰シルト
6．7.5YR3/1　黒褐　極細砂混シルト
　2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロックを含む
地山　2.5Y8/4　淡黄　礫混砂質シルト

0　（1：40）　2m

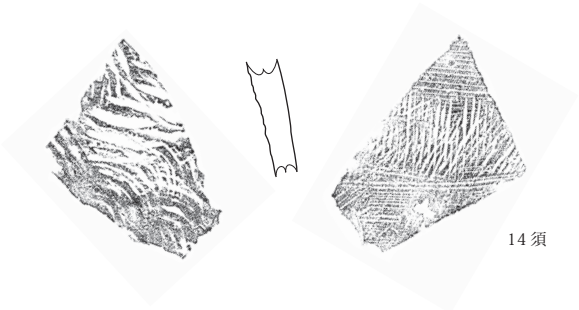
図18　20・100溝・19谷状遺構他　断面図



13



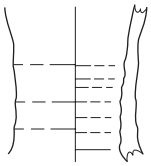
15



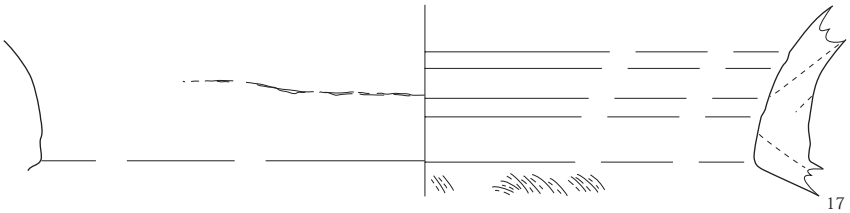
14 須

13・14：93 溝
15：20 溝
16 ～ 20：19 谷状遺構
21：74 落込み

0　（1：3）　10㎝



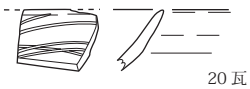
16 須



17 須

18

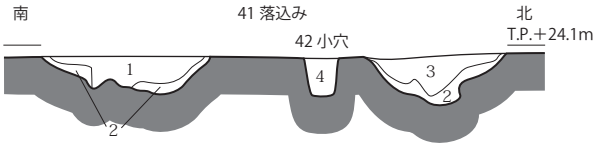
19 黒



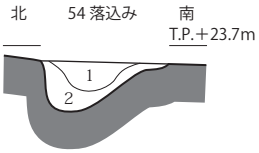
20 瓦

21 黒

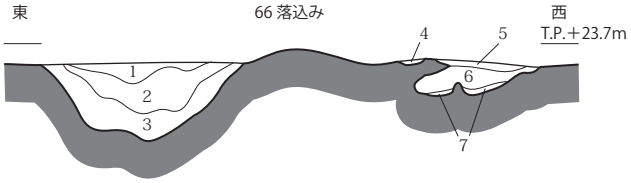
図19　20・93溝・19谷状遺構・74落込み出土遺物



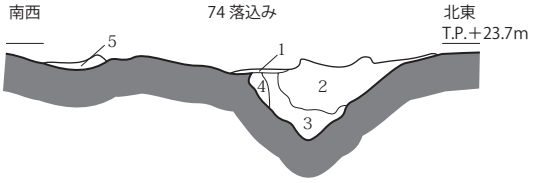
1．10YR2/1　黒　シルト
　一辺１～２㎝の小礫を含む　　ひげ根多し
2．10YR5/2　灰黄褐　シルト
　（根の影響で地山が汚れたもの）
3．10YR3/1　黒褐　シルト
　一辺 0.5 ㎝の 10YR7/6　明黄褐　地山風化礫を含む
4．10YR2/1　黒　シルト
　10YR7/6　明黄褐　シルト質粘土 (地山由来) ブロックを多く含む



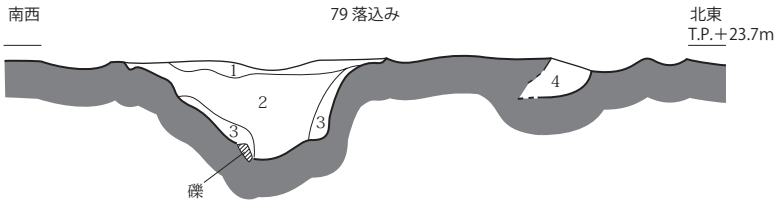
1．7.5YR3/1　黒褐　シルト
　一辺１㎝前後の 10YR8/6　黄橙　地山風化礫・
　10YR7/1　灰白　シルト（根由来）ブロックを含む
2．10YR6/2　灰黄褐　シルト
　一辺１㎝前後の小礫を含む
地山　10YR7/4　にぶい黄橙～ 10YR7/6　明黄褐
　礫混シルト質粘土



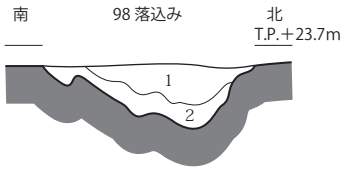
1．10YR4/1　褐灰　細～中砂混シルト
　10YR7/3　にぶい黄橙　シルト質粘土 (地山由来) ブロック・
　一辺１～２㎝の小礫を含む（耕土下層相当・鋤溝埋土）
2．10YR1.7/1　黒　シルト　しまり悪い
3．2.5Y3/1　黒褐　粘質シルト
　10YR7/4　にぶい黄橙　シルト質粘土 (地山由来) ブロックを含む
4．10YR3/1　黒褐　シルト混極細～細砂
　2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト (地山由来) ブロックを含む（鋤溝埋土）
5．2.5Y5/1　黄灰　極細砂混シルト（鋤溝埋土）
6．10YR2/1　黒　シルト
　2.5Y8/6　黄　砂質シルト (地山由来) ブロック・
　一辺１～５㎝大の礫を含む（根痕）
7．2.5Y5/1　黄灰　シルトと
　2.5Y8/4　淡黄　砂質シルトが混ざったもの（根による擾乱）
地山　2.5Y8/4 淡黄～ 2.5Y8/6　黄　一辺５～ 15 ㎝大の礫混砂質シルト～砂質シルト



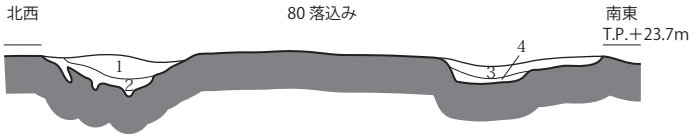
1．10YR2/1　黒　砂質シルト
　10YR7/6　明黄褐を呈する一辺 0.5 ～ 1 ㎝の地山風化礫・
　5Y7/3　浅黄　砂質シルト (地山由来) ブロックを含む（鋤溝埋土）
2．2.5Y2/1　黒　粘質シルト
　一辺１㎝程度の小礫を僅かに含む
3．10YR4/1　褐灰　粘質シルト
　10YR7/2　にぶい黄橙　シルト質粘土 (地山由来) ブロックを含む
4．2.5Y6/2　灰黄　砂質シルト
5．10YR5/1　褐灰　極細砂混シルト
地山　5Y7/3　浅黄　砂質シルト～
　7.5Y8/2　灰白　一辺３～ 15 ㎝の礫混砂質シルト



1．10YR5/1　褐灰　細砂混シルト
　2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト (地山由来) ブロック・
　10YR2/1　黒　シルトブロック・
　一辺２㎝前後の小礫・
　2.5Y8/3　淡黄　一辺１㎝前後の地山風化礫を含む
　（耕作土）
2．10YR2/1　黒　粘質シルト
　一辺１㎝程度の 2.5Y8/3　淡黄を呈する地山風化礫を
　僅かに含む
3．10YR4/1　褐灰　粘質シルト
　5Y8/3　淡黄　砂質シルト (地山由来) ブロックを含む
4．10YR2/1　黒　シルト（斜めに深くもぐり込む）
地山　2.5Y8/6 ～ 5Y8/3　淡黄　礫混砂質シルト～砂質シルト



1．10YR1.7/1　黒　シルト　しまり悪い
　10YR7/6　明黄褐　シルト質粘土
　(地山由来) ブロック・
　一辺１～２㎝の小礫を含む
2．10YR4/1　褐灰　粘質シルト
　10YR7/6　明黄褐　シルト質粘土
　(地山由来) ブロックを含む



1．7.5YR2/1　黒　シルト
2．10YR4/1　褐灰　シルト
　5Y8/3　淡黄　極小の地山風化礫
3．10YR2/1　黒　シルト
　5Y8/3　淡黄　砂質シルト (地山由来) ブロックを含む
4．5Y3/1　オリーブ黒　シルト

0　（1：40）　2m

図20　落込み　断面図

く見積もって幅約18ｍ程度の規模が想定される。

埋土は大きく４層に分かれ、上層が褐灰色細～中砂混シルト、中層が黒褐色極細砂混粘質シルト、下層が褐灰色粘質シルト・砂礫層である。出土遺物はさほど多くはないが、下層の砂礫層から出土する傾向にあった。出土遺物には土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、青磁等（図19－16～20）がみられ、総体的に摩滅した細片になっている。谷状遺構の初現は明らかではないが、瓦器や青磁碗がみられることから、中世前半段階（13世紀頃）には埋没したものと考えられる。

図19－16は須恵器壺頸部。17は須恵器甕頸部である。肩部外面には自然釉がかかる。肩部内面には同心円文の当て具痕が残る。18は所謂「て」の字状口縁皿。復元口径は9.2㎝の小振りな皿。胎土は金雲母や赤色くさり礫を含むが、比較的精良なものである。色調は灰白色を呈する。摩滅が著しく、口縁端部の立ち上がりははっきりしない。11世紀中頃～後半（京Ⅴ〔京都Ⅳ〕期中～新段階）の所産であろう。19は黒色土器内黒椀である。摩滅が著しく調整は不明。断面が扁平な逆台形を呈する高台が付く。20は瓦器椀。外面にはヘラミガキが施されず、内面には細く疎らなヘラミガキを施す。口縁部は薄く、端部は尖り気味に収める。楠葉型瓦器椀Ⅲ－３～Ⅳ－１期、13世紀中頃～後半の所産か。図版18－69は龍泉窯系の鎬がみられないタイプの蓮弁文青磁碗である。13世紀初頭～前半の所産か。

落込み（図19・20・図版９）

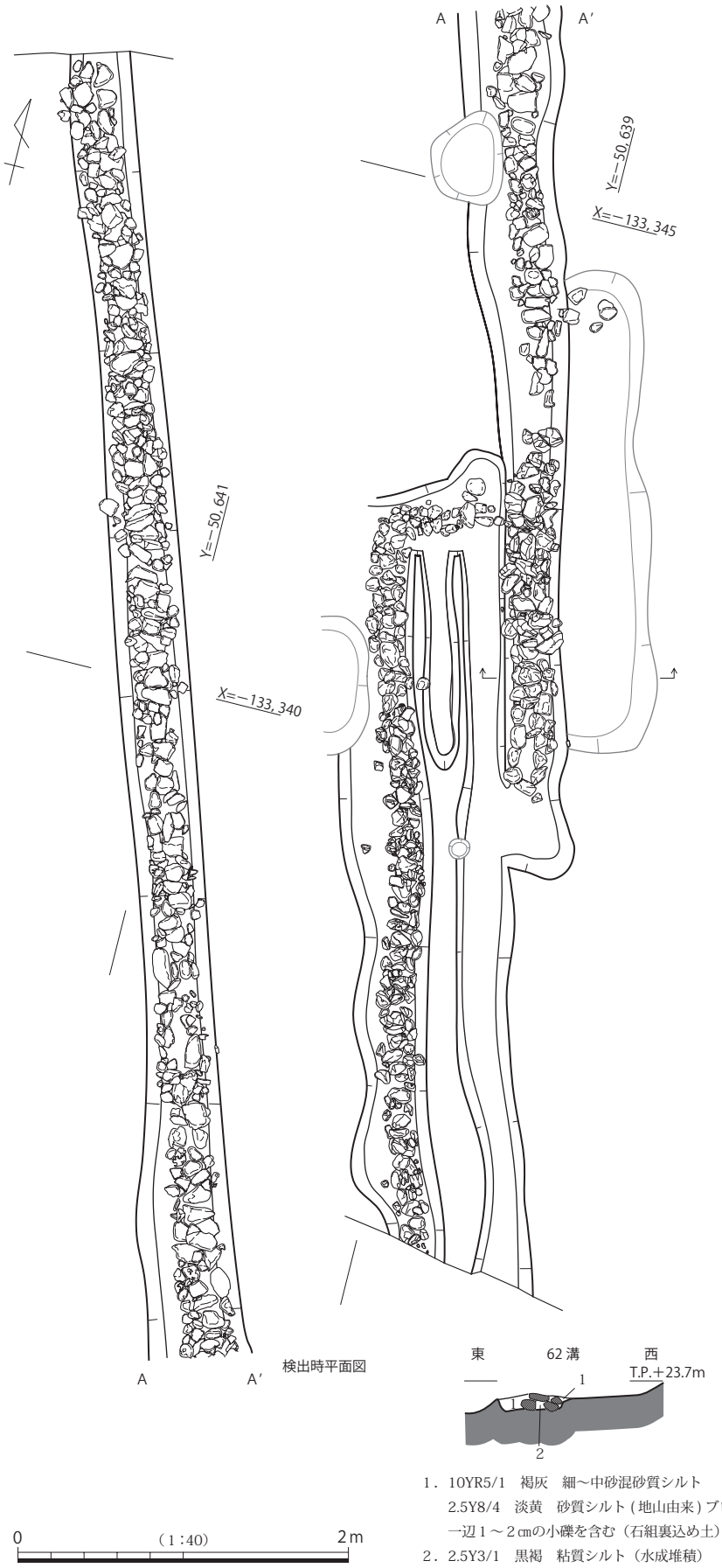
緩やかに弧を描いて向かい合う２条の溝１組で構成され、平面不定形なＵ字形或いは馬蹄形状を呈する落込みを調査区全域で８基検出した。落込みを形成する溝は、底面や側壁が滑らかでなく著しく凹凸がみられる。断面形をみると、両溝が均等な深さを有するのではなく、片側のものが深く、他方が浅くなる傾向が強い。埋土は概ね上下２層に分かれ、上層に黒色シルト～粘質シルトが、下層に灰黄褐～褐灰色シルト～粘質シルトが堆積している。こうした落込みは近年、土坑状変形と称され、地震動に起因する変形構造と指摘される。今回検出したものも人為的な掘削とは考え難い形状を示していることから、土坑状変形である可能性を想定しておきたい。なお、断面図には表現されていないが、２条の溝に挟まれた中央部の基盤層（地山）には、周辺の基盤層にさほど礫がみられない状況においても、多くの礫が集中する傾向が窺えた。これは地震による破壊・変形に伴い、基盤層の下位に広がる礫層が姿をみせたものと推察される。

他の遺構に比して、落込みからの出土遺物はより少なく、詳細な時期は不明である。但し、落込みと切り合い関係をもつ平安期と想定される遺構が幾つか存在することから、落込みは平安時代以前の所産である可能性が高い。図19－21は74落込みから出土した黒色土器内黒椀。内外面とも摩滅著しく調整は不明。高台は高く、外側に踏ん張る形態である。

第３節　２区の調査

２区は調査区の南側半分、Ｘ＝－133,335～341・Ｙ＝－50,627～664に当たり、東西に細長い範囲となった。なお、１区で掘り残した東側部分も併せて調査を実施したため、北東端部で幅約１～２ｍ、北側に９ｍ突出した形状となっている。検出した遺構面は１面である。遺構面は北東隅が一番高くT.P.＋24.1ｍを測り、緩やかに西、南へと傾斜し、調査区南東隅でT.P.＋23.7ｍ、南西隅でT.P.＋23.2ｍとなる。この地形は、先に述べた１区と併せて、調査区西端で検出した谷状地形に、また南側は溜池（元は北東

図21　2区　近世期平面図



1．10YR5/1　褐灰　細～中砂混砂質シルト
　2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロック・
　一辺１～２㎝の小礫を含む（石組裏込め土）
2．2.5Y3/1　黒褐　粘質シルト（水成堆積）

図22　62溝　平・断面図（1）

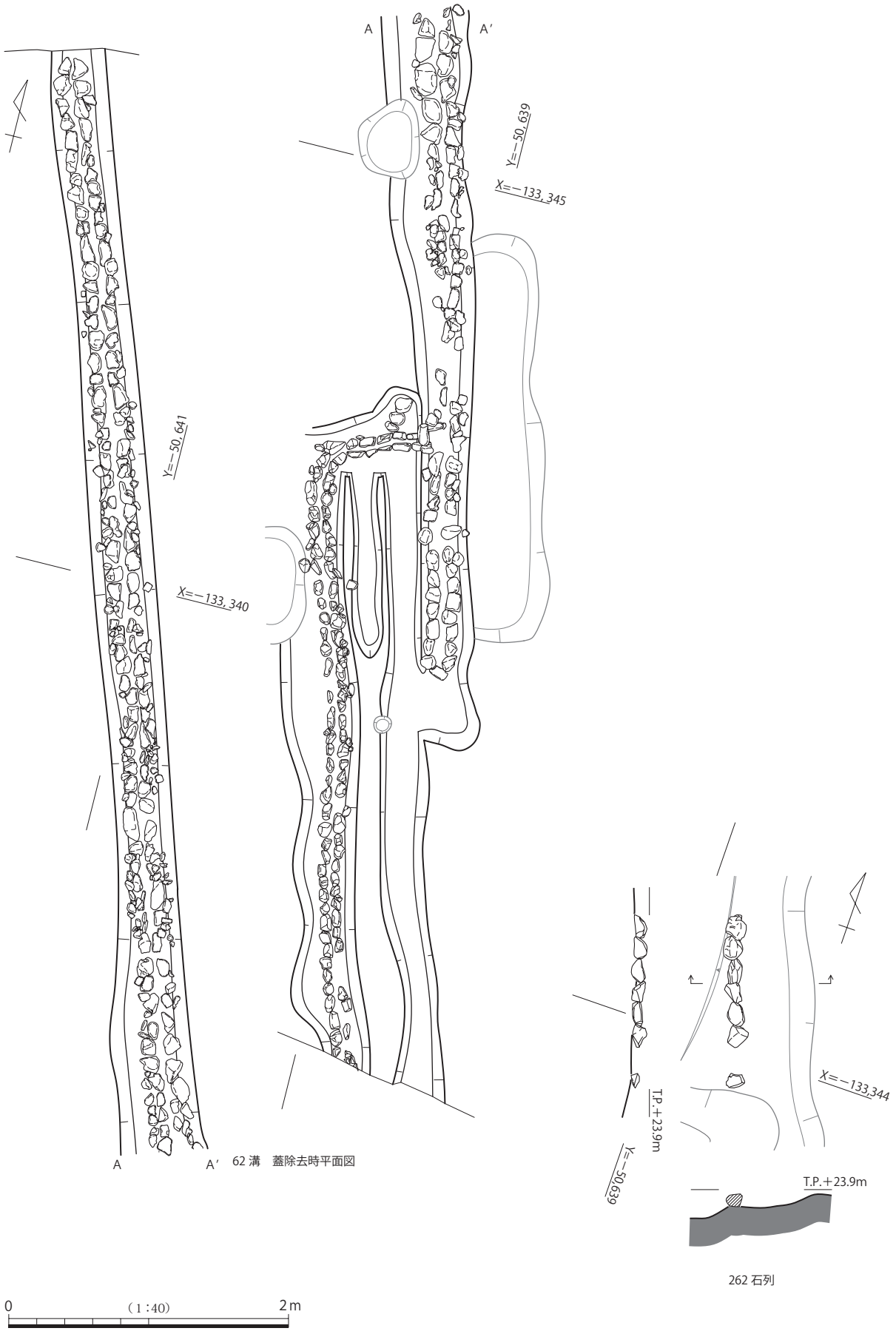


図23　62溝　平面図（2）及び262石列　平・立・断面図

から南西にはしる開析谷）を埋め立てて建設した豊中市立第十八中学校へと向かって下る緩斜面に位置している。

検出した遺構には耕作痕（鋤溝群）や耕作に伴う暗渠、掘立柱建物、小穴、土坑、落込み、谷状遺構等がある。これらの遺構の時期は大きくみて近世期のものとそれ以前のものとに大別される。

（1）近世期の遺構と遺物（図21～23・37・図版10・16・20）

東側高台部分の大半は近代以降の建物建設に伴う造成のためか、大きく土地改変を受けたと推定され、近世期の遺構は明らかではない。しかし、1区同様、調査区中央から西側にかけては耕作地が広がっていたことを明らかにした。なお、1区では西側にのみ耕作地の展開がみられたが、2区においてはX＝－133,342・Y＝－50,630からX＝－133,345・Y＝－50,635にかけてN－67°－Eを軸とする比高差が0.15～0.2mを測る段が形成され、段の南側にあたる調査区南東部分にも耕作地が広がっていたことが明らかとなった。

2溝

高台部西端に位置し、1区から延びてくる溝である。調査区北辺のX＝－133,336・Y＝－50,640付近からN－17°－Wを軸に北西から南東にはしる。溝の西肩は後世の土地改変によって失している。1区での検出状況から、幅約0.5～0.8m、深さ約0.1mを測り、断面形は浅い皿状を呈していたものと推察される。埋土は黄灰色極細～細砂混シルトで、炭化物や一辺2～3㎝程度の小礫を含んでいる。埋土の状況からは流水の痕跡は認められなかった。検出長は約9mである。出土遺物はみられなかった。

262石列（図23）

1区では2溝の西側に基盤層（地山）を削り込み、溝と平行するように作出した比高差約0.3mの段がみられたが、当区では後世の土地改変によって段は失していた。しかし、1区で検出したように、段の法面上に相当する部分において、簡易な石列（262石列）が1基構築されていた。262石列はX＝－133,343・Y＝－50,639付近に位置している。2溝がこの付近で収束することや先述した南側の段の延長が2溝の南端付近に来ることから、存在したであろう段も262石列周辺で収束するものと想定される。石列に使用された石材は長辺15～30㎝・短辺15～20㎝・厚み10～15㎝を測る亜角礫である。石列は現状で礫を1段並べたものとなっており、7個の礫を確認した。構築されている位置からすると、土留めを目的としたものと想定される。当石列から北側にある1区64石列の間に石列は確認できなかったが、元々は段に沿って直線的に構築されていたものと思われる。

62溝（図22・23・図版16）

1区から延びてくる石組暗渠である。2溝と平行するN－17°－Wを軸にして北西から南東にはしる。62溝は幅0.2～0.3m、深さ0.1～0.15mを測り、断面形が逆台形を呈する溝を掘削し、その壁面に沿って握り拳大（一辺10cm前後）の礫を1～2段積み上げて側壁とし、長辺13～17㎝・短辺10～13㎝程度の扁平な礫で蓋をして構築している。礫間の隙間は少なく、密に重ねた丁寧な造りである。これらの石組を細～中砂混砂質シルトで埋めている。石組内は幅0.05m、高さ約0.05mの非常に狭い空間となっており、水成堆積の灰色～黒褐色粘質シルトが堆積していた。溝はX＝－133,348・Y＝－50,639付

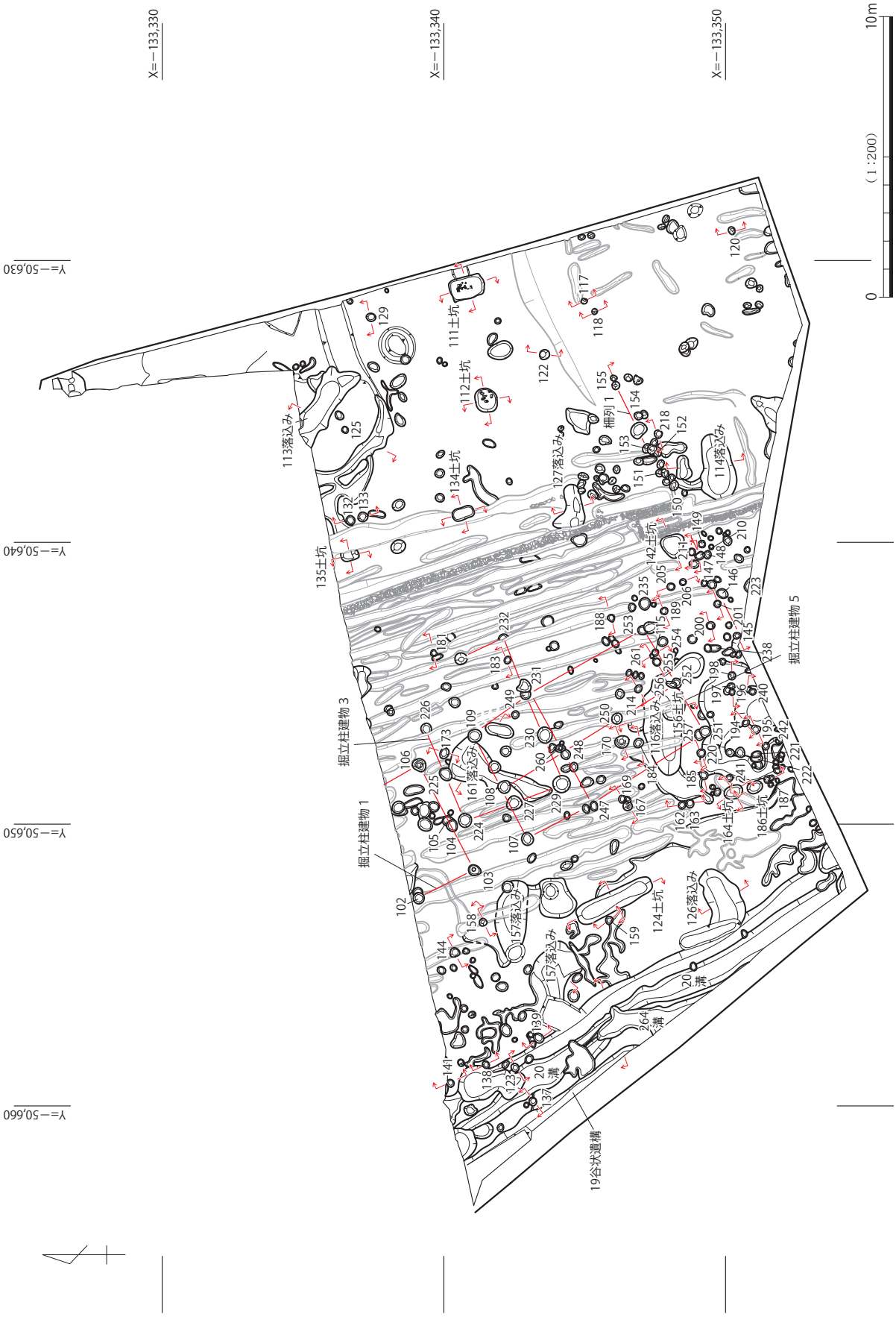


図24　2区　近世期以前の平面図

近で末端となり、石組が閉塞されているが、新たに付け足したのかＸ＝－133,347・Ｙ＝－50,638付近で西側に折れ曲がり、さらに南へと延びる構造となっている。溝の検出長は約15ｍ（１区を含めると約29ｍ）で、南側は調査区外へと延びている。

出土遺物には細片となった須恵器、土師器があるが、これらは溝構築時に混入したものと考えられる。

耕作痕（鋤溝群）（図37・図版20）

62溝西側や調査区南東部分の段下に展開する耕作地において検出したものである。耕作地は基本的に２・62溝と同様Ｎ－17～18°－Ｗを軸に耕されており、多数の鋤溝が確認できた。図21の平面図上では、調査区西側や中央南側部分で鋤溝が表現されていないが、この部分に関しては、第２層である近世耕作土と基盤層（地山）の間に、比較的厚く第５層である黒色シルトが堆積していたため、耕作痕が基盤層（地山）まで及んでいないことによっている。

検出した鋤溝は幅0.1ｍ、深さ約0.05～0.1ｍを測り、断面形が浅い皿状を呈するものが主体である。一部、幅が0.3～0.6ｍを測るものがみられたが、これは複数の鋤溝が重複して掘削された結果によるものである。埋土は淡黄色砂質シルト（地山由来）ブロックを含む褐灰色極細～細砂混シルトを主体とするが、調査区西側の第５層の堆積がみられた部分に関しては、黒色系のシルトブロックを多く含むようになる。また、鋤溝は１区から延びてきており、南側は調査区外へと広がることから、広範な耕作地が展開していたものと推察される。

出土遺物には肥前系磁器、瓦質土器、土師器、須恵器がある。大半のものが細片となっており、時期を決し難いが17～18世紀の所産と思われる。図37－59・60は図化が可能であった遺物である。59は瓦質土器羽釜の口縁部である。復元口径23㎝を測る。口縁端面は水平に仕上げ、口縁部外面には幅広の凹線状の段がみられる。混和材は極めて少なく、精良な胎土である。鋤柄分類Ｃ群Ⅳ類、15世紀後半～16世紀初頭の所産であろう。60は須恵器甕の肩部。外面は斜位の平行タタキを施した後、縦位に平行タタキを行なう。内面には大振りな同心円文の当て具痕が残る。

（２）近世期以前の遺構と遺物（図24～36・図版10～16・19・20）

近世期の耕作地造成や近代以降の土地改変による影響のためか、検出した遺構は多くないものの、調査区ほぼ全域で柱穴や小穴、土坑、落込みを確認することができた。緩斜面地を平坦に造成した近世期の土地改変の影響は、標高の高い東側に強く現れており、特に２溝からＹ＝－50,643の間で遺構が希薄になっている。

掘立柱建物３（図25・図版11）

調査区中央部やや北寄りのＸ＝－133,340・Ｙ＝－50,645付近で検出した掘立柱建物である。

建物３は桁行３間・梁行２間で、Ｎ－20°－Ｗを軸にとる東西に長い建物である。後世の土地改変により削平されたためか、北東隅の柱穴を検出することができなかった。また、東辺中央の263柱穴や南東隅の232柱穴等の多くの柱穴は、近世期の鋤溝によって切られており、残存状況は良くなかった。建物の規模は芯々で南辺5.6ｍ、西辺が3.7ｍを測り、柱間の寸法は長・短辺共に約1.8ｍである。面積は約20.7㎡である。

建物を構成する柱穴は平面円形を基調とするが、楕円形や不整隅丸方形を呈するものもみられる。規

模は概ね直径0.35 ～ 0.5ｍである。土地改変により上部が大幅に削平されたと推察され、残存する深さは0.05 ～ 0.25ｍとなっている。特に東側に位置する柱穴の削平が著しい。柱穴は一部に浅いものが認められたが、概ね底面がT.P. ＋23.4ｍ前後に統一されるように掘削されている。

柱穴は基本的に地山由来の灰白～黄灰色砂質シルトブロックを含む黒～黒褐色シルトで埋められている。柱痕跡が確認できたのは231柱穴１基のみで、柱の直径は0.2ｍであったと考えられる。

225・229・230柱穴から細片となった土師器や須恵器が出土しているが、出土量は極めて少なく詳細な時期を決し難い。

掘立柱建物５（図26・図版12・19）

調査区中央部、Ｘ＝－133,345・Ｙ＝－50,645付近で検出した掘立柱建物である。

建物５は桁行３間・梁行２間で、Ｎ－31°－Ｗを軸にとる南北に長い総柱建物であると考えられる。建物東・西辺の南から２基目の柱穴は確認できなかった。南北中央列の250柱穴や西辺247柱穴等の柱穴は、近世期の鋤溝によって切られており、残存状況は良くなかった。

建物５は建物１の南側約２ｍに位置し、建物１と軸を揃えて南北に並列するように建てられている。このことから、両者は関連性の高い建物であると推察される。なお、建物３と５は切り合い関係にあり、建物３の方が新しい建物である。

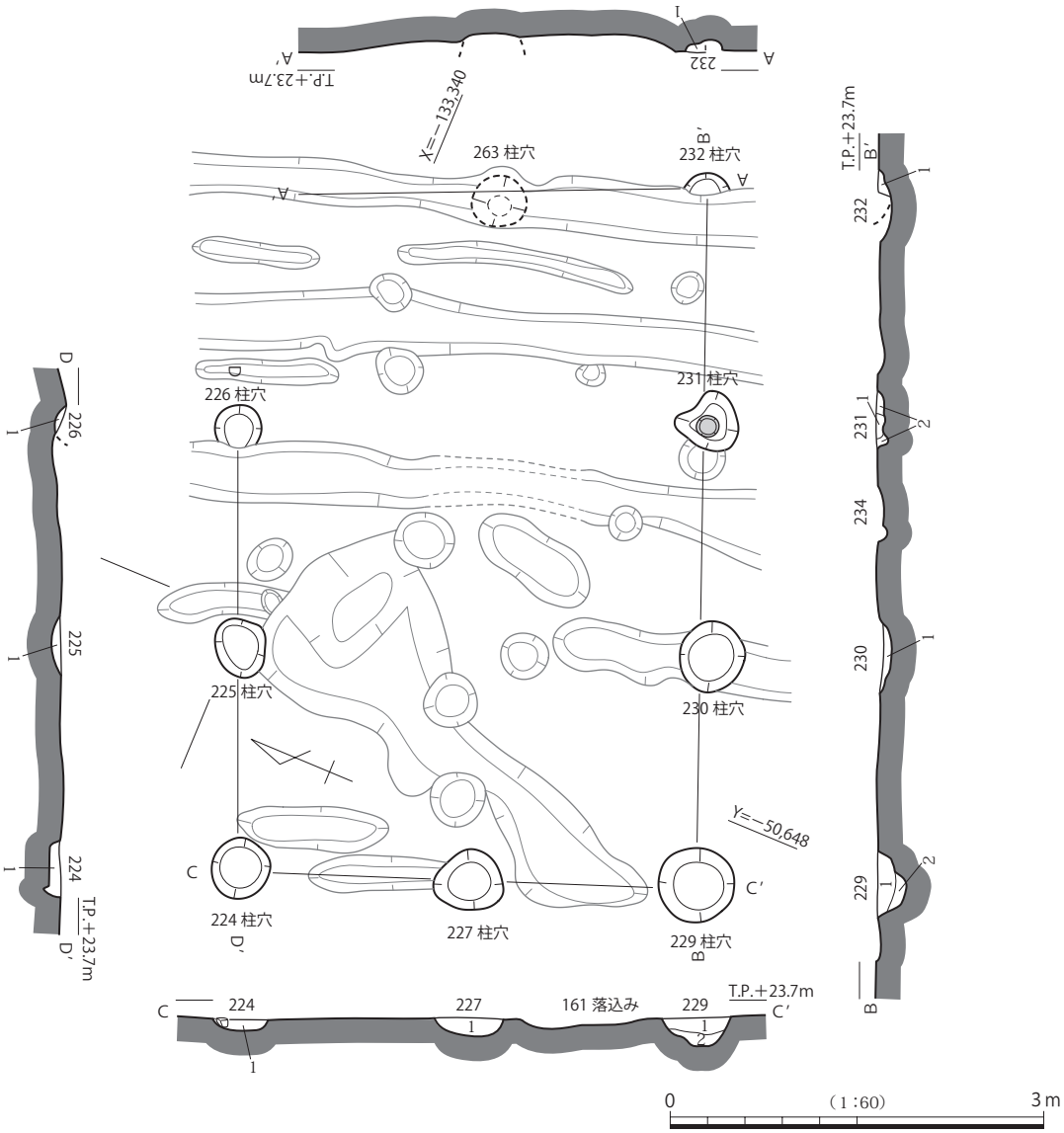
建物の規模は芯々で北・南辺4.2ｍ、東辺7.0ｍ、西辺が7.3ｍを測る。柱間の寸法は短辺で2.0 ～ 2.2ｍ、長辺はややばらつきがみられ2.3 ～ 2.6ｍとなる。面積は約30.7㎡である。

建物を構成する柱穴は平面円形を基調とするが、楕円形を呈するものもみられる。規模は概ね直径0.3 ～ 0.5ｍである。土地改変により上部が大幅に削平されたと推察され、残存する深さは0.15 ～ 0.30ｍとなっている。建物は北から南へと下る緩斜面上に建てられたためか、柱穴は斜面上方にあたる北辺が浅く、斜面下方にあたる南辺がやや深く掘削される傾向にあり、柱穴底面の高さは統一されていない。

柱穴は基本的に地山由来の橙～明黄褐色シルト～シルト質粘土や黄灰色シルトのブロックを含む黒～黒褐色シルトで埋められている。柱痕跡を確認できたのは260柱穴１基のみであり、柱の直径は0.15ｍであったと考えられる。南辺の252・253柱穴は抜き取り痕のような256・254柱穴に切られている。

107・108・247・251・252・254・256柱穴から細片となった土師器や黒色土器椀、瓦器椀が出土しているが、出土量は極めて少なく詳細な時期を決し難い。図化が可能であったのは２点である。図26－22は254柱穴出土の瓦器椀である。復元口径は15㎝を測る。口縁部から体部が緩やかに内湾しながら立ち上がるもの。内外面とも風化が進み、器面が荒れているため調整の詳細は不明であるが、外面はユビオサエの後粗いヘラミガキを、内面は比較的細かなヘラミガキを施しているものと思われる。器壁はやや厚くなっている。胎土は混和材をほとんど含まず、非常に精良なものである。口縁端部内面には段状になった浅い沈線が１条廻る。楠葉型瓦器椀Ⅰ～Ⅱ－１期、11世紀後半～ 12世紀前半の所産であろうか。図26－23は256柱穴出土の黒色土器内黒椀である。内面見込みには細かな平行のヘラミガキが施される。高台は高く、外側に踏ん張る形態で、高台畳付け部分が外に折れ曲がる。胎土は長石や石英を多く含むが、比較的精良なものである。11世紀前半頃の所産であろうか。この２例は共に抜き取り痕とおぼしき柱穴から出土しており、出土遺物に時期差がみられるため、建物５の時期を明確にはし得ないが、12世紀前半以前に建てられた可能性が高い。

なお、調査時には建物５の南側にも小穴が多数みられたことから、掘立柱建物４として調査を行なっ



224 柱穴
1．A 10YR2/1 黒～ 10YR3/1 黒褐 シルトとB 10YR8/4 浅黄橙 砂質シルト（地山由来）とC 10YR6/1 褐灰 シルトのブロック土 A：B：C＝6：3：1
225 柱穴
1．A 10YR3/1 黒褐 シルトとB 10YR8/4 浅黄橙 砂質シルト（地山由来）とC 10YR5/1 褐灰 シルトのブロック土 A：B：C＝6：3：1
226 柱穴
1．A 10YR3/1 黒褐 シルトとB 10YR8/4 浅黄橙 砂質シルト（地山由来）とC 10YR5/1 褐灰 シルトのブロック土 A：B：C＝6：3：1
227 柱穴
1．A 10YR2/1 黒～ 10YR3/1 黒褐 シルトとB 2.5Y8/3 淡黄 シルト（地山由来）とC 10YR8/3 浅黄橙 シルト質粘土（地山由来）のブロック土
A：B：C＝7：2：1
229 柱穴
1．A 10YR3/1 黒褐～ 10YR2/1 黒 シルトとB 2.5Y8/3 淡黄 砂質シルト（地山由来）ブロック土 A：B＝7：3
2．10YR1.7/1 黒 粘質シルト 僅かに 10YR7/3 にぶい黄橙 シルト質粘土（地山由来）ブロックを含む
230 柱穴
1．A 7.5YR2/1 黒 シルトとB 2.5Y8/6 黄 シルト質粘土（地山由来）とC 10YR7/3 にぶい黄橙 砂質シルト（地山由来）のブロック土
A：B：C＝6：2：2
231 柱穴
1．7.5YR2/1 黒 シルト 僅かに 10YR7/3 にぶい黄橙 砂質シルト（地山由来）ブロックを含む
2．A 7.5YR2./1 黒 シルトとB 2.5Y8/3 淡黄 砂質シルト（地山由来）とC 10YR7/3 にぶい黄橙 砂質シルト（地山由来）のブロック土
A：B：C＝6：2：2
232 柱穴
1．A 10YR2/1 黒 シルトとB 10YR6/2 灰黄褐 シルト質粘土（地山由来）とC 2.5Y8/4 淡黄 シルト質粘土（地山由来）のブロック土
A：B：C＝6：2：2

図25 掘立柱建物３ 平・断面図

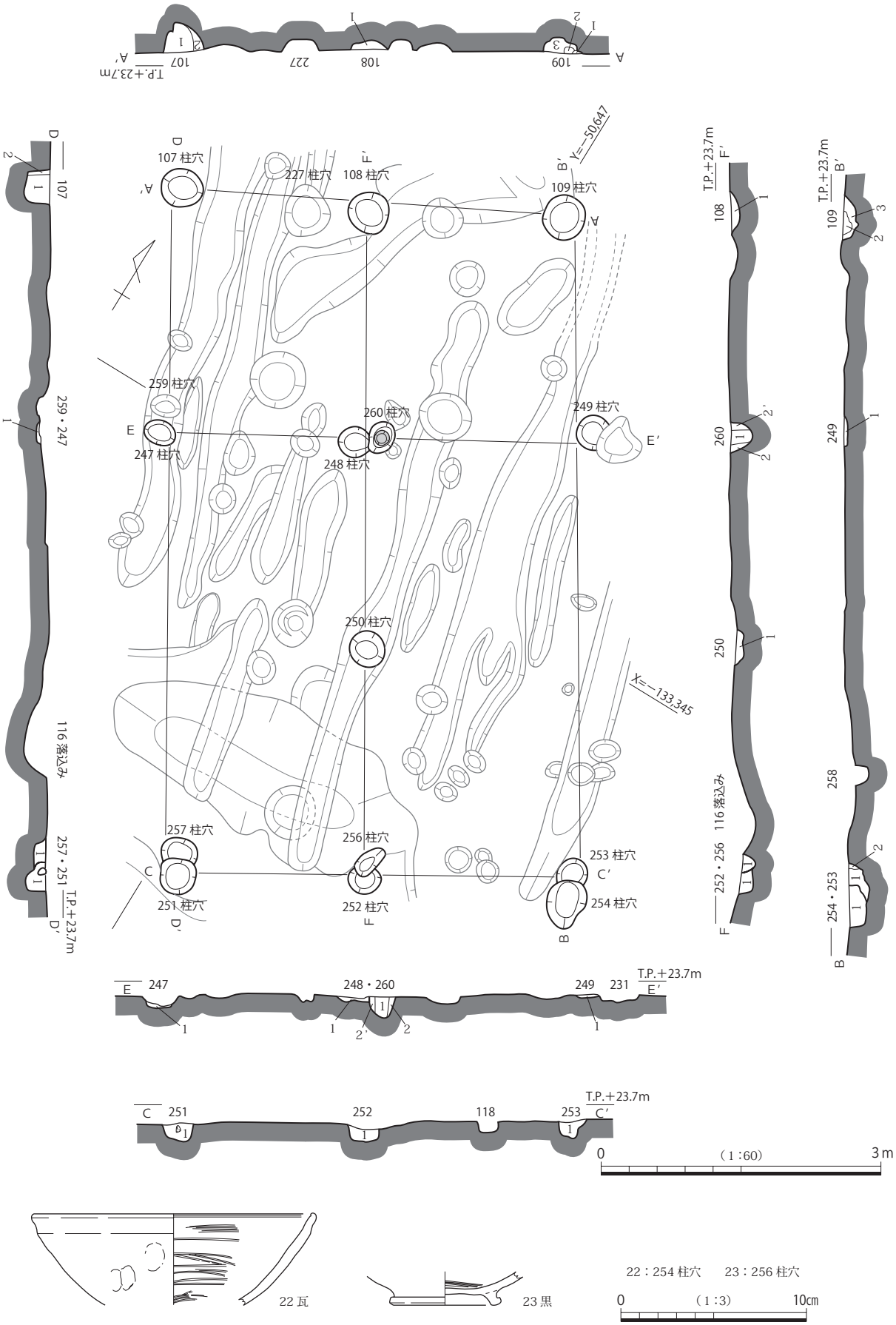


図26　掘立柱建物 5　平・断面図及び出土遺物

掘立柱建物５　柱穴　土色
107 柱穴
１．A　10YR2/1　黒　シルトとB　2.5Y8/3 ～ 2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト（地山由来）のブロック土　A：B＝９：１　一辺１㎝程度の小礫を僅かに含む
２．10YR2/1　黒～ 10YR3/1　黒褐　シルト
108 柱穴
１．10YR3/1　黒褐　シルト　一辺１～２㎝の 5Y7/3　浅黄を呈する地山風化礫・10YR6/2　灰黄褐　シルト質粘土（地山由来）ブロックを含む
109 柱穴
１．2.5Y4/1　黄灰　極細～細砂混シルト（鋤溝か？　耕土）
２．A　2.5Y8/3　～ 2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト（地山由来）とB　10YR3/1　黒褐　シルトのブロック土　A：B＝８：２
３．7.5YR2/1　黒　極細砂混シルト　2.5Y8/4　淡黄～ 2.5Y8/6　黄を呈する一辺 0.5 ～１㎝の地山風化礫・2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロックを含む
247 柱穴
１．10YR2/1　黒　シルト　2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロックを含む　上部は鋤溝に削平される
248 柱穴
１．7.5YR3/1　黒褐　シルト　2.5Y8/4　淡黄　シルト質粘土（地山由来）ブロック・一辺１㎝程度の小礫を含む
260 柱穴
１．10YR2/1　黒　シルト　2.5Y8/6　黄　砂質シルト（地山由来）の極小（一辺 0.3 ㎝）を僅かに含む
２．A　2.5Y8/4　淡黄～ 2.5Y8/6　黄　砂質シルト（地山由来）とB　10YR3/1　黒褐　シルトのブロック土　A：B＝８：２
２'．AとBは同じ　A：B＝２：８
249 柱穴
１．10YR6/3　にぶい黄橙　極細砂混シルト　10YR8/1　灰白　砂質シルトブロック・10YR8/4　浅黄橙　砂質シルト（地山由来）ブロックを含む
250 柱穴
１．10YR3/1　黒褐　極細砂混シルト　10YR2/1　黒　シルトブロック・10YR6/2　灰黄褐　シルトブロックを含む
257 柱穴
１．10YR3/1　黒褐　シルト　10YR7/1　灰白　シルトブロック・2.5Y8/1　灰白を呈する一辺１㎝前後の地山風化礫・極小の遺物細片を含む
251 柱穴
１．10YR2/1　黒　シルト　10YR7/2　にぶい黄橙　シルト（地山由来）ブロック・10YR8/6　黄橙を呈する一辺１㎝前後の地山風化礫を含む
256 柱穴
１．10YR2/1　黒　シルト　僅かに 2.5Y8/3　淡黄　シルト（地山由来）ブロックを含む　遺物細片が他に比してみられる
252 柱穴
１．10YR3/1　黒褐　シルト　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロック・10YR7/2　にぶい黄橙　シルトブロック・
　一辺 0.5 ～１㎝の 2.5Y8/6　黄を呈する地山風化礫を含む
253 柱穴
１．A　10YR3/1　黒褐　シルトとB　5Y8/3　淡黄　砂質シルト（地山由来）のブロック土　A：B＝７：３
２．5Y8/3　淡黄　砂質シルト（地山由来）2.5Y6/2　灰黄　シルトブロックを含む
254 柱穴
１．A　10YR2/1　黒　シルトとB　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト（地山由来）のブロック土　A：B＝８：２

た。しかし、その後の検討により、柱間寸法にばらつきが大きいことや柱列の並びに歪みが大きいことが明らかとなったため、建物としての認定から外すこととする。

柵列１（図27）

調査区南側やや東寄りで、Ｎ－64°－Ｅを軸に北東から南西に並ぶ小穴列を検出した。近世期の62溝よりも東側にある小穴については、一部、木の根痕である可能性も否定できないが、柱間が約1.6ｍ間隔で並ぶもの（東から155・154・152・149・146・145小穴）を柵列とした。柵列の南西側は調査区外へと延び、検出長は約10ｍである。埋土は黒色系のシルト～砂質シルトである。出土遺物はほとんどみられず、僅かに146小穴から細片となった土師器が出土したのみで、詳細な時期は不明である。

柵列が指向する軸は、建物１・５の主軸に直交する方位であることから、これら建物と有機的に関連する施設であった可能性も想定できる。

小穴（図28 ～ 31・図版15・19）

掘立柱建物を構成する柱穴以外に、調査区中央南側を中心にして調査区全域で直径0.1 ～ 0.4ｍの平面円形や楕円形を呈する小穴を100基余り検出した。これらは上部を削平されていることもあるが、掘削深度は様々であった。また、断面形も逆台形を呈するもの（133・200・218小穴等）、浅い皿状を

呈するもの（183・184・214小穴等）、細長いU字形を呈するもの（132・185・255小穴等）と多様である。

小穴の埋土は黒～黒褐色シルト或いは褐灰色シルトを基調とし、地山由来の橙～明黄褐色シルトや黄灰色シルトブロックの有無で分別できる。断面形が細長いU字形を呈する小穴は、総じて埋土の締まりが悪いことが特徴的である。

小穴の性格に関しては明らかにできなかったが、170・189小穴のように柱痕跡が認められるものがあり、建物として復元はできないものの、柱穴として機能した小穴も少なからず存在したと想定される。また、先述した断面形が細長いU字形を呈する小穴は、締まりの悪い埋土を有していることやその形状から、木の根痕である可能性も否定できない。

小穴からの出土遺物は極めて少なく、僅かに数基から土師器や須恵器、瓦器の細片がみられたのみで、器種や時期を窺える図化可能な資料は少数であった。図31－24は205小穴から出土した所謂「て」の字状口縁皿。復元口径は8.8㎝の小振りな皿。胎土はチャートや長石、赤色くさり礫を含むが、比較的精良なものである。色調は灰白色を呈する。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は斜め上方に短く立ち上がる。11世紀後半（京Ⅴ〔京都Ⅳ〕期新段階）の所産であろう。図31－25・26は206小穴出土遺物である。25は所謂「て」の字状口縁皿。復元口径は9.6㎝のやや小振りな皿。胎土は長石や石英、金雲母を僅かに含む、比較的精良なものである。色調は灰白色を呈する。部分的に淡赤橙色を呈する箇所がみられることから、二次焼成を受けた可能性が考えられる。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は上方に短く立ち上がる。11世紀後半（京Ⅴ〔京都Ⅳ〕期新段階）の所産であろう。26は須恵器椀である。胎土には直径５㎜前後の大粒なチャートを含む。底部外面は回転糸切り痕が残る。205・206小穴は建

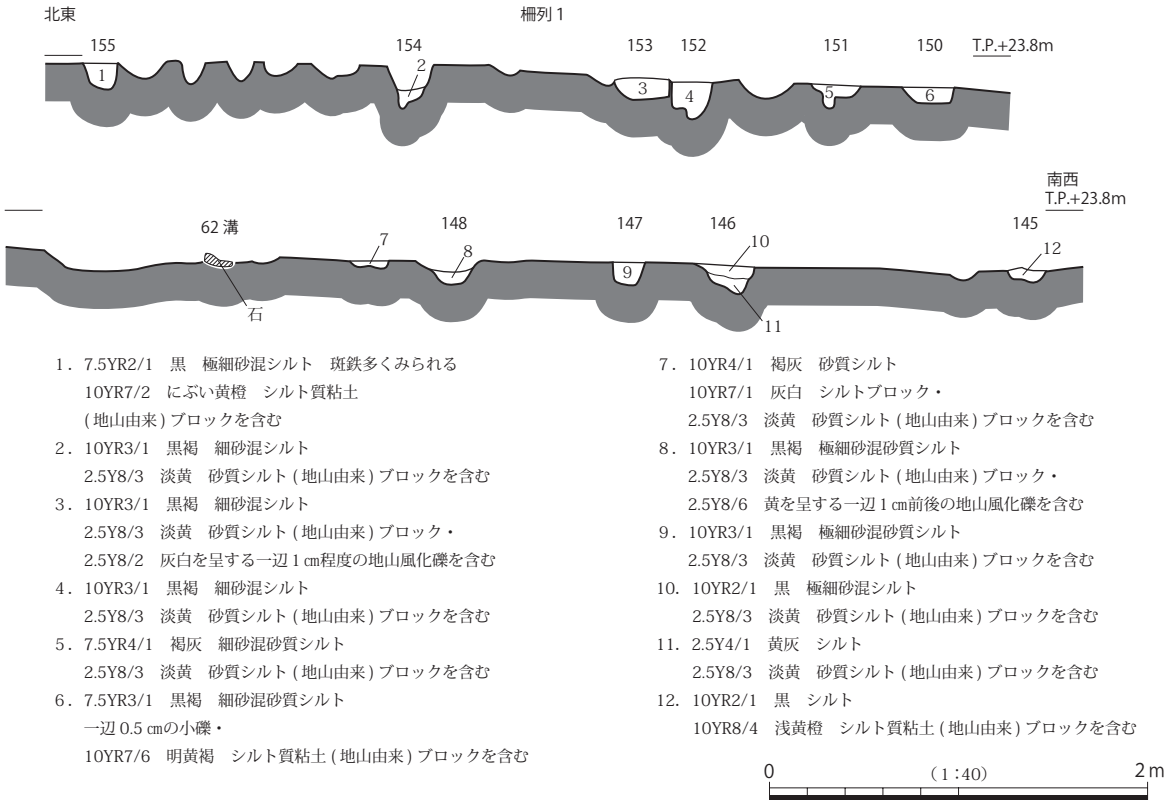
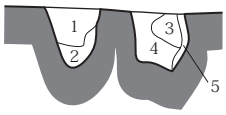


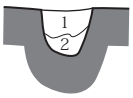
図27　柵列１　断面図

北　132　133　南
T.P.＋24.1m



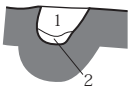
1．10YR2/1　黒　シルト　しまり悪い
　7.5YR6/6　橙を呈する一辺１㎝程度の地山風化礫を僅かに含む
2．A　10YR3/1　黒褐　シルトと
　B　10YR8/3　浅黄橙　シルト質粘土（地山由来）のブロック土　A：B＝８：２
3．10YR3/1　黒褐　シルト
　炭化物・7.5YR7/6　橙　シルト質粘土（地山由来）ブロックを僅かに含む
4．A　7.5YR3/1　黒褐　シルトと
　B　7.5YR7/4　にぶい橙　シルト質粘土（地山由来）のブロック土　A：B＝６：４
5．A　7.5YR3/1　黒褐　シルトと
　B　7.5YR7/4　にぶい橙　シルト質粘土（地山由来）のブロック土　A：B＝３：７

西　129　東
T.P.＋24.2m



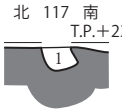
1．10YR2/1　黒　シルト
　2.5Y6/1　黄灰　極細砂ブロック（根によるもの）を含む
2．10YR3/1　黒褐　シルト
　7.5YR6/6　橙　シルト質粘土～砂質シルト（地山由来）ブロックを多く含む
　2.5Y8/3　淡黄を呈する一辺１㎝前後の地山風化礫を含む

北　122　南
T.P.＋24.0m



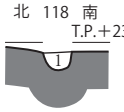
1．7.5YR3/1　黒褐　シルト　しまり悪い
　10YR7/6　明黄褐・
　2.5Y8/3　淡黄　シルト質粘土（地山由来）ブロックを含む
2．10YR5/1　褐灰　シルトと
　10YR7/6　明黄褐　シルトが混ざったもの（根によるもの　擾乱か）

北　117　南
T.P.＋23.8m



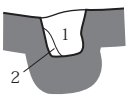
1．10YR2/1　黒　シルト　しまり悪い
　10YR7/2　にぶい黄橙　シルト質粘土（地山由来）ブロックを含む

北　118　南
T.P.＋23.8m



1．10YR2/1　黒　シルト　しまり悪い
　10YR7/2　にぶい黄橙　シルト質粘土（地山由来）ブロックを含む

西　218　東
T.P.＋23.8m

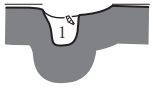


1．10YR3/1　黒褐　極細砂混シルト
　極小（一辺 0.2 ～ 0.3 ㎝）の 10YR8/6　黄橙・
　10YR8/3　浅黄橙　シルト質粘土（地山由来）ブロックを含む
2．A　10YR3/1　黒褐　シルトと
　B　2.5Y8/2　灰白　砂質シルト（地山由来）ブロック土
　A：B＝１：１

北　120　南
T.P.＋23.8m

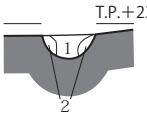
1．10YR2/1　黒　シルト　しまり悪い
　10YR7/2　にぶい黄橙　シルト質粘土（地山由来）ブロック・
　一辺１～２㎝の小礫を含む

西　181　東
T.P.＋23.6m



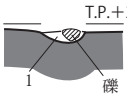
1．10YR2/1　黒　シルト
　10YR7/6　明黄褐
　砂質シルトブロックを含む

南西　173　北東
T.P.＋23.6m



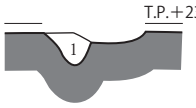
1．10YR2 /1　黒　シルト
　2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロックを僅かに含む
2．A　2.5Y7/4　浅黄　砂質シルト（地山由来）と
　B　10YR4/1　褐灰　シルトのブロック土
　A：B＝８：２

西　183　東
T.P.＋23.6m



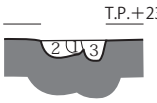
1．10YR2/1　黒　シルトと
　10YR4/1　褐灰　シルト・
　2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロックが混ざったもの

西　188　東
T.P.＋23.6m



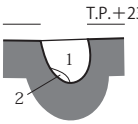
1．10YR2/1　黒　シルト
　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト（地山由来）ブロック・
　一辺１㎝前後の 2.5Y8/6　黄を呈する地山風化礫を含む

南　115・261 北
T.P.＋23.7m



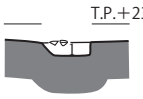
1．2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト
　（地山由来）ブロック
2．10YR2/1　黒　シルト
　2.5Y8/2　灰白　砂質シルト
　（地山由来）ブロック・
　10YR8/3　浅黄橙　砂質シルト
　（地山由来）ブロックを含む
3．7.5YR2/1　黒　シルト

西　255　東
T.P.＋23.7m



1．10YR2/1　黒　シルト
　5Y8/2　灰白　砂質シルト（地山由来）ブロック・
　2.5Y8/3　淡黄を呈する一辺１㎝前後の地山風化礫を含む
2．A　5Y8/2　灰白　砂質シルト（地山由来）ブロック
　B　10YR3/1　黒褐　シルトのブロック土
　A：B＝７：３

西 214　東
T.P.＋23.6m

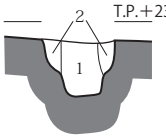


1．10YR2/1　黒　シルト
　10YR6/1　褐灰　シルトブロック
　一辺３㎝前後の礫・
　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト
　（地山由来）ブロックを含む

0　（1：40）　2m

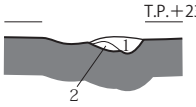
図28　小穴　断面図（1）

西　170　東
T.P.＋23.6m



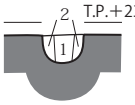
1．10YR2/1　黒　シルト
　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト
　(地山由来) ブロックを僅かに含む
2．10YR3/1　黒褐～ 10YR4/1　褐灰　砂質シルト
　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト
　(地山由来) ブロックを含む

西　184　東
T.P.＋23.6m



1．10YR2/1　黒　極細砂混砂質シルト
　2.5Y7/1　灰白　シルトブロックを含む
2．2.5Y6/1　黄灰　砂質シルトと
　2.5Y4/1　黄灰　シルトが混ざったのも
　(根か)

西　189　東
T.P.＋23.6m

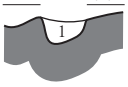


1．10YR2/1　黒　シルト
　2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト
　(地山由来) ブロックを僅かに含む
2．A　10YR2/1　黒　シルトと
　B　2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト (地山由来)・
　　2.5Y7/1　灰白　シルトのブロック土
　A：B＝７：３

南　206　205　北
T.P.＋23.6m

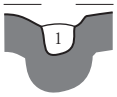
1．7.5YR3/1　黒褐　極細砂混シルト
　10YR8/3　浅黄橙　砂質シルト
　(地山由来) ブロック・
　一辺１㎝前後の小礫を含む
2．10YR3/1　黒褐　シルト
　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト (地山由来)・
　10YR8/3　浅黄橙　シルト質粘土
　(地山由来) ブロックを含む
3．10YR5/2　灰黄褐　シルト（粘性あり）
　2.5Y8/3　淡黄　シルト質粘土
　(地山由来) ブロックを含む

西　211　東
T.P.＋23.6m



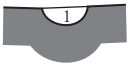
1．10YR3/1　黒褐　極細砂混シルト
　炭化物・2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト
　(地山由来) ブロックを含む

西　210　東
T.P.＋23.6m



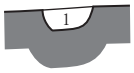
1．7.5YR2/1　黒　シルト　しまり悪い
　7.5YR7/1　明褐灰　シルトブロック
　2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト
　(地山由来) ブロックを含む　斑鉄顕著

南西　201　北東
T.P.＋23.6m



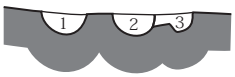
1．10YR2/1　黒　シルト
　10YR7/2　にぶい黄橙　砂質シルト
　(地山由来) ブロックを含む

西　200　東
T.P.＋23.6m



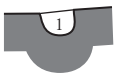
1．10YR2/1　黒　シルト
　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト
　(地山由来) ブロックを含む

東　198　197　196　西
T.P.＋23.6m



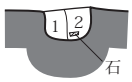
1．10YR2/1　黒　シルト
　5Y7/1　灰白　シルトブロック
　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト (地山由来) ブロックを含む
2．10YR2/1　黒　シルト
　5Y7/1　灰白　シルトブロック
　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト (地山由来) ブロックを含む
3．10YR3/1　黒褐～ 10YR4/1　褐灰　細砂混シルト
　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト (地山由来) ブロックを含む
　(根撹乱か)

東　194　西
T.P.＋23.6m



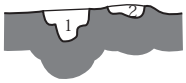
1．10YR2/1　黒　シルト
　10YR7/2　にぶい黄橙　砂質シルト
　(地山由来) ブロックを僅かに含む

東　195　西
T.P.＋23.6m



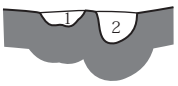
1．10YR3/1　黒褐　シルト
　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト
　(地山由来) ブロックを僅かに含む
2．A　10YR3/1　黒褐　シルトと
　B　2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト
　(地山由来) のブロック土　A：B＝８：２

西　167　169　東
T.P.＋23.6m



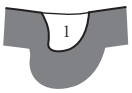
1．10YR2/1　黒　シルト
　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト (地山由来) ブロックを含む
2．10YR4/1　褐灰　砂質シルト
　10YR6/1　褐灰　シルトブロック・
　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト (地山由来) ブロックを含む

北　162　163　南
T.P.＋23.6m



1．A　2.5Y6/1　黄灰　砂質シルトと
　B　10YR4/1　褐灰　シルトのブロック土
　A：B＝４：６
2．10YR3/1　黒褐　シルト
　2.5Y8/3　淡黄　シルト質粘土～砂質シルト
　(地山由来) ブロックを含む

西　185　東
T.P.＋23.6m



1．10YR4/1　褐灰～ 10YR3/1　黒褐　シルト
　炭化物・一辺１～２㎝の礫・
　2.5Y7/2　灰黄　砂質シルト
　(地山由来) ブロックを含む

西　220　東
T.P.＋23.6m

1．10YR3/1　黒褐　シルト
　10YR8/3　浅黄橙　シルト質粘土 (地山由来)・
　10YR6/1　褐灰　シルトブロックを含む

0　(1：40)　2m

図29　小穴　断面図（2）

物５に近接する位置にあることから、明確ではない建物５の所属時期を示す可能性を窺わせる資料である。

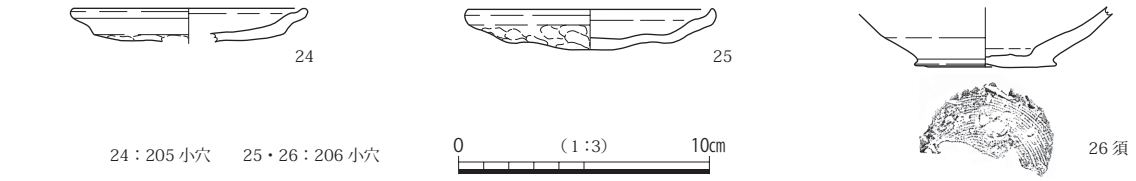
124土坑（図32・図版13）

調査区西側のＸ＝－133,346・Ｙ＝－50,653付近、建物５から西側約３ｍに位置する土坑である。

土坑はＮ－26°－Ｗを主軸にもち、長軸約2.8ｍ、短軸約0.55ｍ（各中軸線上で）を測る。検出面からの深さは約0.3ｍである。土坑掘り方は北側が0.05ｍほど幅広になるように掘削されており、平面形は南側が狭まる隅丸の長逆台形を呈している。土坑側壁は北壁のみ２段に掘り込まれている。

埋土は大きく４層に分かれる。上層は黒色系シルトと地山由来の浅黄色砂質シルトのブロック土が、中層には土坑北側を中心に、地山由来の浅黄色砂質シルトブロックを含む褐灰色シルトが堆積する。こ

図30 小穴 断面図（3）



24：205 小穴　25・26：206 小穴

図31 205・206小穴出土遺物

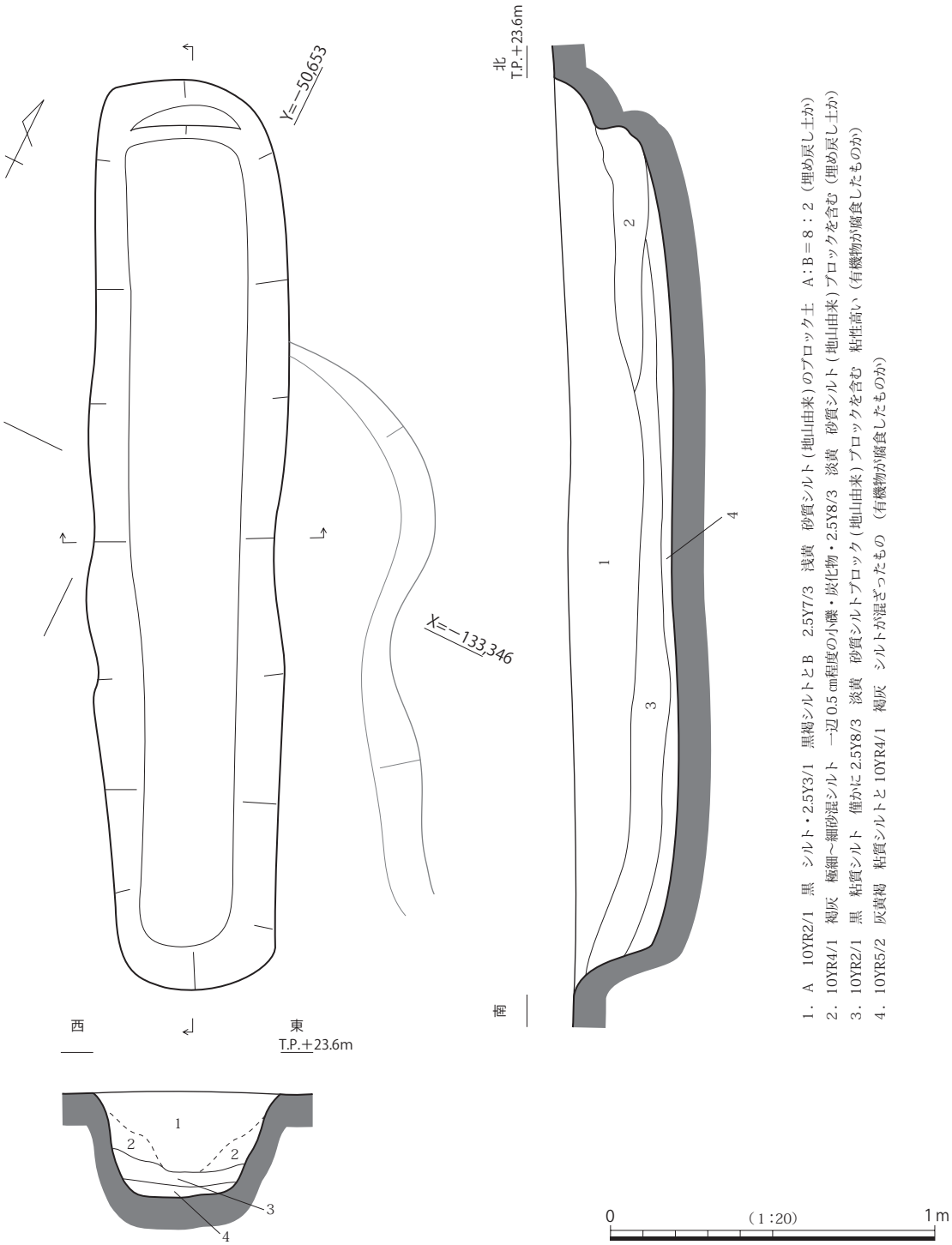


図32　124土坑　平・断面図

れらはブロック土であることから人為的に埋め戻されたものと判断される。下層は２層に分かれ、黒色粘質シルトと灰黄褐色粘質シルトが堆積している。両者共に粘性がかなり高く、堆積層中にラミナが確認できなかったことから、水成堆積とは考え難く、有機物が腐朽して形成されたものと推察される。

土坑は埋土中に黒色系シルトのブロックを多量に含むことから、本来は基盤層（地山）の上位に堆積していた第５層上から掘り込まれたものである。なお、土坑埋土のブロック土から細片となった土師器や生焼けの須恵器が数点出土したが、土坑の時期を示すものではないと考えられ、所産時期は明らかで

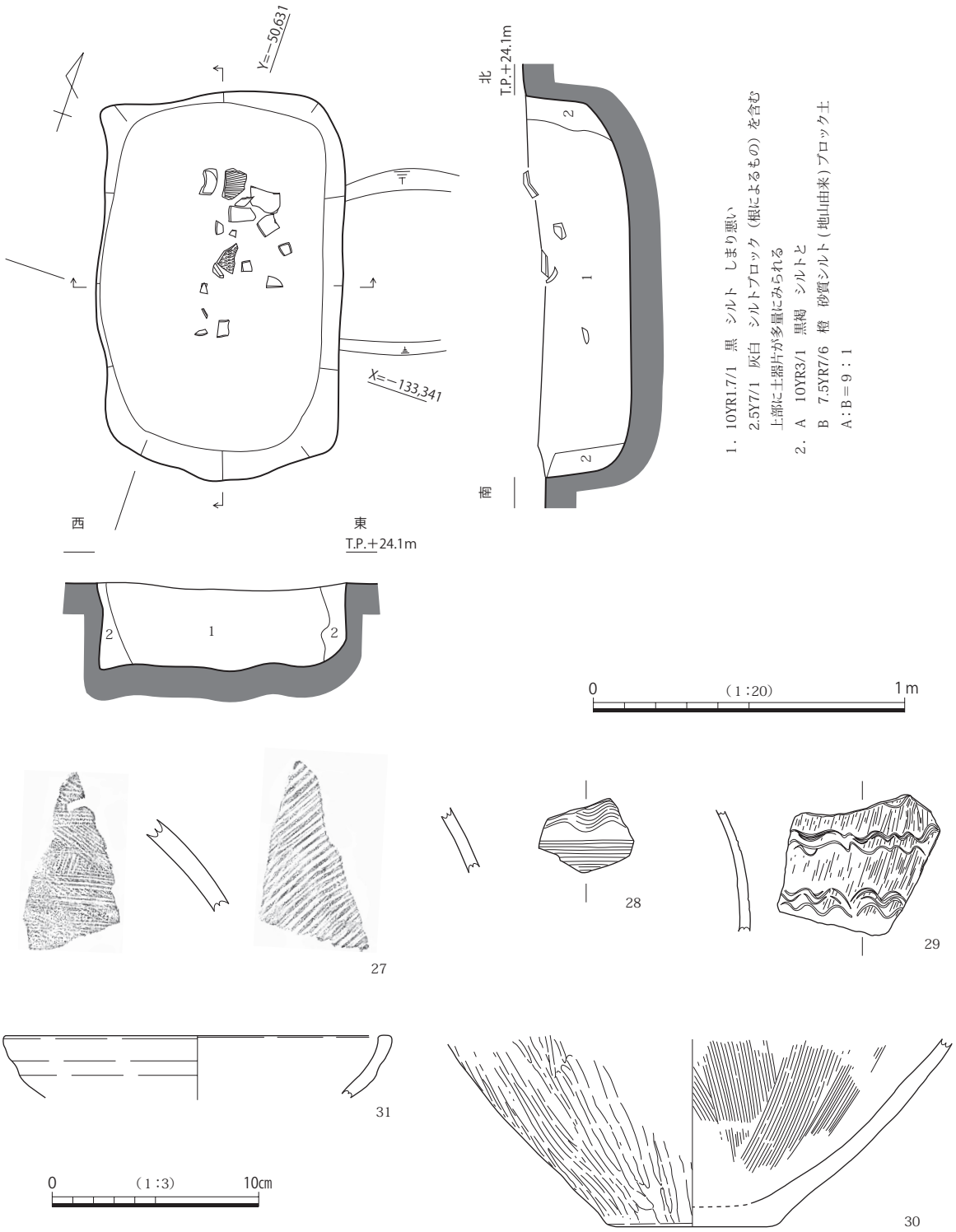


図33　111土坑　平・断面図及び出土遺物

はない。

土坑の性格は明らかではないが、調査地内には124土坑に類する土坑が他に存在しないことを考えれば、当土坑は特殊な性格を帯びたものであることが想定される。

平安時代～中世にかけての建物に近接するこのような形態の土坑には、屋敷墓と称される土坑墓や木棺墓が知られる。124土坑には副葬品が伴わず、木棺痕跡や人骨が認められなかったことから確実な墓

とは捉えられないが、建物に近接した位置に掘削されていること、土坑埋土の状況、建物１・５と主軸方位を同じくすること、調査地内に124土坑に類する土坑が他に存在しないこと等を勘案すれば、土坑墓或いは木蓋土坑墓である可能性を指摘しておきたい。

111土坑（図33・図版14・19）

調査区東側高台部、Ｘ＝－133,341・Ｙ＝－50,631に位置する平面隅丸長方形を呈する土坑である。長軸約1.25ｍ、短軸約0.8ｍ、深さ約0.25ｍを測る。断面形は長方形状を呈する。埋土は２層に分かれ、土坑中央部に締まりの悪い黒色シルトが、壁際には黒褐色シルトと地山由来の橙色砂質シルトのブロック土がみられる。埋土上層付近で弥生中期土器片がまとまって出土している。これらはほとんどが細片となっていることや床面からかなり浮いた状態で出土していることから、後世に廃棄された資料である可能性が想定される。

図33－27は摂津Ⅲ～Ⅳ様式の甕である。外面には右上がりのタタキが、内面には斜位のハケメの後横位のハケメが施される。胎土は微細な長石、石英、金雲母を僅かに含む精良なものである。28・29は摂津Ⅲ～Ⅳ様式の壺であろう。28は外面に櫛描きによる波状文と直線文が、29には３条以上の波状文が施されている。どちらの胎土も直径１㎜前後の長石、石英、チャートを含む良好なものである。30は摂津Ⅲ～Ⅳ様式の壺底部。外面には縦位のヘラミガキが、内面には17条/㎝のハケメが施される。31は摂津Ⅳ様式の鉢であろうか。口縁端面は水平に仕上げ、口縁端部は内面をやや肥厚させている。口縁部直下には幅広の凹線が１条廻る。摩滅が著しく調整は不明である。胎土には直径１㎜前後の長石、石英、チャートを多く含む。

112土坑（図34・図版15）

調査区東側高台部、Ｘ＝－133,342・Ｙ＝－50,634に位置する平面隅丸方形を呈する土坑である。長軸約0.8ｍ、短軸約0.7ｍ、深さ約0.25ｍを測る。断面形は長方形状を呈する。埋土は２層に分かれ、上層に弱い粘性がある黒色シルトが、下層に地山由来の橙色シルト質粘土ブロックを含む黒色シルトがみられる。土坑底面からやや浮いた状態で一辺15㎝前後の角礫６個が入れられていた。性格は不明である。遺物の出土はみられなかった。

134土坑（図34）

調査区東側高台部、Ｘ＝－133,340・Ｙ＝－50,639付近に位置する平面隅丸長方形を呈する土坑である。長軸約0.7ｍ、短軸約0.35ｍ、深さ約0.2ｍを測る。底面は凹凸が著しい。埋土は２層に分かれ、上層に黒褐色シルトが、下層ににぶい黄橙色シルト質粘土（地山由来）と含む褐灰色シルトの混合土が堆積している。遺物は出土しておらず、所産時期や性格は不明である。

135土坑（図34）

調査区東側高台部、Ｘ＝－133,337・Ｙ＝－50,640付近に位置する平面隅丸長方形を呈する土坑である。長軸約0.6ｍ、短軸約0.3ｍ、深さ約0.25ｍを測る。底面は凹凸が著しい。埋土は地山由来のにぶい黄橙色シルトブロックを含む黒色シルトが堆積している。遺物は出土しておらず、所産時期や性格は不明である。

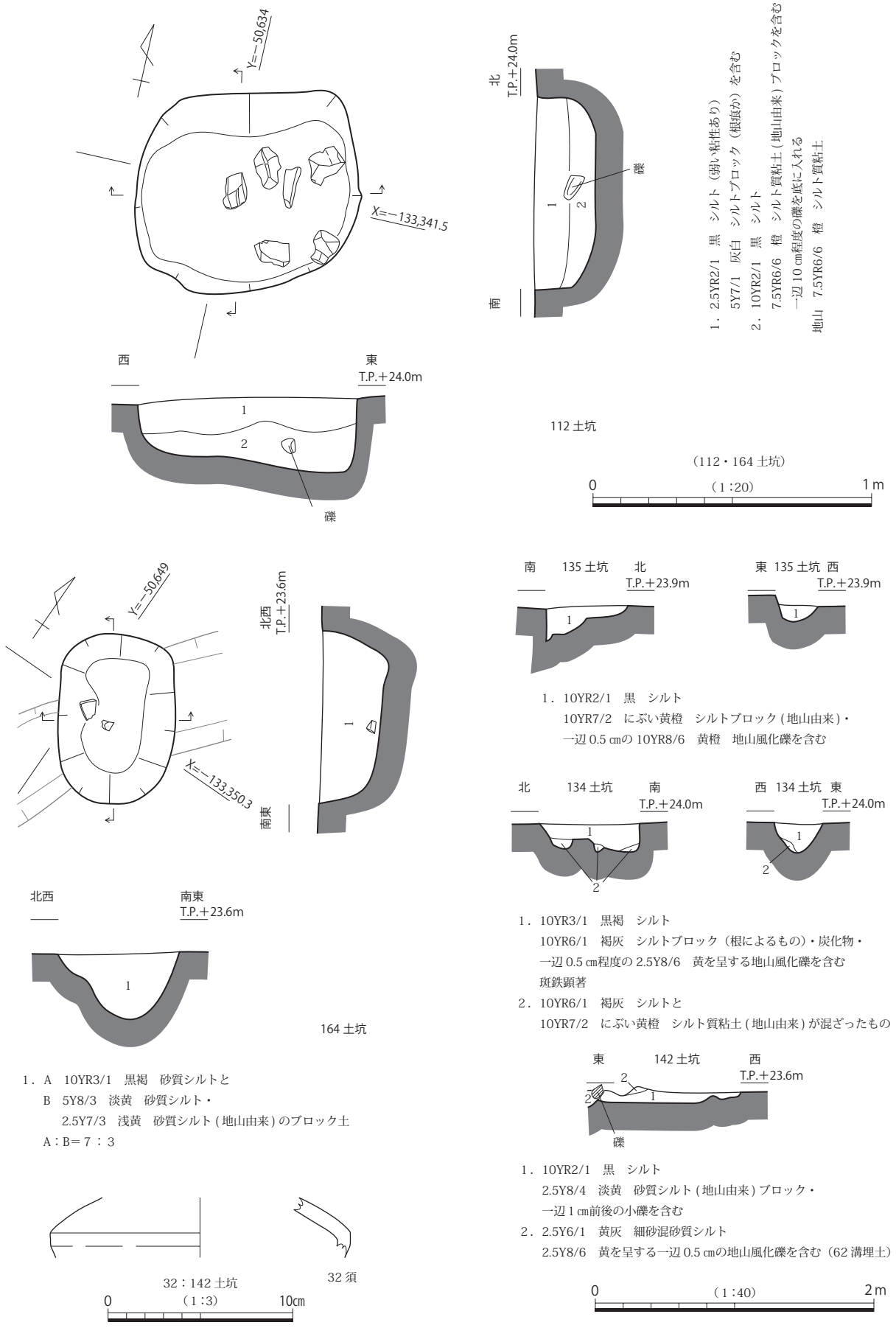


図34　112・164土坑　平・断面図及び出土遺物

142土坑（図34）

調査区東側、X＝－133,348・Y＝－50,640付近に位置する土坑である。土坑東側は62溝に切られており、現状では平面隅丸三角形状を呈している。長・短軸共に約１ｍである。断面形は浅い皿状を呈し、深さ約0.1ｍを測る。埋土は地山由来の淡黄色砂質シルトブロックを含む黒色シルトが堆積している。出土遺物には須恵器や土師器がある。図34－32は須恵器長頸壺の肩部か。外面には淡い緑色の自然釉がかかる。８世紀代の所産であろう。

164土坑（図34・図版14）

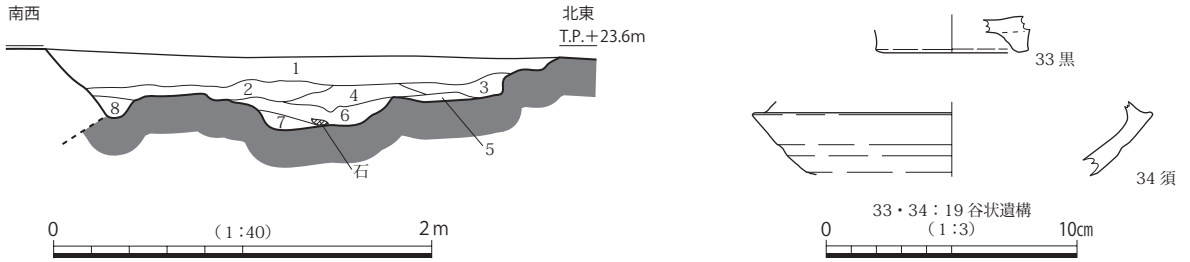
調査区南西側、X＝－133,350・Y＝－50,649付近に位置する平面隅丸長方形を呈する土坑である。長軸約0.6ｍ、短軸約0.4ｍ、深さ約0.25ｍを測る。埋土は地山由来の淡黄色砂質シルトと黒褐色砂質シルトのブロック土である。出土遺物には細片となった須恵器や土師器がある。

20溝

調査区西端部に位置し、１区から延びてくる溝である。19谷状遺構の東側にあり、N－31°－Wを軸に北西から南東に直線的にはしる。20溝は幅0.4～１ｍ、深さ0.05～0.15ｍを測る。溝南側は調査区外へと延び、検出長は約16ｍ（１区を含めると約30ｍ）である。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は黄灰色シルトである。出土遺物は極めて少なく、須恵器・土師器片がみられたのみで時期を決し難い。埋土の雰囲気からすれば古代以降で近世以前の所産と考えられる。

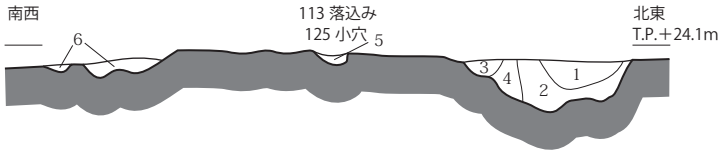
264溝（図35・図版16）

調査区西端部、X＝－133,346・Y＝－50,658付近を始発とし、ほぼ南北にはしる溝である。20溝を切っている。溝は幅約１ｍ、深さ約0.3ｍを測る。溝南側は調査区外へと延び、検出長は2.5ｍである。断面形は浅い皿状を呈するが、溝底面は凹凸が著しい。埋土は２層に分かれ、上層が黒褐色粘質シルト、下層が黒褐色粗砂混粘質シルトである。遺物は出土しておらず、所産時期は不明である。

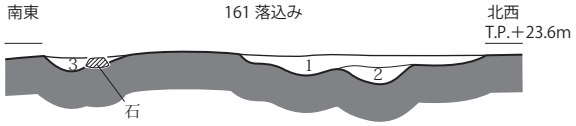


1．5Y5/1　灰　極細～細砂混シルト
　炭化物・一辺１～５㎝の礫・
　2.5Y8/6　黄を呈する一辺 0.5 ～１㎝の地山風化礫・
　遺物小片を含む（耕作土下層）
2．2.5Y4/1　黄灰　シルト混中～粗砂
　炭化物・2.5Y8/6　黄を呈する一辺 0.3 ～１㎝の地山風化礫を含む
　上面には鉄沈着（耕作土か）
3．2.5Y5/1　黄灰　極細～細砂混シルト
　2.5Y8/6　黄を呈する一辺１㎝前後の地山風化礫を含む
4．2.5Y4/1　黄灰　粗砂・礫混シルト
　2.5Y8/6　黄を呈する一辺 0.5 ～２㎝の地山風化礫・
　一辺１～３㎝の礫を多く含む
5．2.5Y5/1　黄灰　シルト
　2.5Y8/6　黄を呈する一辺 0.5 ㎝の地山風化礫を含む
6．2.5Y3/1　黒褐　粘質シルト
　2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト (地山由来) ブロック（264 溝埋土）
7．2.5Y3/1　黒褐　粗砂混粘質シルト（264 溝埋土）
8．2.5Y4/1　黄灰　粘質シルト
　2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト (地山由来) ブロックを含む（19 谷状遺構埋土）

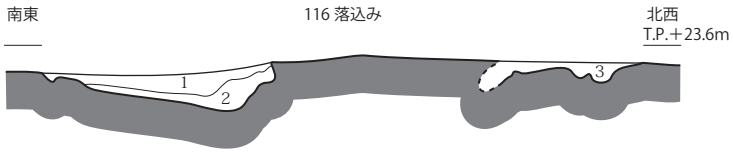
図35　19谷状遺構・264溝　断面図及び出土遺物



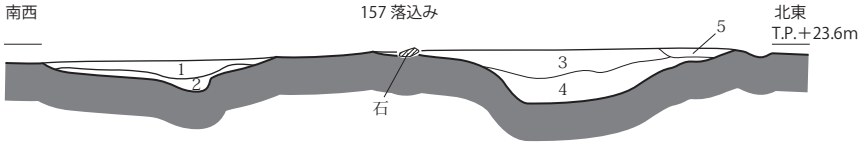
1．5YR2/1　黒褐　極細砂混シルト
　極小（一辺 0.1 ～ 0.3 ㎝）の 5YR5/6　明赤褐を呈する地山風化礫・
　一辺 1 ～ 2 ㎝の小礫を含む
2．7.5YR5/1　褐灰～ 7.5YR5/2　灰褐　シルト
　5Y8/2　灰白を呈する一辺 2 ㎝前後の地山風化礫・
　一辺 1 ～ 2 ㎝の小礫・炭化物・
　2.5Y8/6　黄を呈する極小の地山風化礫を含む
3．10YR5/2　灰黄褐　シルト
　炭化物・一辺 1 ㎝前後の小礫を含む
4．7.5YR6/4　にぶい橙　シルト
　一辺 0.5 ㎝前後の小礫を含む（根による擾乱か）
5．7.5YR4/1　褐灰　シルト
　炭化物・一辺 1 ㎝前後の小礫を含む（125 小穴埋土）
6．10YR5/2　灰黄褐　極細砂混シルト
　7.5YR6/4　にぶい橙　シルト質粘土 (地山由来) ブロックを含む
地山　7.5YR6/6　橙　小礫混シルト質粘土～砂質シルト
　一辺 1 ～ 5 ㎝の礫を含む



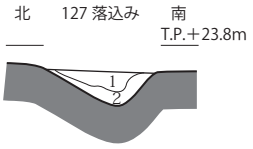
1．10YR2/1　黒　細砂混砂質シルト
　2.5Y8/3　淡黄　砂質シルト (地山由来) ブロック・
　2.5Y7/1　灰白　シルトブロック・
　2.5Y8/6　黄を呈する一辺 1 ㎝前後の地山風化礫を含む
2．10YR6/2　灰黄褐　シルト混細～中砂
　10YR3/1　黒褐　シルトブロックを含む
3．10YR4/1　褐灰　細砂混砂質シルト
　一辺 0.5 ～ 1 ㎝の小礫を多く含む



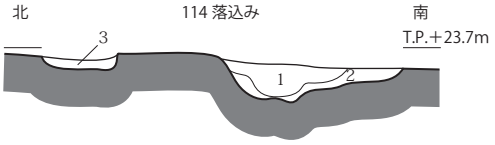
1．10YR2/1　黒　シルト　やや粘性あり
2．10YR4/1　褐灰　粘質シルト
　炭化物・2.5Y7/3　浅黄　砂質シルト (地山由来) ブロックを含む
3．10YR4/1　褐灰　極細～細砂混砂質シルト
　炭化物・2.5Y7/2　灰黄　砂質シルト (地山由来) ブロックを含む



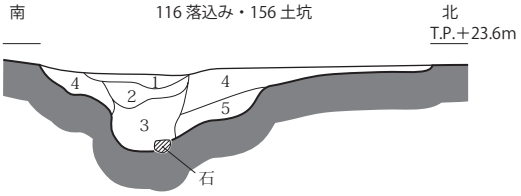
1．10YR2/1　黒　細砂混シルト
　2.5Y6/1　黄灰　シルトブロック・一辺 1 ㎝前後の 2.5Y8/6　黄を呈する地山風化礫を含む
2．10YR4/1　褐灰　極細砂混砂質シルト
　2.5Y8/4　淡黄　砂質シルト (地山由来) ブロックを含む
3．10YR2/1　黒　シルト
　2.5Y8/6　黄を呈する一辺 1 ㎝前後の地山風化礫・一辺 1 ～ 2 ㎝の小礫を含む
4．10YR4/1　褐灰　粘質シルト
　10YR6/1　褐灰　シルトブロック・一辺 1 ㎝前後の 2.5Y8/6　黄を呈する地山風化礫を含む
5．10YR6/1　褐灰　細～中砂混砂質シルト
　10YR2/1　黒　シルトブロック・一辺 0.5 ～ 1 ㎝の小礫を多く含む（鋤溝埋土）



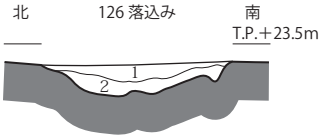
1．10YR3/1　黒褐　粘質シルト
　一辺 1 ～ 2 ㎝の 2.5Y8/3　淡黄を呈する
　地山風化礫を含む
2．7.5YR5/1　褐灰　シルト
　7.5YR6/3　にぶい褐　シルト質粘土
　(地山由来) ブロックを含む
　1 から 2 へ漸移的に淡くなる



1．7.5YR2/1　黒　シルト　しまり悪い
　10YR8/6　黄橙を呈する一辺 0.5 ㎝程度の地山風化礫を含む
2．7.5YR4/1 から 7.5YR5/1　褐灰　極細砂混シルト
　極小の地山風化礫（一辺 0.3 ㎝弱）・
　7.5YR7/6　橙　シルト質粘土 (地山由来) ブロックを含む
3．7.5YR4/1　褐灰　極細砂混シルト
　一辺 1 ㎝前後の 10YR8/6　黄橙を呈する地山風化礫を含む



1．2.5Y7/2　灰黄　シルト混細～中砂　斑鉄顕著（鋤溝埋土）
2．2.5Y2/1　黒　シルト　しまり悪い
　2.5Y8/2　灰白　シルトブロックを含む（156 土坑埋土）
3．10YR1.7/1　黒　粘質シルト
　炭化物を含む（156 土坑埋土）
4．10YR2/1　黒　粘質シルト
　2.5Y8/3　淡黄　シルト質粘土 (地山由来) ブロック・
　2.5Y8/2　灰白を呈する一辺 1 ㎝前後の地山風化礫を含む
5．10YR4/1　褐灰　粘質シルト
　2.5Y7/2　灰黄　シルト質粘土 (地山由来) が混ざったもの



1．10YR2/1　黒　極細砂～細砂混シルト
2．2.5Y4/1　黄灰　細砂混砂質シルト
　5Y8/3　淡黄　砂質シルト (地山由来) ブロック・
　2.5Y7/3　浅黄を呈する一辺 2 ～ 3 ㎝の
　地山風化礫を含む

0　（1：40）　2 m

図36　落込み　断面図

19谷状遺構（図35・図版16）

調査区西端部、20溝の西側約0.3 ～ 0.5ｍに位置し、１区から延びてくる。Ｎ－29°－Ｗを軸に北西から南東に直線的にはしり、西側に向けて落ちる地形である。調査区内では東肩を検出したのみである。肩北側は１区へと延びる。南側はＸ＝－133,347・Ｙ＝－50,658付近で調査区外に広がって行く。

出土遺物はさほど多くはなく、土師器、須恵器、黒色土器がみられ、総体的に摩滅した細片になっている。図35－33は黒色土器内黒椀である。断面台形のしっかりした高台が付く。34は須恵器杯身である。受け部は短く水平に伸び、口縁部は内傾しながら立ち上がる。７世紀代の所産であろう。

落込み（図36・図版16）

１区でも検出した２条１組の溝で構成され、平面不定形なＵ字形或いは馬蹄形状を呈する落込みを調査区全域で７基確認した。落込みを形成する溝は、底面や側壁に著しく凹凸がみられ、片側の溝が深く、他方が浅くなる傾向がみられる。埋土は概ね上下２層に分かれ、上層に黒色シルト～粘質シルトが、下層に灰黄褐～褐灰色シルト～砂質シルトが堆積している。先にも述べたように、落込みは人為的な掘削とは考え難い形状を示していることから、地震動が起因する土坑状変形である可能性を想定しておきたい。なお、断面図には表現されていないが、２条の溝に挟まれた中央部の基盤層（地山）には、周辺の基盤層にさほど礫がみられない状況においても、多くの礫が集中する傾向が窺えた。これは地震による破壊・変形に伴い、基盤層の下位に広がる礫層が姿をみせたものと推察される。

他の遺構に比して、落込みからの出土遺物はより少なく、詳細な時期は不明である。但し、落込みと切り合い関係をもつ平安期と想定される遺構が幾つか存在することから、落込みは平安時代以前の所産である可能性が高い。

第４節　包含層出土の遺物（図37・38・図版20）

調査地の遺構・包含層共に、総体的に遺物の出土が希薄であった。しかし、少数ながら第２層の近世耕作土や第５層の古代包含層から特徴的な遺物の出土をみた。本節ではこれらの遺物に関して記載をすすめる。

図37－35 ～ 58は第２層出土の遺物である。35 ～ 43・45は肥前系陶器である。35は刷毛目椀。高い高台が付く。高台畳付以外は施釉され、白化粧土を用いた刷毛目文がみられる。17世紀後半の所産。36は京焼風椀。高台及び高台内以外はやや黄色味を帯びた透明釉がかかる。釉には細かな貫入が入る。内面見込みには直径１㎜ほどのピンホール状の目跡が２つみられる。37は平皿である。底部から口縁部に向けて緩やかに内湾しながら立ち上がる。体部下半は露胎となっており、それ以外には灰釉がかけられる。17世紀前半の所産。38は口縁部が大きく外反する端反形の溝縁皿。体部外面は露胎となっている。内面には灰釉がかけられる。17世紀前半の所産であろう。39は鉢か。口縁端部を三角形状に仕上げる。内面には白化粧土を用いた刷毛目文がみられる。17世紀末～ 18世紀後半の資料であろう。40は皿である。高台及び高台内は露胎となっており、それ以外には藁灰釉がかけられる。高台内には兜巾が残る。内面見込みに２箇所、高台脇に３箇所の胎土目がみられる。16世紀末～ 17世紀初頭の所産。41は皿である。逆台形のどっしりとした高台が付く。高台は畳付が露胎となっている以外は施釉される。また、畳付には砂目痕がみられる。外面には透明釉、内面には銅緑釉がかけられ、内面見込みは蛇

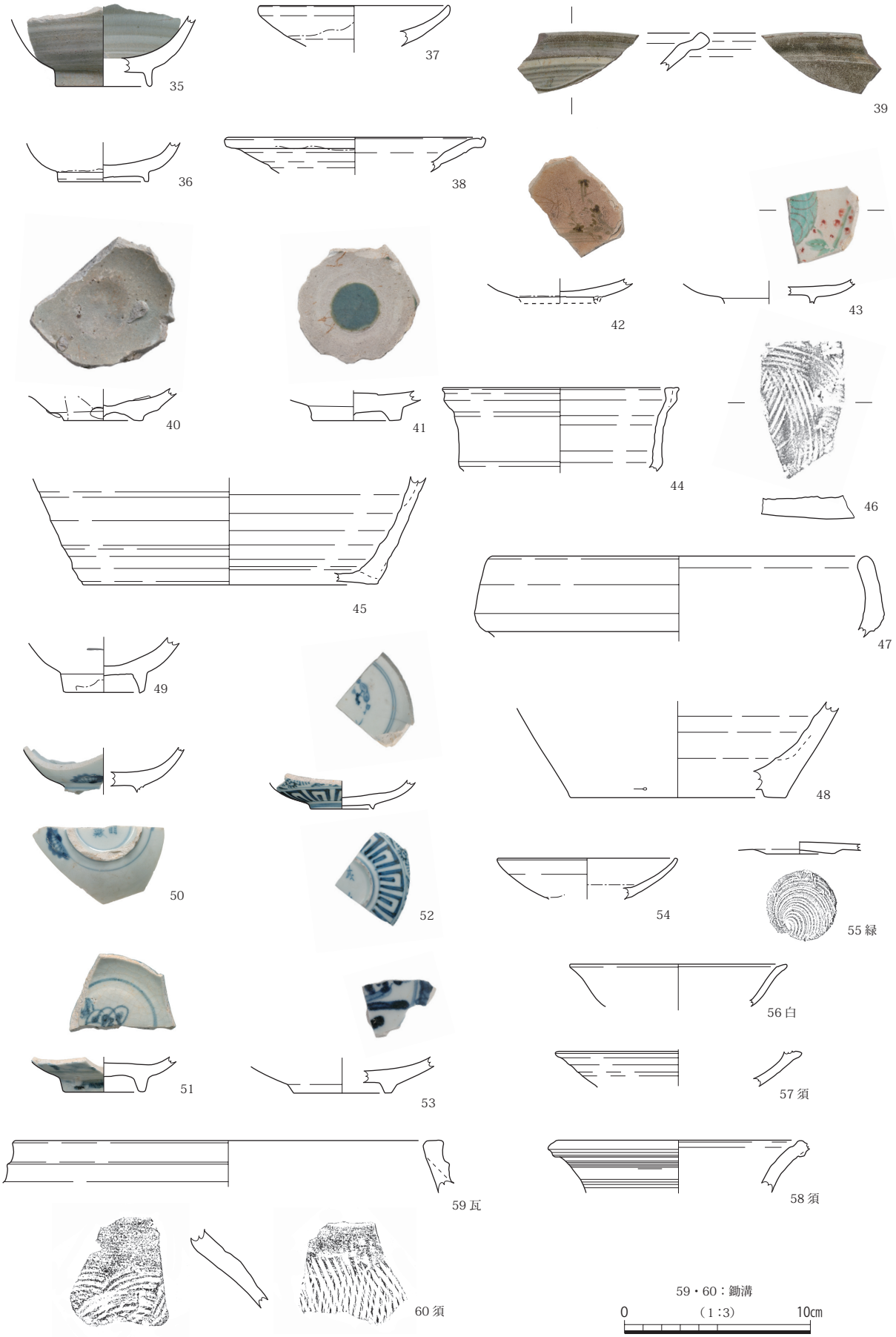


図37　第2層及び鋤溝出土遺物

の目釉剥ぎになっている。17世紀中頃～後半の所産。42は京焼風皿。内面見込みには山水文が描かれる。高台は欠失するが、高台及び高台内、高台脇は露胎となっている。釉には細かな貫入が入る。高台内の銘款は確認できない。43は京焼風皿か。胎土は磁器に近い。高台は細いものであるが、大半を欠失。全面に施釉され、釉には細かな貫入が入る。内面見込みは釉剥ぎされ、そこに銀・青彩されている。また同時に見込みには赤・青彩により草花文が描かれる。

44は丹波焼火入である。底部から口縁部に向けて緩やかに外反しながら立ち上がる。口縁部はやや肥厚させ、浅い凹線を１条廻らせる。口縁端部は水平に仕上げる。45は肥前系陶器鉢か。外面には鉄釉が、内面には透明釉がかけられる。46は焼締め陶器擂鉢である。内面見込みの擂目は三角パターンを示すことから、堺焼擂鉢の可能性がある。18世紀代の所産。47は土師器焙烙。底部から口縁部が屈曲してやや内傾しながら立ち上がる。内外面共にヨコナデを施している。積山分類Ｄ類である。18世紀初頭の所産か。48は焼締め陶器鉢か。高台は削り出しで、輪状高台となっている。胎土は混和材が少なく、肌理の細かい精良なもの。高台以外の内外面に乳白色の釉がみられる。釉は焼成不良であったためか、ガラス化していない。

49 ～ 54は肥前系磁器である。49は染付碗。高い高台が付く。高台内は削っており、縮緬状の皺が顕著である。一部、高台にも釉が垂れ下がるが、基本は露胎であろう。高台内も無釉。17世紀前半の所産。50は染付丸碗。高台内に崩れた㊤明㊨製の銘款がみられる。18世紀前半の所産であろう。51は染付丸碗か。高い高台が付く。畳付は釉剥ぎされるが、高台及び高台内も施釉される。畳付の一部に発泡した箇所が認められることから、砂目積みの痕跡があった可能性が考えられる。17世紀前半の所産であろう。52は染付皿。幅が狭く、低い高台が付く。畳付は釉剥ぎされるが、高台及び高台内は施釉される。高台内には成㊧㊨㊫の銘款がみられ、体部外面に蛸唐草文がみられることから18世紀中頃～後半の所産であろう。53は染付皿である。低く、しっかりした高台がつく。畳付は釉剥ぎされるが、高台及び高台内は施釉される。54は白磁平皿である。内面見込みは蛇の目釉剥ぎ。体部外面下半は露胎か。

55は緑釉陶器皿。混和材をほとんど含まない緻密な胎土を使用した硬質の緑釉陶器。高台は削り出しで、円盤状の平高台となっている。高台底面には回転糸切り痕が残る。内面見込みに淡い緑灰色の釉がかけられる。56は白磁皿。底部から口縁部に向けて緩やかに外反する皿。口縁端部内面は釉剥ぎされ、口禿となっている。白磁皿Ⅸ－３類であろう。13世紀中頃～ 14世紀初頭の所産。57は須恵器杯身。口縁部は欠失する。受け部は短く水平に伸びる。７世紀代の所産であろう。58は須恵器甕。頸部から口縁部に向けて緩やかに外反する。口縁端部はやや肥厚する。口縁部内外面には浅い凹線が廻る。頸部外面にはカキメを施す。７世紀代の所産か。

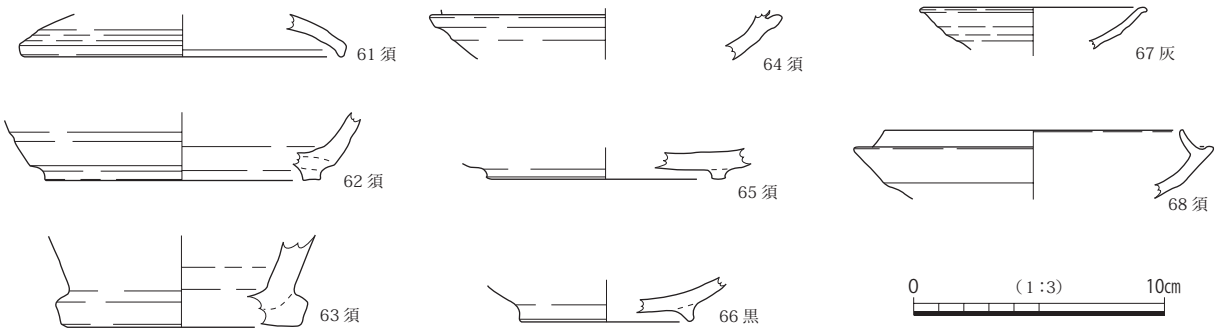


図38　第3・5層出土及び地山面精査時出土遺物

出土遺物の年代観から第２層の近世耕作土は17世紀初頭～ 18世紀と考えられる。

図38－61・62は第３層出土の遺物である。61は須恵器杯Ｂ蓋である。口縁部外面及び内面に自然釉がかかる。胎土は混和材をほとんど含まない精良なもの。復元口径は12.6㎝を測る。62は須恵器杯Ｂ。高台は断面逆台形を呈し、底部の外側に付く。胎土には黒色粒が顕著にみられる。共に８世紀代の所産。

図38－63 ～ 66は第５層出土の遺物である。63は須恵器すり鉢。内外面に自然釉がかかる。64は須恵器杯身である。短い受け部がやや斜め上方に伸びる。口縁部は欠失する。外面には溶融しかかった直径１㎜前後の長石や石英が多量に付着している。離れ砂的なものであろうか。７世紀代の所産であろう。65は須恵器杯Ｂ。高台は断面逆台形を呈する。胎土には黒色粒があまりみられず、長石が顕著である。66は黒色土器内黒椀。摩滅が著しく調整は不明。内面には褐色の付着物がみられる。

図38－67・68は地山面精査時の出土資料。67は灰釉陶器皿である。底部から緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。口縁下約１㎝に内外面共に幅約３㎜の釉が薄くなった箇所が認められる。重ね焼きに関係するものであろうか。10世紀前半の所産。68は須恵器杯身。受け部は短く水平に伸び、口縁部は内傾しながら立ち上がる。胎土には黒色粒が顕著にみられる。７世紀代の所産であろう。

第４章　総　括

蛍池北遺跡ではこれまで調査が積み重ねられて来たが、調査の多くが遺跡北部に集中しており、今次の調査地である遺跡南部での調査事例は少なかった。今次の調査は遺跡南部の様相を知る上で貴重な成果を提供するものとなった。最後に総括として成果をまとめておきたい。

今回の調査では大きく２時期、近世期とそれ以前の遺構・遺物を確認することができた。

調査地は西側の沖積平野や南側の開析谷に向かって張り出す低位段丘の緩斜面上に位置するが、近世期の耕作地造成に伴う大規模な土地改変によって、調査区西側2/3は平坦な地形へと改変されている。この影響は非常に大きく、古代の様相は確認できたが、中世期の様相はほとんど明らかにできなかった。

【近世期】

近世期には東端部に石組暗渠を伴った広範な耕作地が広がっていたことを明らかにした。造成時期や耕作開始期は明らかではないが、耕作土出土の遺物から17世紀初頭には既に営まれていた可能性が高い。調査地西端部で検出した19谷状遺構の最終埋没に相当する部分には、近世耕作土直下に近世期以前の耕作土と想定される黄灰色シルトがみられ、耕作の規模等は別として、中世後半段階には耕作地が営まれていたものと推察される。

検出した耕作痕や暗渠は、Ｎ－17 ～ 18°－Ｗを軸に展開している。調査地西側の豊中市教育委員会によって実施された第８次調査西端部では、今回検出した耕作痕に直交するＮ－77°－Ｅを軸にした耕作痕（鋤溝）が検出されている（図39）。調査地内で耕地境は確認できなかったが、耕作地はより西側にも広がっていたことが分かる。また、調査地北東約150 ～ 300ｍの位置で、当センターが行なった大阪モノレール建設に伴う第18・19次の調査では、ほぼ東西・南北に軸をもつ耕作痕を検出している。このように、低位段丘上には近世期に大規模な耕作地が広がっていたものと推定される。また、同じ低位段丘上に位置していても、耕作地は地点によって多様な様相をみせている。今回検出した耕作地の耕作軸は、調査地西側約150ｍに位置している段丘崖にほぼ平行する方位となっており、地形に規制された土地利用がなされたものと想定される。周辺で検出された多様な姿をみせる耕作痕跡からも首肯されよう。図版１の1948年撮影の航空写真にみえるように、段丘崖西側に広がる沖積平野では整然と並ぶ条里制地割が残るのと対照的な景観となる。

【近世期以前】

近世期以前の確実な遺構には、平安時代に遡る掘立柱建物群や土坑がある。建物は調査地北東側で１棟（掘立柱建物２）、調査地中央部で３棟（掘立柱建物１・３・５）を検出した。建物３と５に切り合い関係があることから、少なくとも２時期に亘って存在していたものと推察される。建物を構成する柱穴からは出土遺物が僅少であったため、各建物の時期を明らかにできなかったが、建物周辺に存在する小穴（205・206小穴）や土坑（83・95土坑等）出土の遺物の年代観から、概ね11世紀後半頃が想定される。

建物はその主軸方位から２群に分けることが可能であろう。一つは、Ｎ－27 ～ 31°－Ｗを主軸にもつ建物１・５である。建物１・５は極めて近接して存在しているが、軸を同じくし、南北に並列して建てられていることから同時期に存在していた蓋然性が高い。いま一つは、Ｎ－18 ～ 20°－Ｗを軸とす

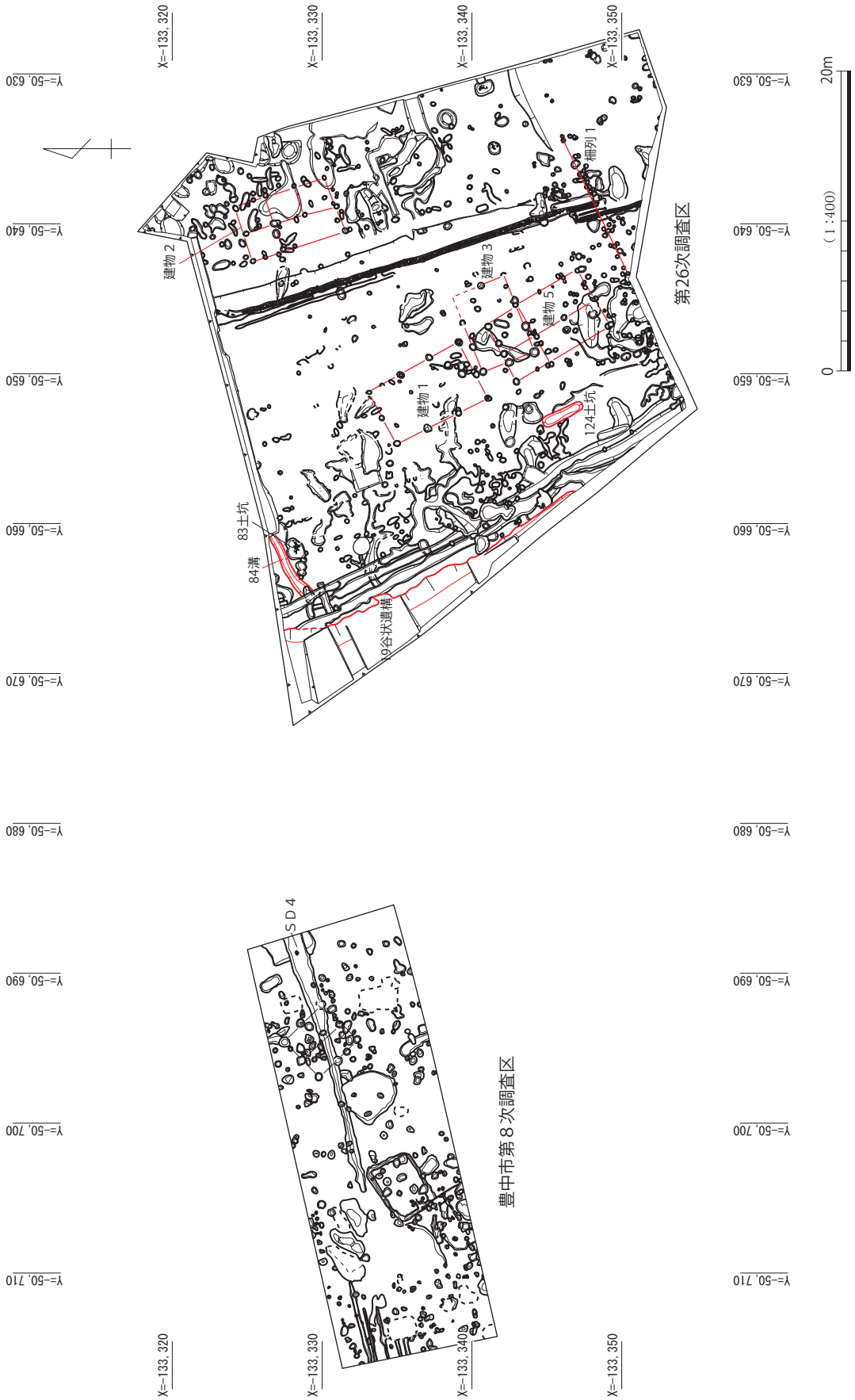


図39　蛍池北遺跡　第8・26次調査平面図

る建物２・３である。両者はやや離れた位置にあるため、残念ながら建物１・５のような有意な関係性を見出すことができない。建物群は主軸を正方位に乗せず、西に振る軸をとる。これは調査地西側に位置する19谷状遺構の主軸方位（Ｎ－29°－Ｗ）に近いものであり、地形に規制された土地利用であったことが判明した。

前者の建物群と共通する主軸方位をもつ当該期と考えられる遺構には、124土坑・84溝・柵列１が挙げられる。

124土坑の性格は、調査において明らかにすることができなかったが、建物５の西側に位置することやその形態から屋敷墓の可能性を窺わせるものである。また、84溝及び柵列１は建物群に直交する方位を指向している。これらが屋敷地の南北を画する施設であった可能性を指摘しておきたい。こうした評価が許されるのであるならば、建物１・５の屋敷地は南北約30ｍの規模となる。また、敷地西側にはしる19谷状遺構は、出土遺物から中世段階に埋没すると想定されるため、敷地西側はこの谷状地形によって画されていたと言えよう。東側に関しては判然としないが、南北と同等規模であったと想定するならば、現況で調査地東側にある私有地との境あたりとなる。

建物１・５の面積は約27.5・30.7㎡と決して大きなものではない。しかし、敷地内に存在し、同時期と考えられる83土坑から、古い段階の石鍋が出土している。当時としては貴重な石鍋を持つ屋敷地の性格については、なお慎重にならざるを得ないが、当時の流通や集落の性格を検討する上で注目すべき資料となろう。

屋敷地内からは当該期の井戸が検出されなかった。当時は西側にはしる19谷状遺構から水を得ていたものと考えられる。

周辺の平安時代に関する成果として、調査地北西約200～350ｍに位置する第１・９次調査で確認された９世紀前半～10世紀前半の遺構や遺物が挙げられる。しかし、両調査においては、それ以降の様相に関しては判然としていない。また、他の調査地点においても10世紀後半～11世紀前半の集落の動向が明らかになっていない。蛍池北遺跡内における平安時代の集落の動向－遺跡北部から南部への単純な集落異動であったのか、或いは、一度集落が断絶し、新たに11世紀後半になって遺跡南部に集落が形成されたのかは、今後の周辺での調査の進展に期待されるところである。

なお、調査地西側の第８次調査ではＮ－76°－Ｅを軸にするSD ４が検出されている。溝からは黒色土器や瓦器が出土している。瓦器の実態が明らかではないため、溝の時期は判然としないが、19谷状遺構を挟んだ第８次調査地にも、11世紀後半以降の居住域が広がっていた可能性が考えられる。

古墳時代から奈良時代に関しては大きな成果が得られなかった。しかし、近世耕作土や古代遺物包含層から７～８世紀所産の須恵器等の出土がみられたことから、遺跡北側部分のみならず、調査地周辺にも当該期の集落が存在していたと思われる。時期が明らかになっていないが、第８次調査で検出された掘立柱建物の存在が注意される。

弥生時代に関しては、調査地東側で弥生時代中期土器片が出土した土坑（111土坑）を１基検出した。土器は土坑上部から出土しており、後世に廃棄された可能性も否定できないが、遺跡南部にも当該期の集落が展開していたことを窺わせる貴重な資料となろう。従来、弥生時代の集落に関しては遺跡北部で重要な成果を上げてきた。遺跡南部での成果は未だ明るくはないが、調査地北東約100ｍに位置する第13次調査で中期の円形竪穴建物を検出しているように、今後は遺跡南部での様相も次第に明らかとなっていくであろう。

また、調査地には土坑状変形と考えられる落込みが複数みられた。このような形状の落込みは、近年各地で検出され、地震動に起因する変形構造であると指摘される。今調査では、遺物が出土しておらず時期が不詳であるが、平安時代の遺構との切合い関係が認められることから、平安時代以前の大規模な地震によるものと想定しておきたい。今調査では、溝状に落込んだ部分しか掘削せず不十分な調査であったが、今後近傍で調査を実施する際には溝状の落込みに挟まれた基盤層部分も断ち割りを行ない、土坑状変形の構造把握を試みる必要があろう。

以上、局所的な状況ではあるが、これまであまり光が当たらなかった近世と平安時代後半の様相を明らかにすることができた。その一方で、近世期に展開する耕作地の起源や遺跡内における平安期集落の変遷等の残された課題もある。蛍池北遺跡南部の状況は未だ不明な点が多いが、今後の調査の進展とこれまで蓄積された資料の精査によって、より鮮やかに歴史像を復元することができよう。今後に期待するところである。

参考文献

井上智博　2008 「土坑状変形」『(財) 大阪府文化財センター調査報告書　第173集　讃良郡条里遺跡Ⅵ－一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 財団法人大阪府文化財センター

金光正裕ほか　1994 『宮の前遺跡・蛍池東遺跡・蛍池遺跡・蛍池西遺跡　1992・1993年度発掘調査報告書－大阪モノレール蛍池東線・西線建設に伴う発掘調査』 財団法人大阪文化財センター

金光正裕ほか　1997 『(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第22集1　宮の前遺跡・蛍池東遺跡・麻田藩陣屋跡・蛍池遺跡・蛍池南地区・蛍池西遺跡　1993-1996年度発掘調査報告書－大阪モノレール蛍池東線・西線建設に伴う発掘調査』 財団法人大阪府文化財調査研究センター

橘田正徳　1991 「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』 日本中世土器研究会

橘田正徳編　1998 『蛍池西遺跡－阪神高速道路大阪池田線池田延伸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 蛍池西遺跡調査団

豊中市史編さん委員会　2005 『新修　豊中市史』第4巻　考古

豊中市史編さん委員会　2009 『新修　豊中市史』第1巻　通史1

服部聡志・大庭重信編　1995 『豊中市文化財調査報告　第36集　蛍池北遺跡（宮の前遺跡） 第12次発掘調査報告－弥生時代中期方形周溝墓群の調査－』 豊中市教育委員会・蛍池北遺跡調査団

松田順一郎・井上智博　2005 「風倒木とは似て非なる古地震痕跡－大阪府讃良郡条里遺跡の事例」日本文化財科学会第22回大会　ポスターセッション資料

遺　物　観　察　表

図番号	遺物番号	図版番号	調査区	面・層位	遺構	器種	法量（cm）			色調	胎土	焼成	備考
							口径・長さ	底径・幅	器高・厚み	上段：外面 下段：内面			
12	1		1区	第1面	86 柱穴	土師器甕			(1.8)	7.5YR7/6　橙 10YR7/3　にぶい黄橙	φ1～2㎜前後の石英・長石・チャート・赤色くさり礫を含む	良	掘立柱建物1
13	2	18	1区	第1面	33 柱穴	土師器皿	(9.0)		(1.0)	10YR8/3　浅黄橙	混和材をほとんど含まない精良なもの	良好	「て」の字状口縁皿 11 世紀後半（京Ⅴ〔京都Ⅳ〕期新段階か） 掘立柱建物2
	3	18	1区	第1面	15 柱穴	回転台土師器皿	(9.1)	(4.8)	(1.4)	5YR6/6　橙	φ3㎜弱の石英・長石を多く含むが精良なもの	良好	底部外面に糸切り痕が残る 掘立柱建物2
17	4		1区	第1面	83 土坑	須恵器杯身	(16.0) 最大径			N7/0　灰白	φ1～2㎜前後の石英・長石、φ1㎜弱の黒色粒を含む	やや甘い	
	5	17	1区	第1面	83 土坑	土師器皿	9.4	4.8	1.7	5YR6/4　にぶい橙 10YR5/2　灰黄褐	石英・長石を多く含むが精良なもの	良	「て」の字状口縁皿 11 世紀後半～12 世紀初頭（京Ⅴ〔京都Ⅳ〕期新段階～京Ⅵ〔京都Ⅴ〕期古段階か）
	6		1区	第1面	83 土坑	瓦器椀	(14.8)	(5.6)	(6.0)	10YR3/1　黒褐～ 10YR7/2　にぶい黄橙	φ1㎜以下の石英・長石・チャートを含む	やや甘い	体部外面はユビオサエの後ヘラミガキ　口縁端部内面には沈線は廻らない 11 世紀後半（和泉型瓦器椀Ⅰ－2期）
	7	17	1区	第1面	83 土坑	瓦器椀	15.2	6.4	5.5	N4/0　灰	φ1㎜以下の石英・長石を含む	良	体部外面はユビオサエの後粗めの分割ヘラミガキ　内面は太く粗いヘラミガキ　口縁端部内面には沈線は廻らない 11 世紀後半（和泉型瓦器椀Ⅰ－2期）
	8	17	1区	第1面	83 土坑	瓦器椀	(14.8)	5.6	(5.8)	N5/0　灰 N4/0　灰	φ1㎜以下の石英・長石を含む	良	体部外面はユビオサエの後粗いヘラミガキ 内面は細かなヘラミガキ　口縁端部内面には沈線は廻らない 11 世紀後半（和泉型瓦器椀Ⅰ－2期）
	9	17	1区	第1面	83 土坑	石鍋	(12.6)		(4.3)				2方向に断面丸味を帯びた三角形状の把手が残る 外面には幅2～4㎜のノミ痕が残る 木戸分類Ⅱ-b 類　11 世紀後半
	10	18	1区	第1面	85 土坑	土師器皿	(9.6)		(1.4)	10YR8/3　浅黄橙 10YR8/2　灰白	φ1㎜以下の石英・長石・チャートを含む	良	「て」の字状口縁皿 11 世紀後半～12 世紀初頭（京Ⅴ〔京都Ⅳ〕期新段階～京Ⅵ〔京都Ⅴ〕期古段階か）
	11	18	1区	第1面	84 溝	回転台土師器皿		(7.0)	(1.5)	7.5YR6/3　にぶい褐 10YR6/2　灰黄褐	φ1～2㎜大の石英・長石を僅かに含む精良なもの	良	底部外面に糸切り痕が残る 11 世紀中葉～後半の所産か
	12	18	1区	第1面	95 土坑	瓦器椀	(14.6)	(6.2)	(5.5)	N4/0　灰～ 10YR7/2　にぶい黄橙 N5/0　灰～ 10YR7/1　灰白	φ1～3㎜の石英・長石を含む	良	体部外面はユビオサエの後やや太めの分割ヘラミガキ　内面は比較的密なヘラミガキ　体部外面にφ3～6㎜のクレーター状剥離がみられる 11 世紀後半～12 世紀前半 （和泉型瓦器椀Ⅰ－2～Ⅱ－1期）
19	13		1区	第1面	93 溝	土師器甕				7.5YR6/6　橙	φ1～3㎜の石英・長石を含む	良	把手上面に長さ 1.5 ㎝、幅 0.5 ㎝の切込み

図番号	遺物番号	図版番号	調査区	面・層位	遺構	器種	法量（cm）			色調	胎土	焼成	備考
							口径・長さ	底径・幅	器高・厚み	上段：外面 下段：内面			
19	14		1区	第1面	93溝	須恵器甕				2.5Y5/1　黄灰 N7/0　灰白	φ1㎜前後の石英・長石・チャート・黒色粒を含む	良	
	15	18	1区	第1面	20溝	砥石	(7.7)	4.4	2.6				主要使用面は2面　肌理細かく仕上げ砥石と考えられる　重量119.8ｇ 凝灰岩系の石材か
	16	18	1区	第1面	19谷状遺構	須恵器壺			(6.3)	N5/0　灰	φ1～2㎜大の石英･長石、φ1㎜の黒色粒を含む	良好	
	17	18	1区	第1面	19谷状遺構	須恵器甕	頸部径(30.6)		(7.5)	2.5Y7/1　灰白	φ1～3㎜大の石英･長石、φ1㎜の黒色粒を含む	良好	肩部外面に自然釉が掛かる 肩部内面に同心円文の当て具痕
	18	18	1区	第1面	19谷状遺構	土師器皿	(9.2)		(1.0)	10YR8/2　灰白	φ1～2㎜前後の赤色くさり礫・金雲母を含むが精良なもの	良好	「て」の字状口縁皿 11世紀中頃～後半（京Ⅴ〔京都Ⅳ〕期中～新段階か）
	19		1区	第1面	19谷状遺構	黒色土器内黒椀		(5.6)	(0.6)	7.5Y7/1　灰白	φ1㎜前後の石英・長石を含む	やや甘い	扁平な逆台形の高台　内面の炭素分消失
	20	18	1区	第1面	19谷状遺構	瓦器椀			(2.4)	N3/0　暗灰 7.5YR7/1　灰白	φ1㎜前後の石英・長石を含む	良好	13世紀中頃～後半 （楠葉型瓦器椀Ⅲ－3～Ⅳ－1期）
	21		1区	第1面	74落込み	黒色土器内黒椀		(6.2)	(1.7)	10YR7/3　にぶい黄橙	φ1㎜前後の石英・長石を含む	やや甘い	外側に踏ん張る高い高台　内面の炭素分消失
26	22	19	2区	第1面	254小穴	瓦器椀	(15.0)		(4.9)	10YR5/1　褐灰	混和材をほとんど含まない精良なもの	良	口縁端部内面に段状になった沈線が1条廻る 器壁やや厚く0.5㎝ 11世紀後半～12世紀前半（楠葉型瓦器椀Ⅰ～Ⅱ－1期）掘立柱建物5
	23	19	2区	第1面	256小穴	黒色土器内黒椀		(5.4)	(1.8)	2.5Y7/1　灰白 N4/0　灰	φ1～3㎜の石英・長石・チャートを含む精良なもの	良	外側に踏ん張る高い高台　　11世紀前半頃の所産か　掘立柱建物5
31	24	19	2区	第1面	205小穴	土師器皿	(8.8)	(5.4)	(0.9)	10YR8/2　灰白	φ1㎜前後の長石・チャート・赤色くさり礫を含むが精良なもの	良好	「て」の字状口縁皿 11世紀後半（京Ⅴ〔京都Ⅳ〕期新段階）
	25	19	2区	第1面	206小穴	土師器皿	(9.6)	(6.2)	(1.6)	10YR8/2　灰白	φ1㎜前後の長石・石英・金雲母を含むが精良なもの	良好	「て」の字状口縁皿 11世紀後半（京Ⅴ〔京都Ⅳ〕期新段階） 部分的に淡赤橙色を呈する箇所がみられるため、二次焼成を受けた可能性がある
	26	19	2区	第1面	206小穴	須恵器椀		(5.6)	(2.4)	N5/0　灰	φ5㎜前後のチャートを含む	良好	底部外面に回転糸切り痕が残る
33	27	19	2区	第1面	111土坑	弥生土器甕			(5.9)	7.5YR7/4　にぶい橙	φ1㎜前後の長石・石英・金雲母を含むが精良なもの	良好	外面に右上がりのタタキがみられ、内面は斜位のハケメの後横位のハケメを施す 摂津Ⅲ～Ⅳ様式
	28		2区	第1面	111土坑	弥生土器壺			(3.5)	7.5YR6/6　橙 10YR8/3　浅黄橙	φ1㎜前後の長石・石英・チャートを含むが精良なもの	良好	外面には櫛描きによる波状文と直線文を施す 摂津Ⅲ～Ⅳ様式
	29	19	2区	第1面	111土坑	弥生土器壺			(5.5)	10YR8/4　浅黄橙 10YR7/3　にぶい黄橙	φ1㎜前後の長石・石英・チャートを含むが精良なもの	良好	外面には櫛描きによる3条以上の波状文を施す 摂津Ⅲ～Ⅳ様式

図番号	遺物番号	図版番号	調査区	面・層位	遺構	器種	法量（cm）			色調	胎土	焼成	備考
							口径・長さ	底径・幅	器高・厚み	上段：外面 下段：内面			
33	30	19	２区	第１面	111 土坑	弥生土器壺		8.3	(9.0)	7.5YR5/4　にぶい褐 7.5YR6/6　橙	φ１～３㎜の石英・長石・チャートを多く含む	良好	外面は縦位のヘラミガキ、内面は 17 条 / cmのハケメを施す 摂津Ⅲ～Ⅳ様式
	31	19	２区	第１面	111 土坑	弥生土器鉢	(18.4)		(3.0)	7.5YR7/6　橙	φ１㎜前後の石英・長石・チャートを多く含む	良好	口縁部直下に幅広の凹線が１条廻る 摂津Ⅳ様式か
34	32		２区	第１面	142 土坑	須恵器長頸壺か	(16.0) 最大径		(3.2)	2.5Y8/1　灰白	φ１㎜前後の長石・黒色粒を含むが緻密	良好	肩部外面に自然釉がかかる
35	33		２区	第１面	19 谷状遺構	黒色土器内黒椀		(6.0)	(1.4)	10YR7/3　にぶい黄橙 N3/0　暗灰	φ１㎜前後の長石・石英・金雲母を含むが精良なもの	良好	外側に踏ん張る高い高台
	34		２区	第１面	19 谷状遺構	須恵器杯身	(15.8) 最大径		(2.9)	2.5Y7/1　灰白	φ１㎜前後の石英・長石・チャート・黒色粒を含む	やや甘い	７世紀代の所産
37	35		２区	第２層		肥前系陶器椀		(5.0)	(3.8)	2.5GY6/1　オリーブ灰・5Y8/1 灰白	混和材をほとんど含まない精良なもの	良好	断面は N7/0　灰白を呈する 高台畳付け以外は施釉される 白化粧土を用いた刷毛目　17 世紀後半
	36		１区	第２層（下層）		肥前系陶器椀		(4.7)	(2.1)	7.5Y2/1　灰白～5Y6/3　オリーブ黄 5Y6/3　オリーブ黄	混和材をほとんど含まない精良なもの	良好	断面は 7.5Y7/1　灰白を呈する 高台及び高台内以外は施釉される　釉には細かな貫入が入る　内面見込みにピンホール状の目跡が２箇所みられる　京焼風陶器
	37		２区	第２層		肥前系陶器皿	(11.4)		(2.9)	5Y5/3　灰オリーブ（釉）・ 10YR6/2　灰黄褐	φ１㎜前後の長石を僅かに含むが精良なもの	良好	平皿　体部下半は露胎　17 世紀前半
	38	20	１区	第２層（下層）		肥前系陶器皿	(13.8)		(1.9)	7.5YR5/4　にぶい褐 10Y5/2　オリーブ灰	混和材をほとんど含まない精良なもの	良好	溝縁皿　体部下半は露胎　17 世紀前半
	39		１区	第２層（下層）		肥前系陶器鉢か			(2.0)	5YR4/2　灰褐	混和材をほとんど含まない精良なもの	良好	断面は５YR4/2　灰褐を呈する 内面には白化粧土を用いた刷毛目 17 世紀末～ 18 世紀後半の所産か
	40	20	２区	第２層		肥前系陶器皿		4.2	(1.7)	2.5GY7/1　明オリーブ灰（釉） 10YR6/4　にぶい黄橙	φ１㎜前後の長石を僅かに含むが精良なもの	良好	藁灰釉がかけられる　高台及び高台内は露胎　高台内には兜巾が残る　内面見込みに２箇所、高台脇に３箇所の胎土目がみられる 16 世紀末～ 17 世紀初頭
	41	20	２区	第２層		肥前系陶器皿		(4.7)	(1.6)	5Y8/1　灰白	混和材をほとんど含まない精良なもの	良好	高台畳付け及び内面見込みは釉剥ぎ 高台畳付けに砂目痕　内面には銅緑釉が、外面には透明釉がかけられる 17 世紀中頃～後半　内野山北窯産か
	42	20	１区	第２層（下層）		肥前系陶器皿		(4.0)	(1.2)	2.5Y7/3　浅黄 7.5YR7/6　橙	混和材をほとんど含まない精良なもの	良好	断面は 10Y8/2　灰白を呈する 高台端部は欠失　高台及び高台内、高台脇は露胎 内面見込みに山水文が描かれる　高台内の銘款は確認出来ない　釉には細かな貫入が入る 京焼風陶器

図番号	遺物番号	図版番号	調査区	面・層位	遺構	器種	法量（cm）			色調	胎土	焼成	備考
							口径・長さ	底径・幅	器高・厚み	上段：外面 下段：内面			
37	43	20	１区	第２層（下層）		肥前系陶器皿か		(4.5)	(1.3)	2.5GY8/1　灰白 7.5Y8/2　灰白	混和材をほとんど含まない精良なもの	良好	断面は 5Y8/1　灰白を呈する 胎土は磁器に近く、硬質 高台は大半を欠失　全面施釉され、細かな貫入が入る　内面見込みは釉剥ぎされ、そこに銀・青彩される　また、内面見込みには赤・青彩により草花文が描かれる　上絵　京焼風陶器か
	44	20	１区	第２層（下層）		丹波焼火入	(12.4)		(4.5)	10YR6/1　褐灰	φ１㎜前後の長石・石英を含み、やや粗い	良好	口縁端部は水平に仕上げ、口縁部はやや肥厚させる　外面には浅い凹線を１条廻らせる
	45		１区	第２層（下層）		肥前系陶器鉢か		(15.7)	(5.8)	5YR4/3　にぶい赤褐～2.5Y6/4 にぶい黄 5Y5/3　灰オリーブ	φ１㎜前後の長石・石英を含むが精良なもの	良好	断面は 2.5Y7/1　灰白を呈する 外面には鉄釉が、内面には透明釉がかけられる
	46		１区	第２層（下層）		焼締め陶器擂鉢			(1.8)	7.5YR7/6　橙 5YR7/6　橙	φ１～５㎜の長石・チャートを多く含む	良	内面見込みの擂目は三角パターン　堺焼擂鉢か
	47	20	１区	第２層（下層）		土師器焙烙	(20.0)		(4.3)	5YR4/6　赤褐 2.5YR6/8　橙	φ１～３㎜の長石・石英・赤色くさり礫・金雲母を多く含むが精良なもの	良好	底部から屈曲してやや内傾しながら口縁部が立ち上がる　口縁部外面に煤が付着 積山分類Ｄ類　　18 世紀初頭の所産か
	48	20	２区	第２層		焼締め陶器鉢か		(11.4)	(5.2)	5Y7/1　灰白 5Y7/1　灰白・7.5YR7/4　にぶい橙	φ１～３㎜の長石・石英・黒色粒を含むが精良なもの	やや甘い	高台は削り出し高台で、輪状高台となる　高台以外の内外面に乳白色の釉がかけられる　焼成不良であったためか、釉はガラス化していない
	49	20	１区	第２層（下層）		肥前系染付碗		(4.0)	(2.9)	10GY8/1　明緑灰	緻密	良好	断面は N8/0　灰白を呈する 高台内は削っており、縮緬状の皺が顕著で露胎となっている　畳付けも露胎 17 世紀前半
	50		１区	第２層（下層）		肥前系染付碗		(4.0)	(2.4)	7.5GY8/1　明緑灰	緻密	良好	断面は N8/0　灰白を呈する　高台は大半を欠失 高台内には崩れた太明年製の銘款がみられる 18 世紀前半
	51	20	１区	第２層（下層）		肥前系染付碗		(4.2)	(1.9)	10Y8/1　灰白～５Y8/2　灰白 10Y8/1　灰白	緻密	良好	断面は N8/0　灰白を呈する　　高台畳付けは釉剥ぎされるが、高台及び高台内は施釉　　畳付けの一部に発泡した箇所が認められることから、砂目積みの痕跡があった可能性が想定される　　17 世紀前半
	52	20	１区	第２層（下層）		肥前系染付皿		(3.6)	(1.6)	N8/0　灰白	緻密	良好	断面は N8/0　灰白を呈する　　高台畳付けは釉剥ぎされるが、高台及び高台内は施釉　　高台内に成化年製の銘款がみられる　18 世紀中頃～後半
	53	20	１区	第２層（下層）		肥前系染付皿		(5.2)	(1.9)	10GY8/1　明緑灰	緻密	良好	断面は N8/0　灰白を呈する　　高台畳付けは釉剥ぎされるが、高台及び高台内は施釉

図番号	遺物番号	図版番号	調査区	面・層位	遺構	器種	法量（cm）			色調	胎土	焼成	備考
							口径・長さ	底径・幅	器高・厚み	上段：外面 下段：内面			
37	54		１区	第２層（下層）		肥前系白磁皿	(9.4)		(2.2)	7.5GY8/1　明緑灰（釉薬）・10YR5/2　灰黄褐（素地）	緻密	良好	平皿　内面見込みは蛇の目釉剥ぎ　体部外面下半は露胎か
	55	20	１区	第２層（下層）		緑釉陶器皿		3.7	(0.6)	5Y6/1　灰 5Y7/1　灰白	混和材をほとんど含まない精良なもの	良好	硬質の緑釉陶器　釉は5Y6/2　灰オリーブを呈する　高台は削り出しで、円盤状の平高台　高台底面には回転糸切り痕が残る
	56	20	２区	第２層		白磁皿	(11.0)		(2.6)	N8/0　灰白（釉）	混和材をほとんど含まない精良なもの	良好	口縁端部内面は釉剥ぎされ、口禿げとなる 白磁皿Ⅸ－３類　　13世紀中頃～14世紀初頭
	57		１区	第２層		須恵器杯身	(13.2) 最大径		(1.9)	N6/0　灰	φ１～２㎜前後の石英・長石・黒色粒を含む	良	口縁部欠失　短い受け部が水平に伸びる　７世紀代の所産
	58	20	１区	第２層（下層）		須恵器甕	(13.0)		(2.8)	N5/0　灰 N6/0　灰	φ１～２㎜前後の石英・長石・黒色粒を含む	良好	口縁端部はやや肥厚　口縁部外面には浅い凹線が廻る　頸部外面はカキメ ７世紀代の所産か
	59	20	２区	第１面	鋤溝群	瓦質土器羽釜	(23.0)		(2.9)	2.5Y7/1　灰白	混和材をほとんど含まない精良なもの	良	鋤柄分類Ｃ群Ⅳ類 15世紀後半～16世紀初頭
	60	20	２区	第１面	鋤溝群	須恵器甕	(13.0)		(2.8)	N7/0　灰白 N5/0　灰	φ１㎜前後の石英・長石を含む	良好	外面は斜位の平行タタキの後縦位の平行タタキ内面には大振りな同心円文の当て具痕が残る
38	61	20	１区	第２層（下層）		須恵器杯Ｂ蓋	(12.6)		(1.7)	N7/0　灰白～6/0灰 N6/0　灰	φ１㎜前後の長石・黒色粒を僅かに含む精良なもの	良好	口縁部内面及び外面に自然釉がかかる ８世紀代の所産
	62	20	１区	第２層（下層）		須恵器杯Ｂ蓋		(10.8)	(2.7)	10G4/1　暗緑灰 N6/0　灰	φ１㎜前後の長石・石英・黒色粒を含む精良なもの	良好	断面は2.5YR5/1　赤灰を呈する ８世紀代の所産
	63	20	１区	第２層（下層）		須恵器すり鉢		(9.2)	(3.6)	7.5Y4/3　暗オリーブ	φ１㎜前後の長石・石英・チャートを含む精良なもの	良好	断面は2.5Y7/2　灰黄を呈する 内外面には自然釉が掛かる 底部外面には滑り止めのためか、不定方向の擦痕がみられる
	64		１区	第５層		須恵器杯身	(14.0) 最大径		(2.3)	5B4/1　暗青灰 5PB6/1　青灰	φ１㎜前後の長石・石英・黒色粒を含む	良好	口縁部は欠失　外面には溶融しかかった直径１㎜前後の長石や石英が多量に付着　離れ砂的なものだったのか　　７世紀代の所産か
	65		１区	第５層		須恵器杯Ｂ		(10.4)	(1.2)	N6/0　灰	φ１㎜前後の長石を多く含む	良	
	66		１区	第５層		黒色土器内黒椀		(6.8)	(1.8)	2.5Y7/1　灰白 7.5Y2/1　黒	微細な長石を多く含むが、密	良	摩滅著しく調整不明 内面に褐色付着物がみられる
	67	20	２区	第１（地山）面精査中		灰釉陶器皿	(9.0)		(1.7)	5Y8/1　灰白	混和材をほとんど含まない精良なもの	良好	口縁下約１㎝に幅約３㎜の釉が薄くなった箇所がある　重ね焼きに関係するものか　10世紀前半
	68			第１（地山）面精査中		須恵器杯身	(11.8)		(2.7)	N6/0　灰	φ１㎜前後の長石・石英・黒色粒を含む精良なもの	良好	受け部は短く水平に伸び、口縁部は内傾しながら立ち上がる　黒色粒が顕著　　７世紀代
	69	18	１区	第１面	19谷状遺構	青磁碗					緻密	良好	龍泉窯系の鎬がみられない蓮弁文青磁碗 13世紀初頭～前半か

※法量欄の（　）付き数値は復元値を示す

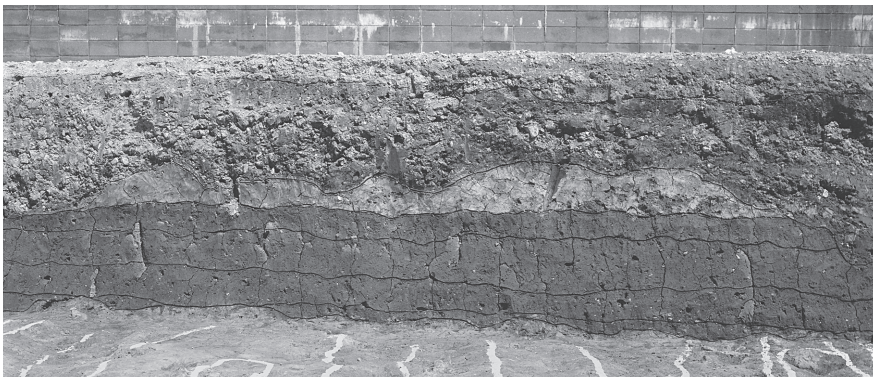
写　真　図　版

図版 1　1948 年米軍撮影航空写真

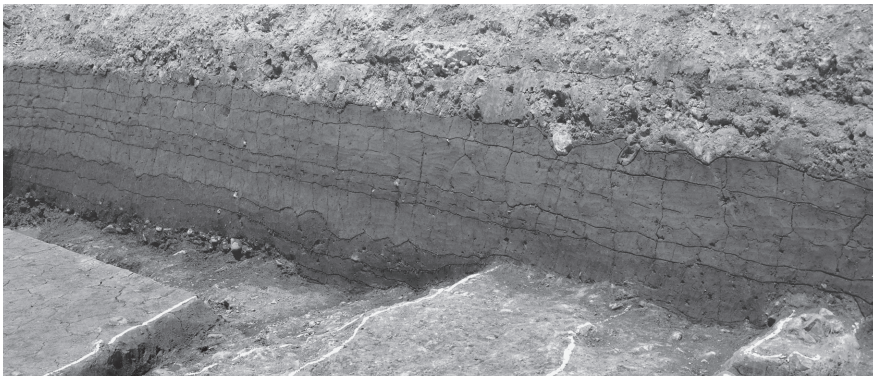
国土地理院　1948 年米軍撮影航空写真（1948 年 3 月 19 日撮影に加筆）

図版２　１・２区

１．１区北壁東側　断面
（南から）



２．１区北壁中央　断面
（南から）



３．１区北壁西側　断面
（南東から）

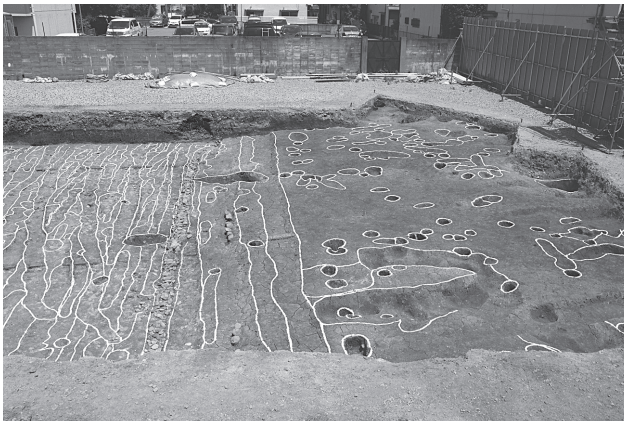
４．２区南壁東側　断面
（北から）

５．２区南壁西側　断面
（北から）

１．第１面　全景（東から）

２．第１面　東側遺構　検出状況（南から）

３．第１面　西側遺構　検出状況（南から）

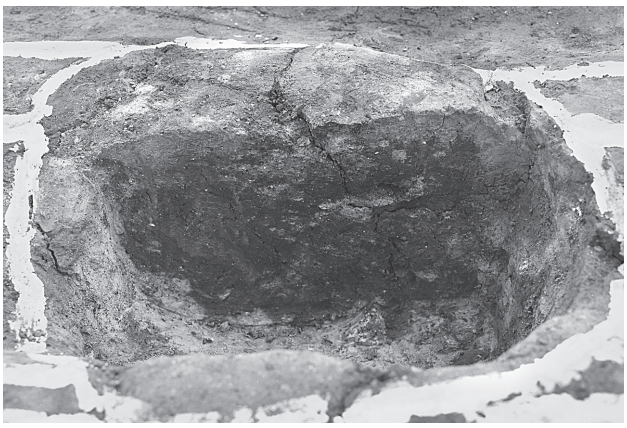


４．第１面　東側遺構　完掘状況（南から）

５．第１面　西側遺構　完掘状況（南から）

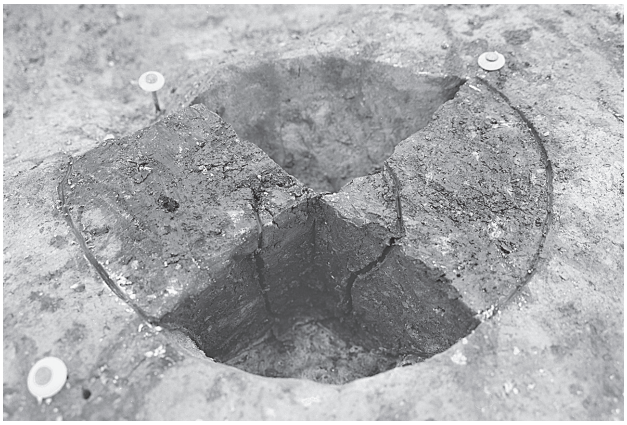
図版４　１区

１．掘立柱建物１　全景（南から）

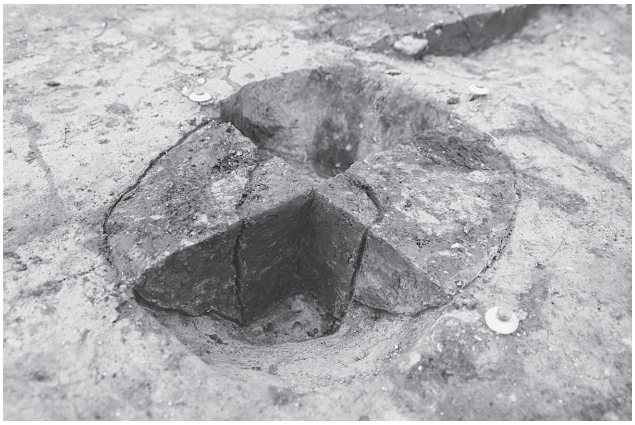


２．86 柱穴　断面（西から）

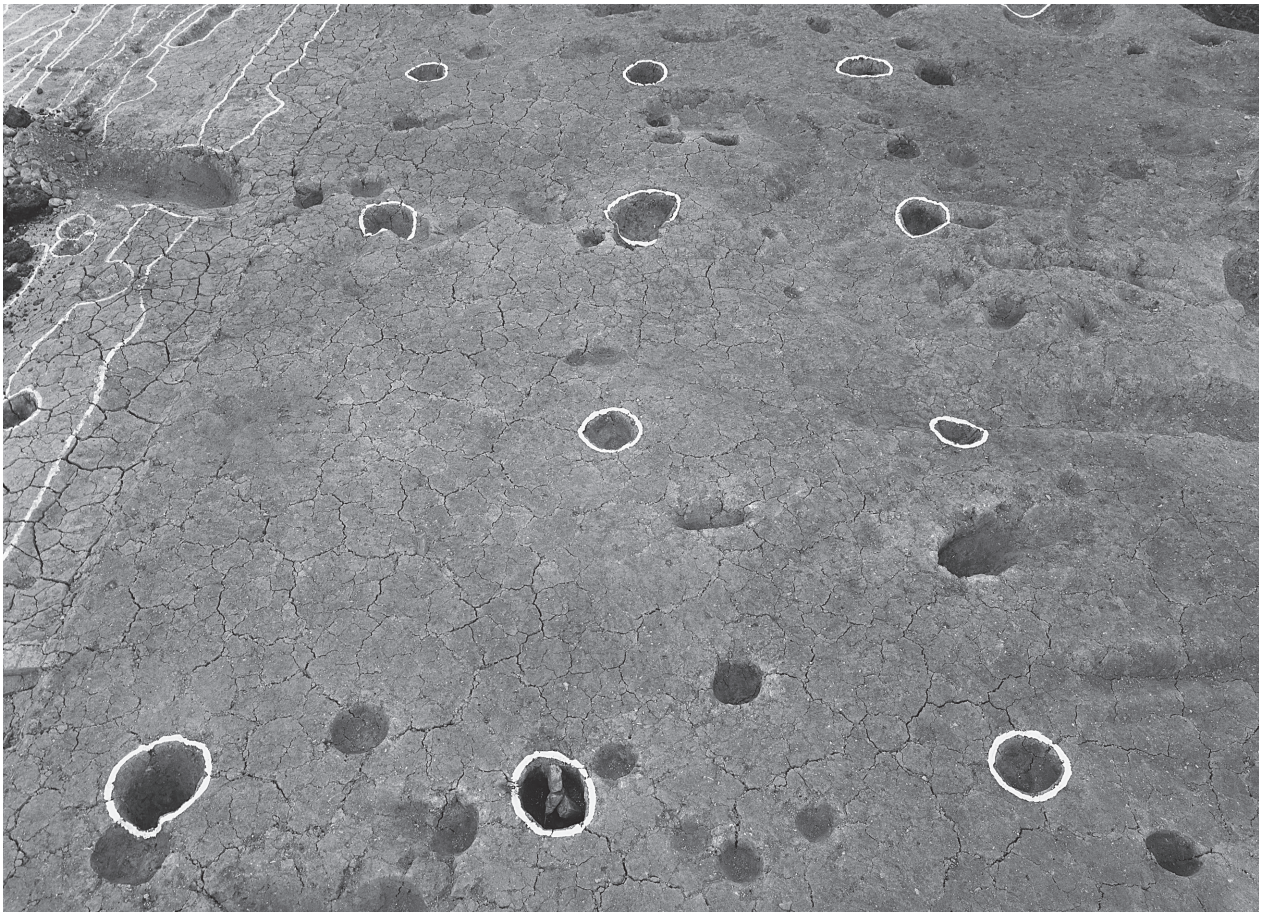
３．75 柱穴　断面（北西から）



４．103 柱穴　断面（南東から）

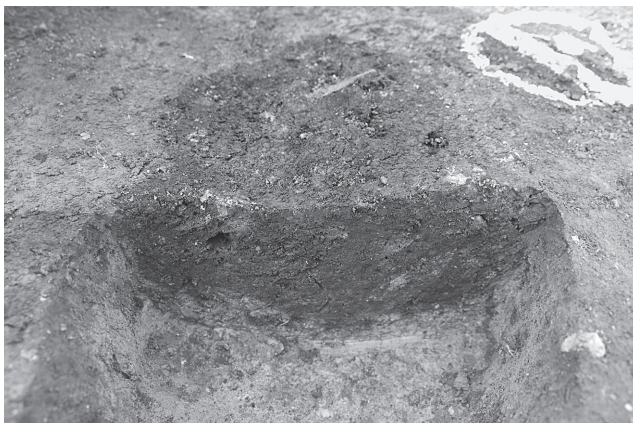


５．106 柱穴　断面（南西から）



１．掘立柱建物２　全景（南から）

２．33（左）・34（右）柱穴　断面（南西から）



３．15 柱穴　断面（北から）

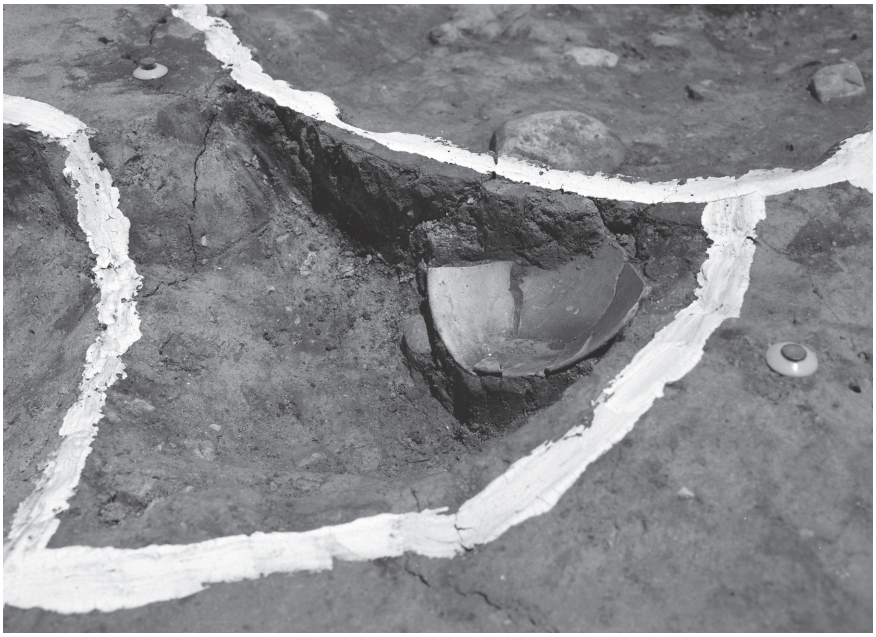
４．48（左）・47（右）柱穴　断面（西から）

５．49 柱穴　断面（南から）

図版６　１区

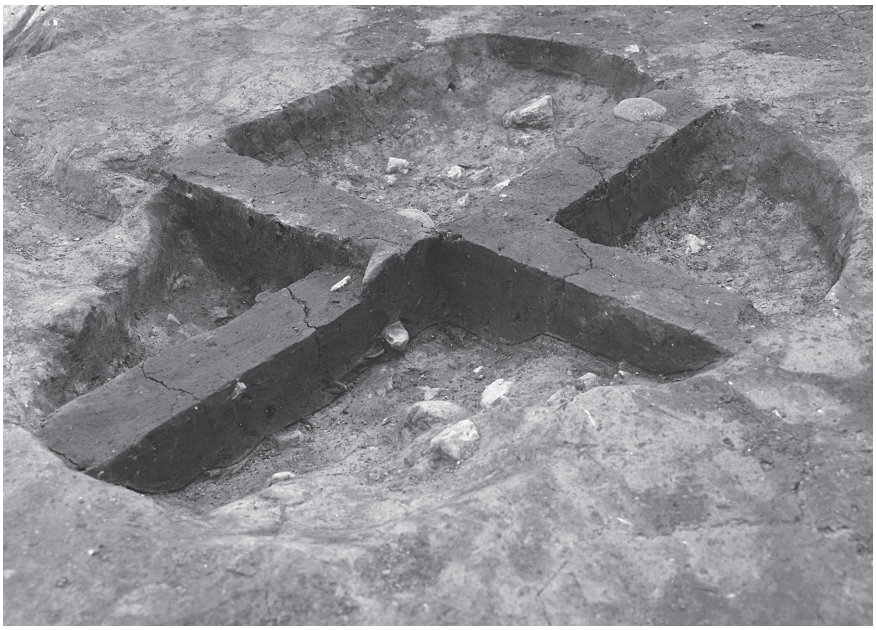
１．83 土坑・84 溝他
（西から）

２．83 土坑　遺物出土状況
（南から）

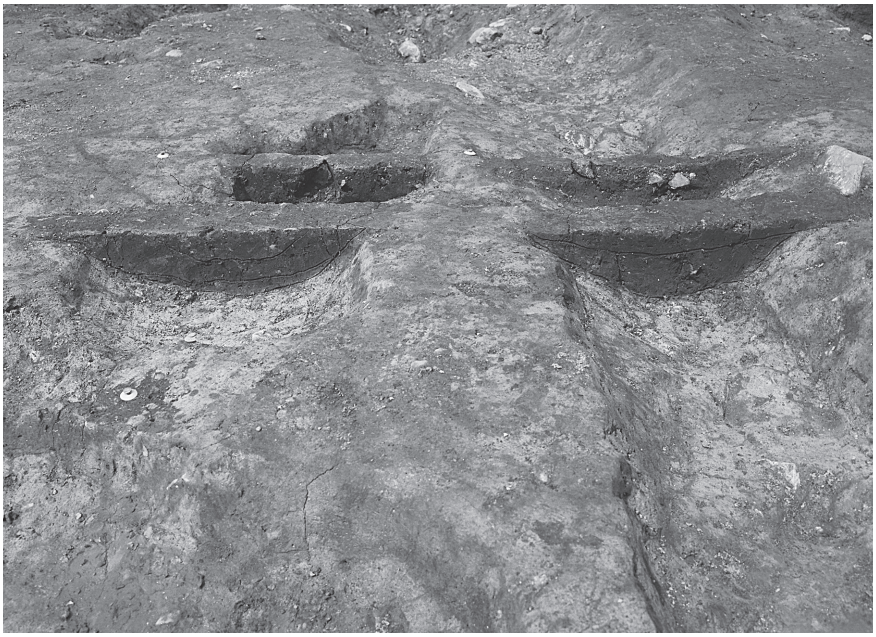


３．95 土坑　遺物出土状況
（南西から）

１．83 土坑　断面
（南西から）



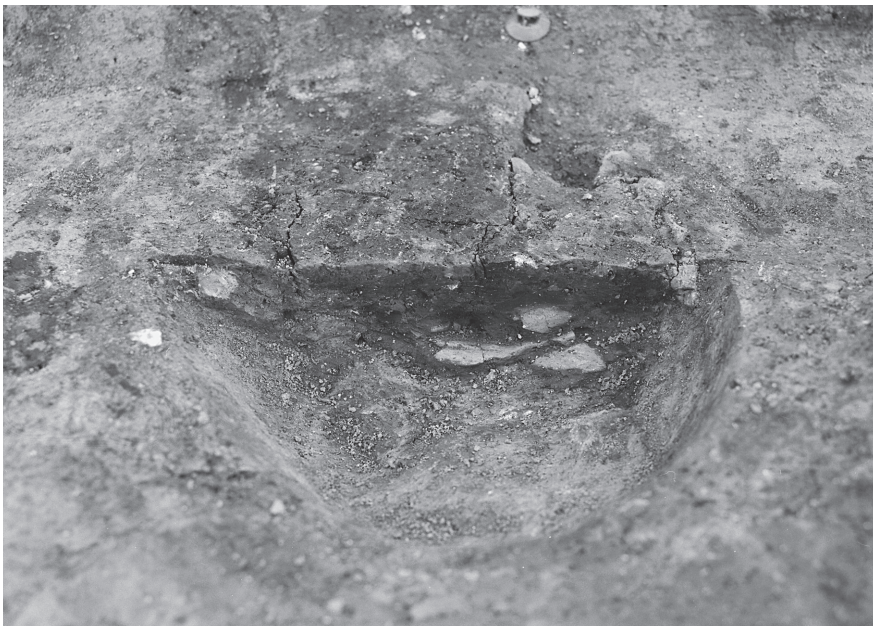
２．83 土坑　断面
（北東から）



３．85 土坑（左）・
84 溝（右）　断面
（東から）

図版８　１区

１．50 小穴　断面
（北から）



２．88 小穴　断面
（西から）

３．88 小穴
遺物出土状況
（西から）

１．62 溝　検出状況（南から）

２．62 溝　蓋石除去状況（南から）

３．62 溝　断面（南から）

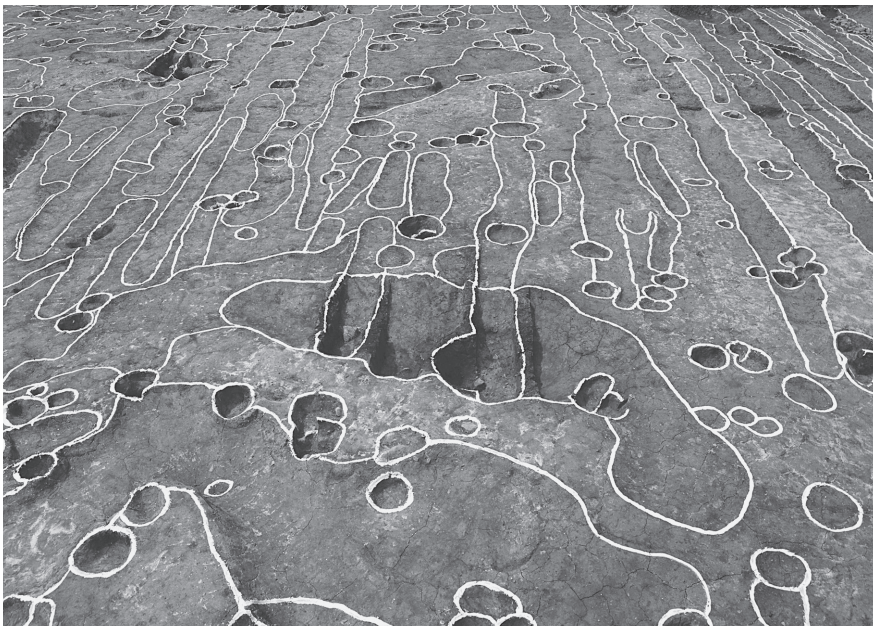
４．94 溝　断面（西から）

５．41 落込み　断面（東から）

６．79 落込み　断面（南東から）

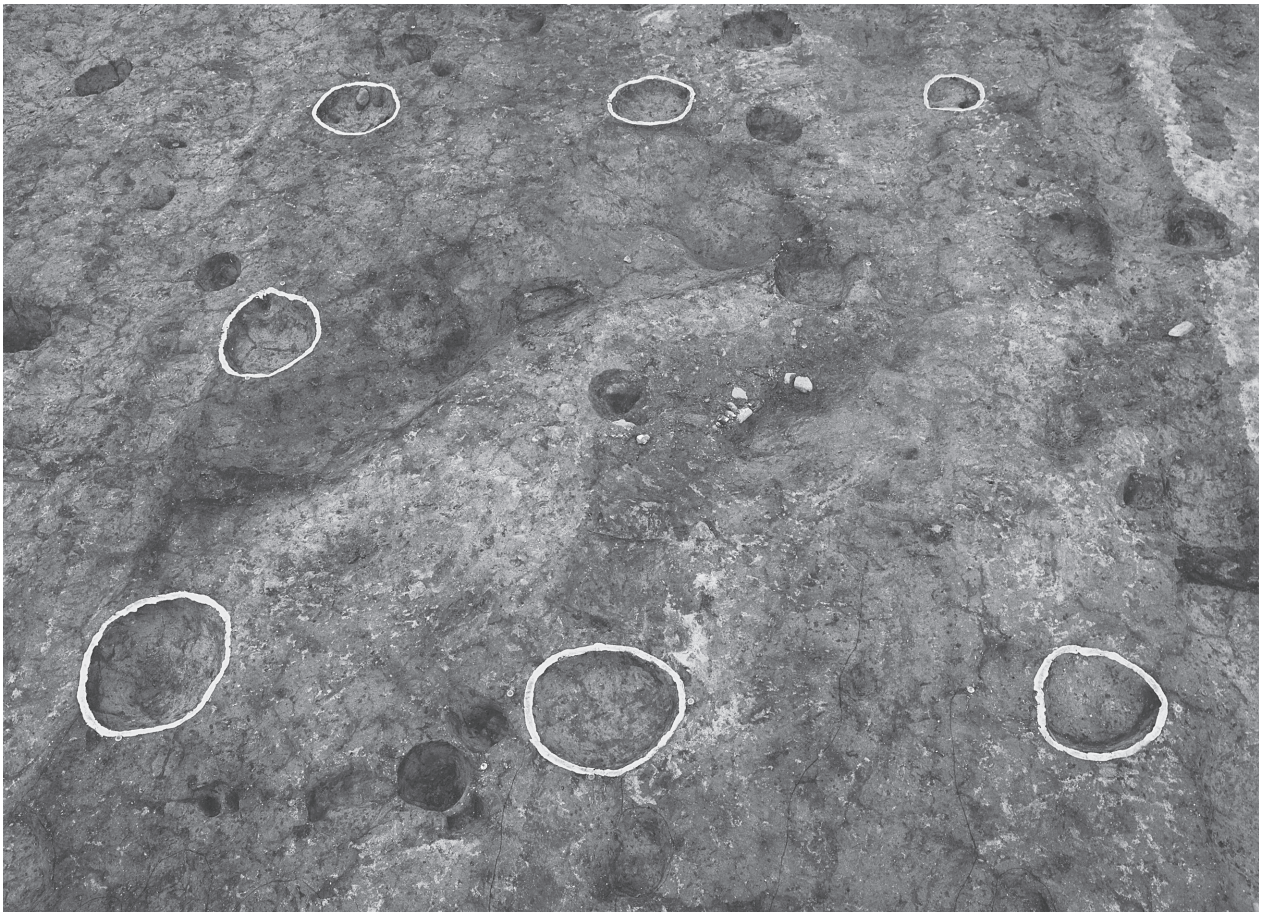
図版 10　２区

１．第１面　全景
（東から）



２．第１面
中央部遺構
完掘状況（南から）

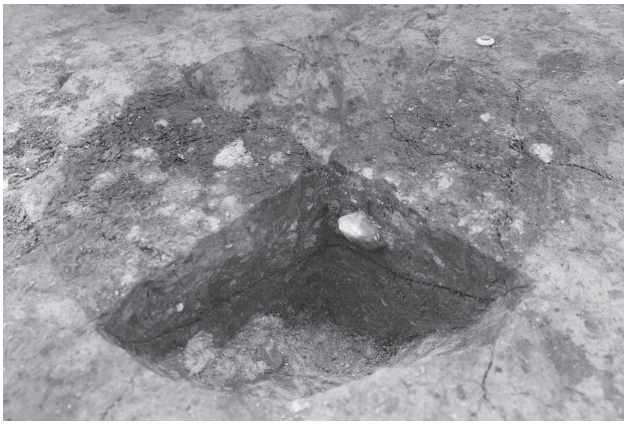
３．第１面
西側遺構　完掘状況
（南から）



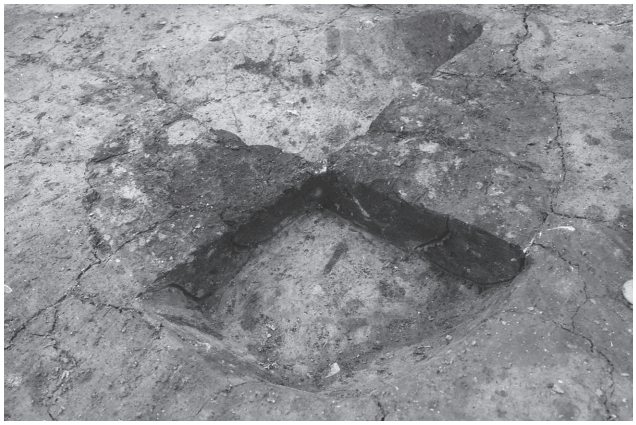
1．掘立柱建物３　全景（南から）

2．224 柱穴　断面（北東から）

3．225 柱穴　断面（南西から）



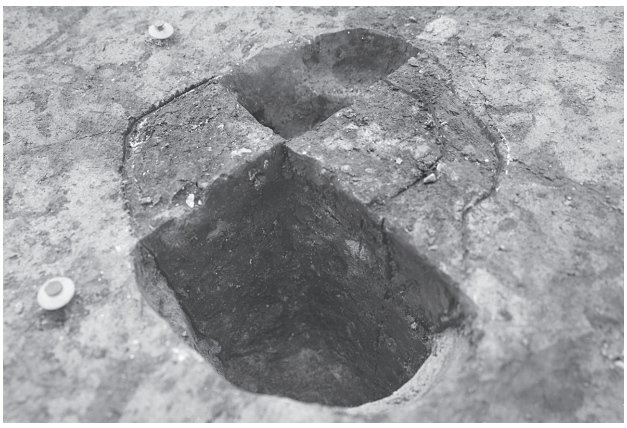
4．229 柱穴　断面（北西から）



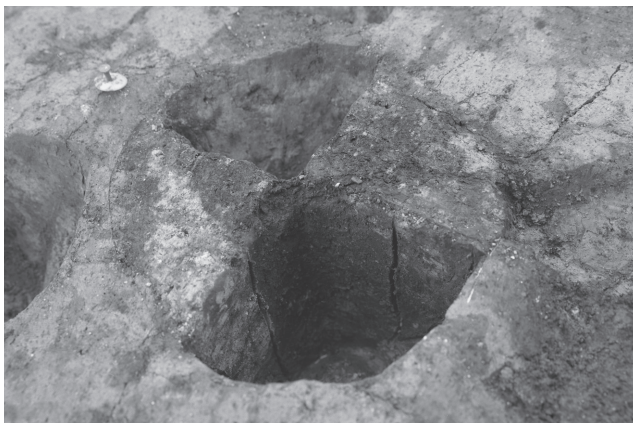
5．231 柱穴　断面（南西から）

図版 12　２区

1．掘立柱建物５　全景（南から）

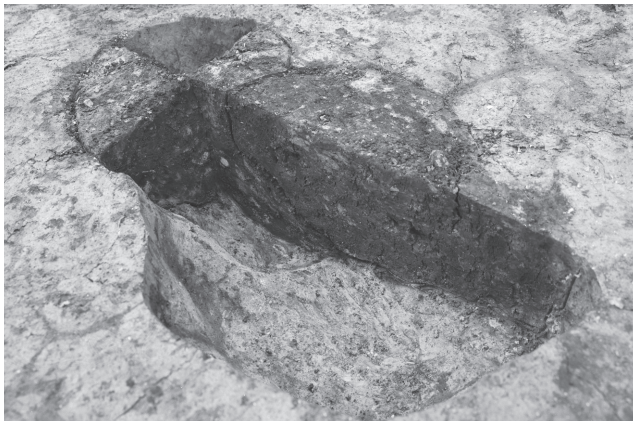


2．107 柱穴　断面（南東から）

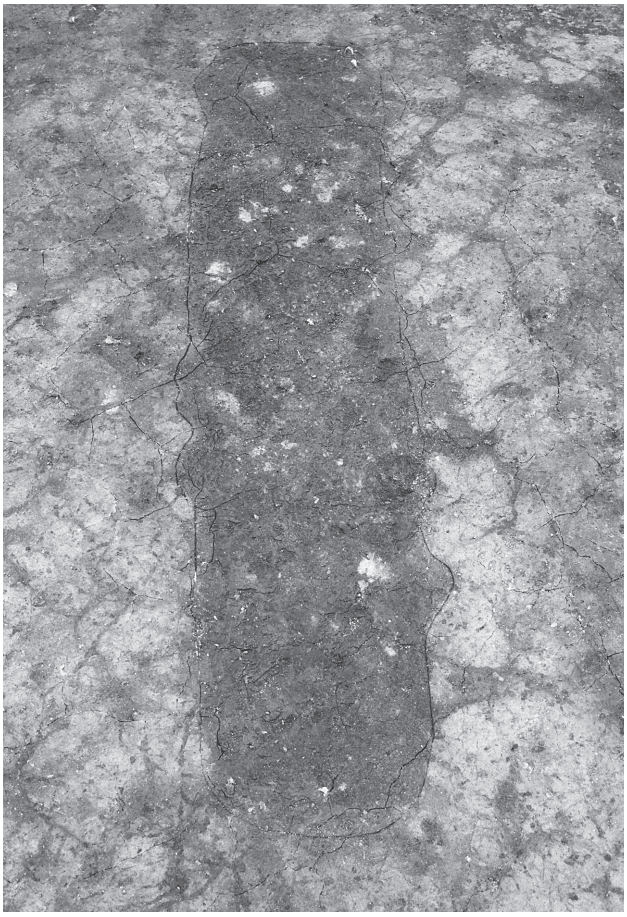


3．260 柱穴　断面（北東から）

4．257（左）・251（右）柱穴　断面（北西から）



5．253（左）・254（右）柱穴　断面（南西から）



1．124 土坑　検出状況（南から）

2．124 土坑　完掘状況（南から）

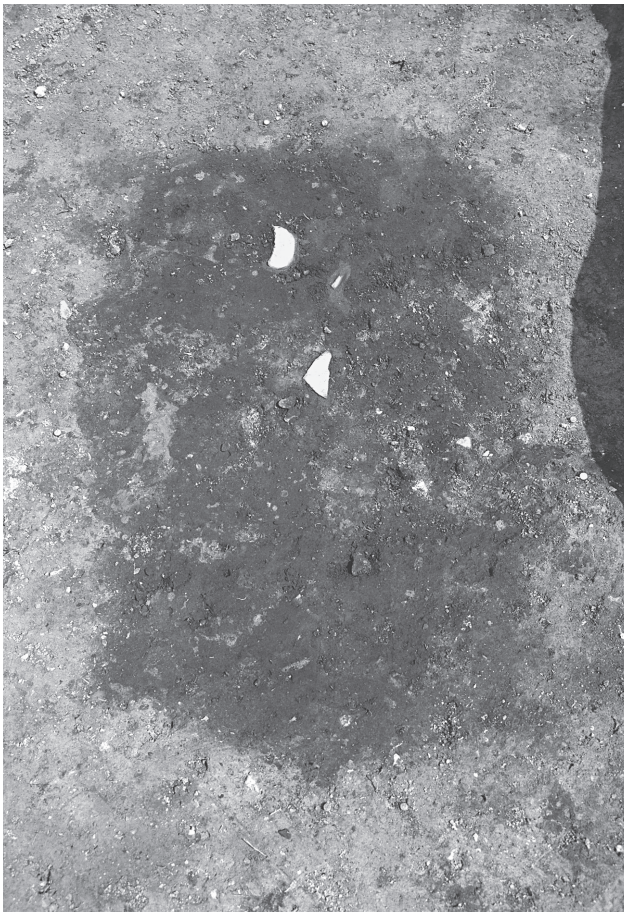
3．124 土坑　断面（南から）

4．124 土坑　断面（北から）

5．124 土坑北半　断面（西から）

6．124 土坑南半　断面（東から）

図版 14　２区

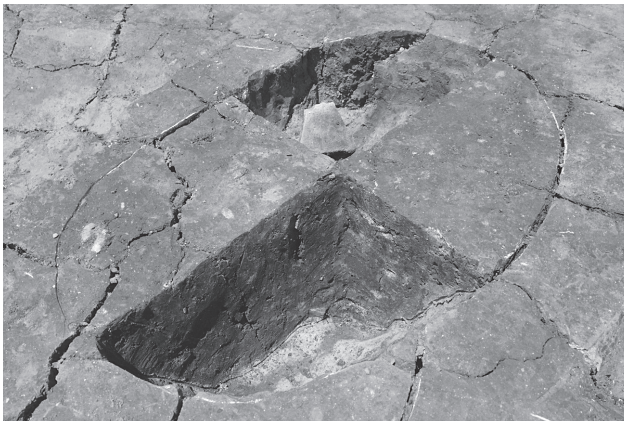


1．111 土坑　検出状況（南から）

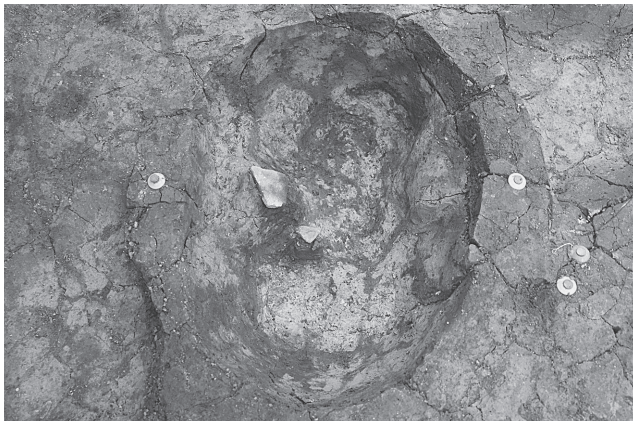
2．111 土坑　遺物出土状況（南から）

3．111 土坑　断面（北西から）

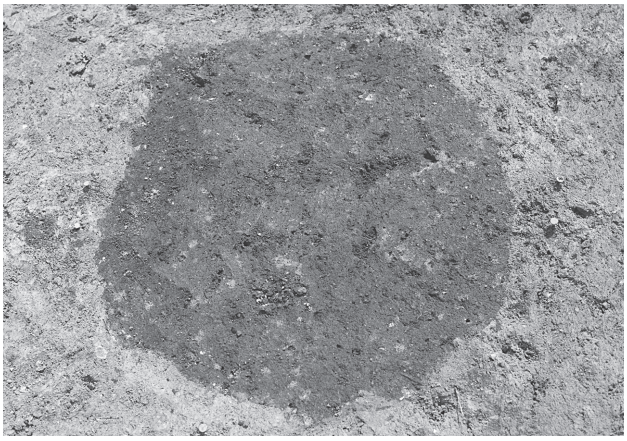
4．111 土坑　断面（南東から）



5．164 土坑　断面（南東から）



6．164 土坑　完掘状況（南から）


1．112 土坑　検出状況（西から）

2．112 土坑　礫出土状況（西から）

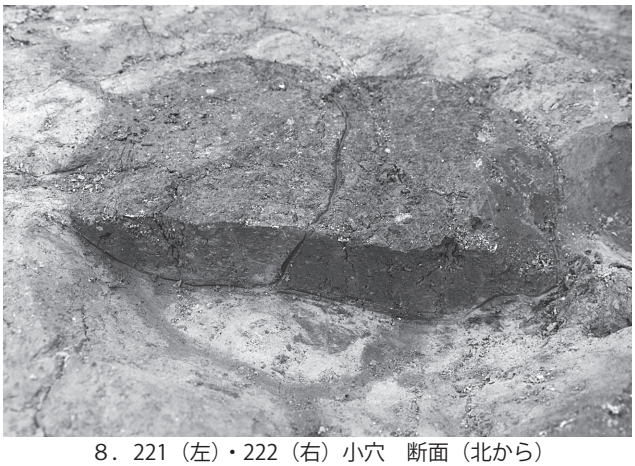
3．112 土坑　断面（南西から）

4．112 土坑　断面（北東から）

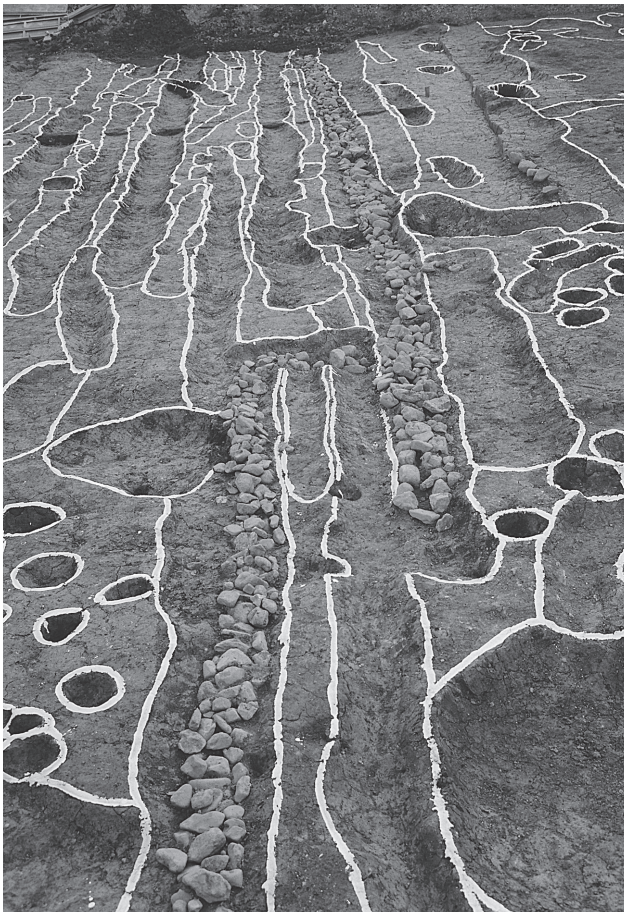
5．223 土坑　断面（北から）

6．132 小穴　断面（西から）

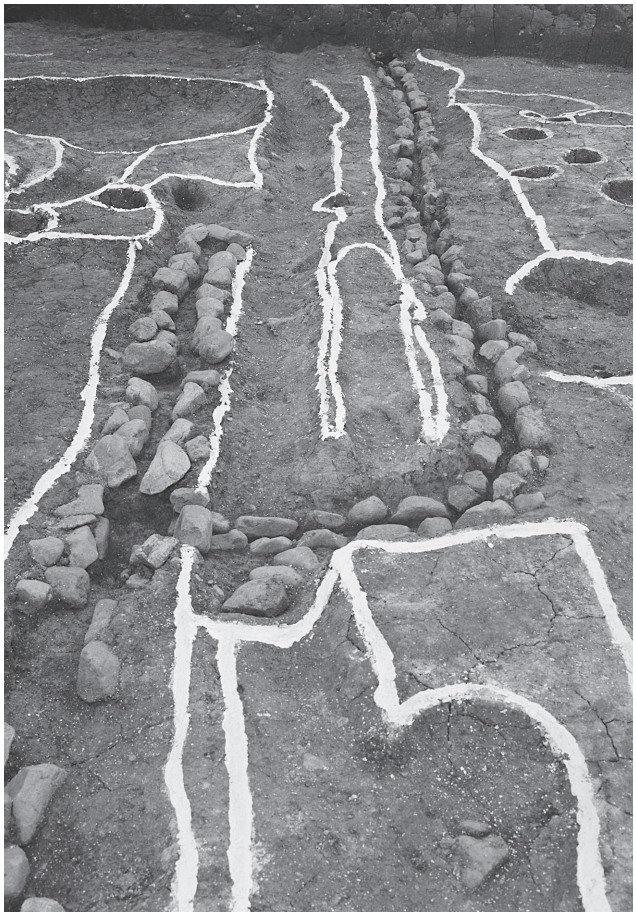
7．170 小穴　断面（南から）


8．221（左）・222（右）小穴　断面（北から）

図版 16　２区



1．62 溝　検出状況（南から）

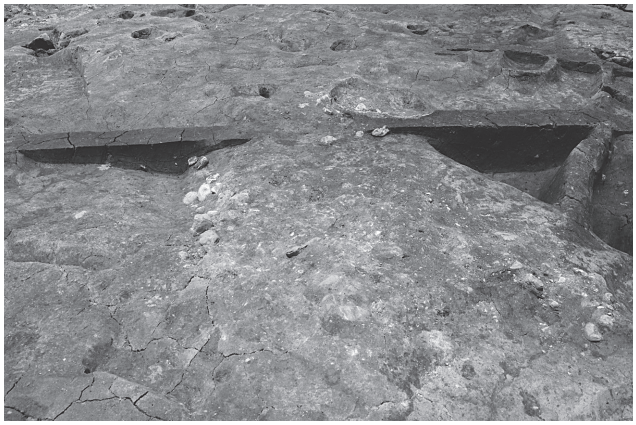


2．62 溝　蓋石除去状況（北から）

3．62 溝　分岐部分（南から）

4．19 谷状遺構・264 溝　断面（南東から）

5．113 落込み　断面（南東から）



6．157 落込み　断面（南東から）

7
8
5
9

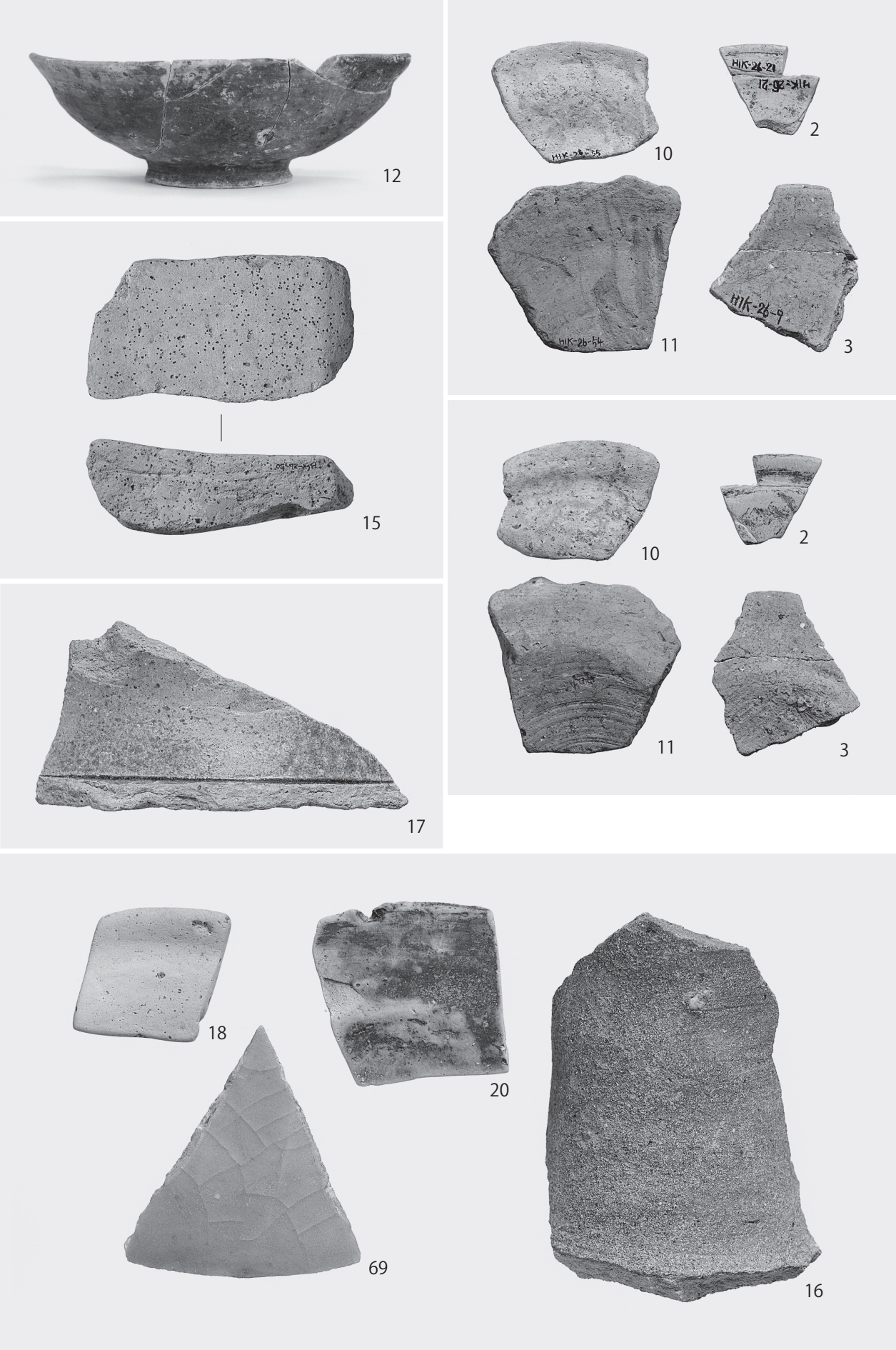
7

5

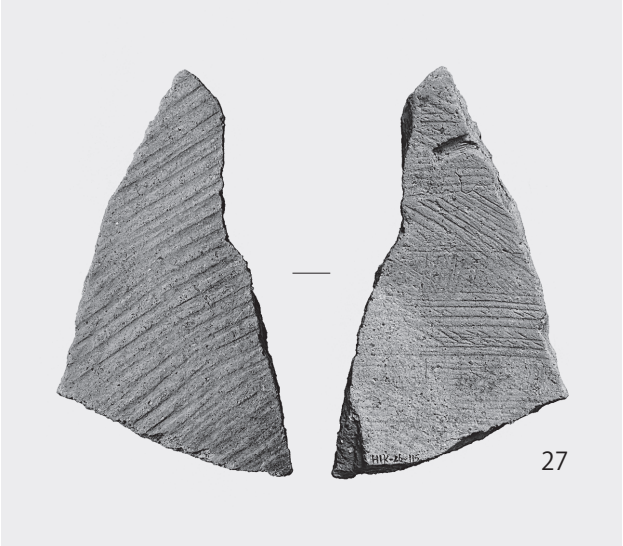
9

9

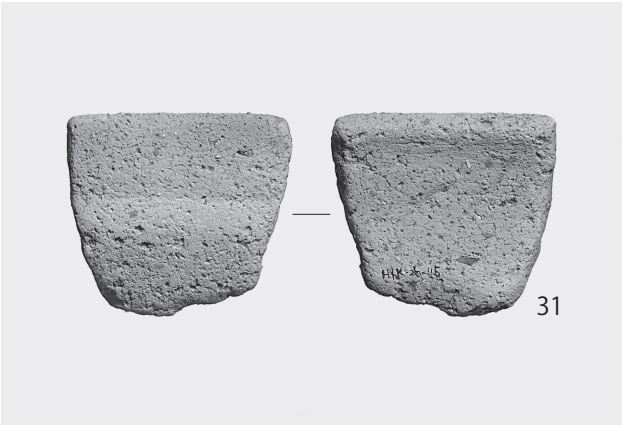
図版 18　1 区　遺構出土遺物



22
26
23
25
24

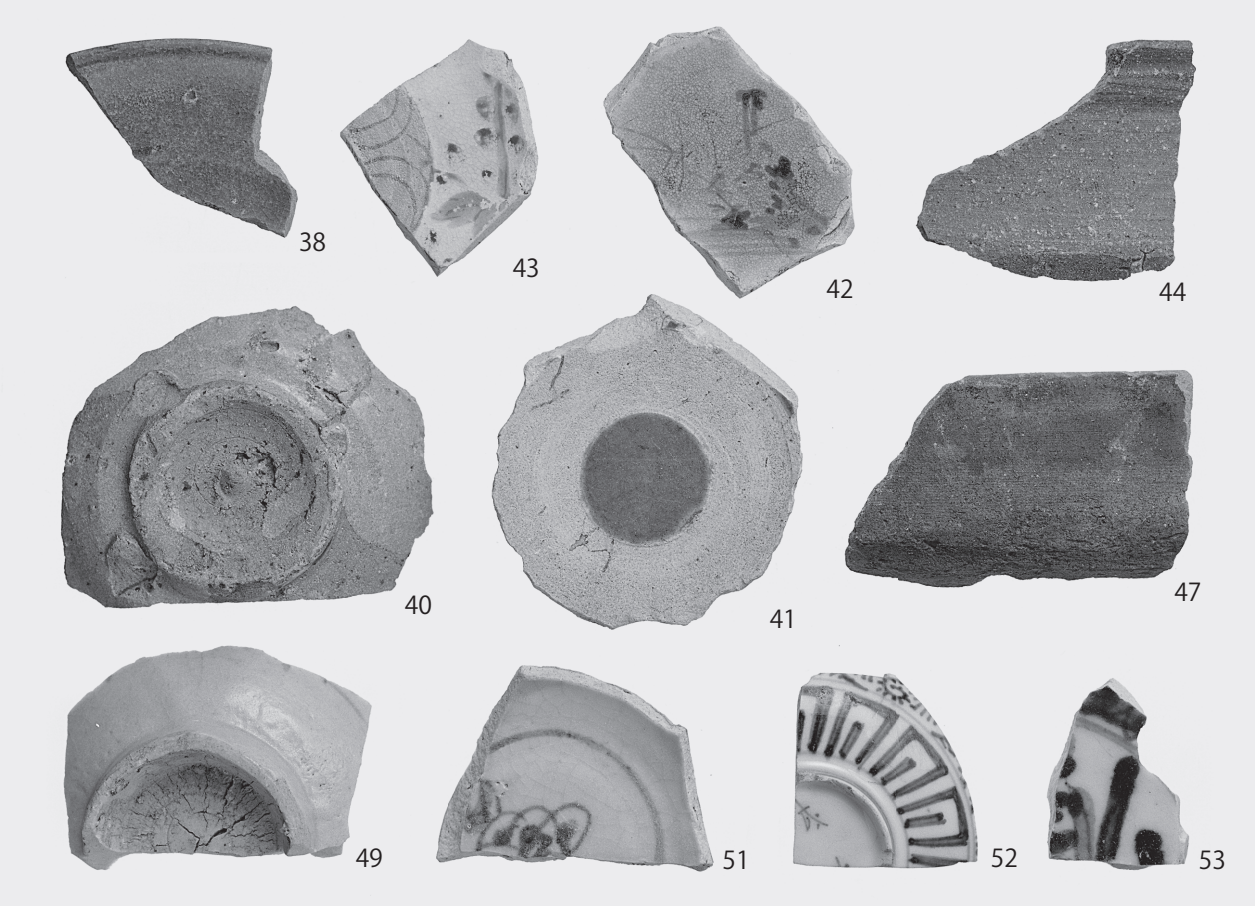

27

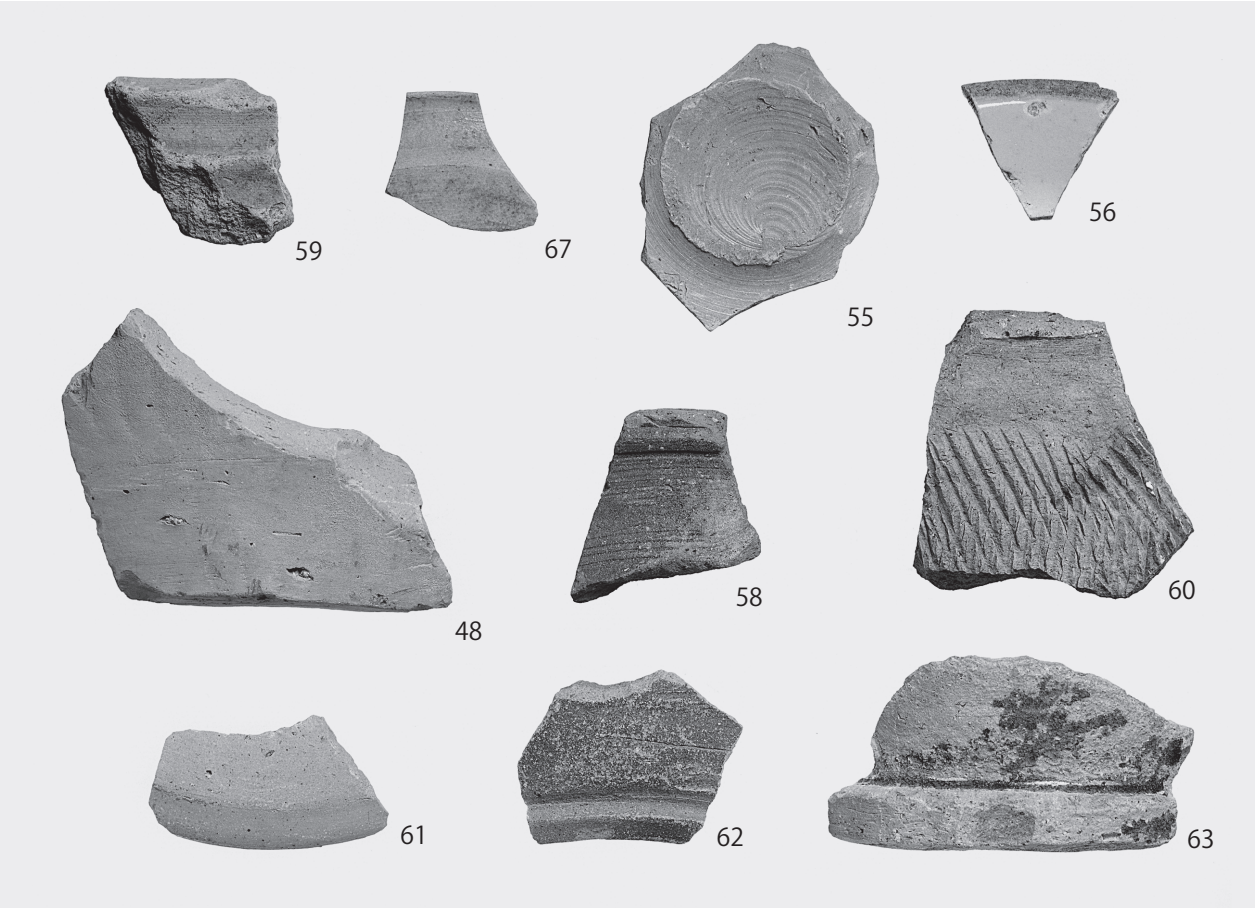
29


31

30

図版 20　1・2区　包含層出土遺物





報　告　書　抄　録

ふりがな	ほたるがいけきたいせき
書名	蛍池北遺跡
副書名	宗教法人　神慈秀明会教会（豊中支部）建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第242集
編著者名	新海正博
編集機関	公益財団法人　大阪府文化財センター
所在地	〒590－0105　大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号　　TEL072(299)8791
発行年月日	2013年11月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
ほたるがいけきたいせき 蛍池北遺跡	とよなかし 豊中市 ほたるがいけきたまち 蛍池北町1丁目48	27208	15	34° 47′ 49″	135° 26′ 47″	2013.4.22 ～ 2013.6.28	933	宗教法人 神慈秀明会教会 （豊中支部） 建築工事

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
蛍池北遺跡	集落 生産域	江戸 古代（平安） 弥生	鋤溝群・石組暗渠・ 掘立柱建物・土坑・ 小穴・溝・谷・落込み	弥生中期土器・ 須恵器・土師器・ 黒色土器・瓦器・ 国産陶磁器・ 輸入磁器・砥石	平安時代後期の 掘立柱建物群

要約	蛍池北遺跡では近世期の広範な耕作地が営まれていた。この耕作地造成のため、大幅な土地改変が実施されたこともあり、中世期の様相は不詳であった。しかし、古代（平安時代後半）の掘立柱建物群や土坑を検出することができ、蛍池北遺跡の歴史像に新たな知見を加えることとなった。 また土坑状変形と推定される不定形な落込みが複数みられ、平安時代以前に大規模な地震があったものと推察された。

公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書　第242集

蛍　池　北　遺　跡

宗教法人　神慈秀明会教会（豊中支部）建築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 /　2013 年11月 29日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
〒590-0105　大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号
印刷・製本 /　株式会社　明　新　社
奈良市南京終町３丁目464番地